暁なつめ
NATSUME AKATSUKI
ILLUSTRATION
カカオ・ランタン
KAKAO LANTHANUM
7
戦闘員、派遣します!
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
角川スニーカー文庫

戦闘員、派遣します！
7
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
「それで、あたしは誰を焼けばいいんだ？」
ベリアル
BELIAL
キサラギ最高幹部の一人で
通称〝業火のベリアル〟。
安物のコスプレAV嬢っぽい
幹部服を無事、卒業。
この巻のメインヒロイン
ROKUGOU'S VIEW
胸元をベルトで強調しているのは
なんなんですか？
どうしてすぐエロくなるんですか。

「おい六号。
アスタロト様やリリス様と一緒に写ってる、
このおどおどした感じの美人は誰だ？」
「何言ってんだよ、
改造手術を受ける前のベリアル様じゃないか」
在りし日の3人

ロゼ
ROSE
「何ですか、やるんですか!? いいですよ、今こそ決着を付けましょう！」
VS
「ラアアアアーーッ！」
カチワリちゃん
KACHIWARICHAN
戦闘員六号
SENTOUIN ROKUGOU
喧嘩するほど仲が……？
ROKUGOU'S VIEW
コラッ、お前ら喧嘩すんな！
似たような年なんだから仲良くしろよ！

ROKUGOU'S VIEW
しっかりしろアリス、
俺達が変な反応を見せると
振り向かれてバレるだろうが。
戦闘員十号
SENTOUIN JUUGOU
「今回の件について謝罪はしよう。その上で、これまでの関係についても維持したいと考えている」
フリッツ
FRITZ
キサラギ＝アリス
KISARAGI ALICE
彼こそが戦闘員十号

CONTENTS

COMBATANTS WILL BE DISPATCHED

口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン

戦闘員、派遣します！７

暁 なつめ

角川スニーカー文庫

23072

本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本電子書籍は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

プロローグ

俺の部屋を勝手に物色し、アルバムを引っ張り出して眺めていたアリスが言った。
「おい六号。アスタロト様やリリス様と一緒に写ってる、このおどおどした感じの美人は誰だ？　自分のデータベースには見当たらねえぞ」
誰の事を言っているのかと写真を覗けば、そこにはリリスとアスタロトの間に挟まれた美女が、身を縮こまらせてはにかんでいる。
この写真は俺がキサラギに入社して間もない頃、アスタロトとリリスが喧嘩して、それをこの美女が仲裁し、仲直りの証だと撮らされたヤツだ。
高い身長を気にして、いつも猫背気味に体を縮めているその人は。

「何言ってんだよ、改造手術を受ける前のベリアル様じゃないか」
　俺の何気なく言った一言にアリスが写真を二度見した。
「……この清楚系の黒髪美人が、あの真っ赤な髪したベリアル様だって？」
　写真に写っているベリアルは、落ち着いた柄の白い和装だ。
　ついでに言えばアスタロトはＯＬみたいなスーツ姿だし、リリスに至っては学生服だ。
　アスタロトは不機嫌さを隠しもせず、リリスは真面目な顔で直立したまま笑いもしない。
「そうだよ。改造手術を受ける前のベリアル様はキサラギ一の常識人だったんだ。優しくて清楚で恥ずかしがり屋でエロくって、暇を見付けてはからかったもんさ」
「お前はこんな大人しそうな上司にセクハラしたのか」

呆れたようなアリスの言葉に、当時のベリアルへ思いを馳せる。
「この頃のベリアル様は武芸全般に通じている上に頭も良いし、体もエロいし美人なのに、とにかく自分に自信が無くてな。貴方は十分魅力的ですよと教えたくて、良かれと思ってセクハラしたんだ」
「セクハラに良かれもクソもねえ、れっきとした悪行だ」
あの人は自分に自信を持てないせいか、異性から好意を寄せられるなんて思いもせず、何かと隙が多過ぎた。
俺はそれを戒めるため心を鬼にしてセクハラしたのだ。

でも思い返してみればあの人は、俺にわざと隙を見せているというか期待してるというか、あまり嫌がっている様子は無かった気がする。
「しかし、何があって今のベリアル様になったんだ。手術はリリス様が担当し

たんだろ？」
　リリスからは何も聞いてないのか。
「そうだよ、改造手術はリリス様が施したんだ。……なあ、ベリアル様がキサラギで一番強い理由を知ってるか？」
「アレだろ、『業火』の名前の元になった発火能力が凄いんだろ？　後、ベリアル様は全身に施した改造率もキサラギで一番高いと聞いたな」
　キサラギでは、脳に改造手術を施し超能力じみた力を得る研究が進められてきたのだが、ベリアルの最大の武器は脳手術で得た発火能力だ。
　リリスから、脳の容量を能力に割くほど力が得られると聞かされたベリアルは、迷うことなく力を求めた。
　そしてリリスが、記憶や人格、日常生活に支障が無いギリギリまで攻めた結果が……。

「リリス様が改造手術を行った際にやらかしたんだよ。研究員が調べた結果、発火能力に使う脳の容量設定が超(こ)えちゃいけないラインを超えてたらしい」
「あいつなんて事しやがるんだ」
　あの時はリリスを処刑(しょけい)しようとするアスタロトを宥(なだ)めたり、リリスを処刑しようとする怪人(かいじん)達を宥めたり、リリスを処刑しようとする戦闘(せんとう)員達を宥めたりと本当に大変だった。
「リリス様は、自分はちゃんとギリギリを狙(ねら)った、誰かが設定を変えたんだって言い張ってたけどな。ちっとも反省が見られないその姿に、いよいよ皆(みんな)が切れそうになった時にベリアル様が言ったんだ。これで良い、いや、これが良いって」
「ベリアル様がそうやって甘やかすから、リリス様がああなったんじゃねえのか？」

た」
　シャレにならない事故のはずだが、当の本人がこれで良かったと言っているので、今では手術を請け負ったリリス以外誰も気にしていないのだが……。
「さすがにリリス様も責任を感じたのか、今でもベリアル様の記憶を取り戻そうと色々試してるけどな。長時間に亘って過去のプライベートビデオを見せ付けて嫌がられたり。頭に強い衝撃を与えれば治るかもとか言い出して、逆に頭に強い衝撃を与えられたり」
「あいつ、もう治す気ねえだろ。しかし六号からすればとんだ災難だったな。当時の事は知らねえが、今じゃベリアル様といえば何をするか分からねえ鉄砲玉みたいな人だ。写真を見る限りお前さんの好みっぽい清楚美人なのに、残念だったな」

アリスが写真を眺めながらからかうように言ってくる。

確かに気が弱いけど優しくて、エッチな事にちょっと興味があるクセに、それを隠して清楚なふりをするベリアルは大好きだが……。

――今の理不尽（りふじん）の塊（かたまり）みたいなベリアルも、俺は案外嫌（きら）いじゃないのだ。

一章

ヒイラギ襲来

1

秘密結社キサラギのパチもんこと、法制機関ヒイラギと表面的には和解が成立し、トリス王国はその名を改め、法制機関ヒイラギ・トリス領となった。

俺達にすれば突然現れた連中にトリスを横取りされた形だが、連中に内緒でトリス首都とアジトの地下をトンネルで繋げ、毎日大量の水精石を盗掘中だ。

盗掘行為(こうい)がいつバレるかも分からないので、俺達は水精石が値下がりするのも気にせず、採掘(さいくつ)したそばから売りまくっている。
連中は水精石がダブついている事を疑問に思いながらも、値段が落ち着くまで採掘を見送っているようだ。
元々資金に困っていない富裕(ふゆう)国だ、労働者に休暇(きゅうか)を与(あた)え価格の推移を見守るのだろう。
だが俺達からすれば、その分発覚が遅(おく)れるので願ったり叶ったりだ。
つまりは今のところ大きな問題もなく、現地での侵略(しんりゃく)活動は順調であり……。
――窓から柔(やわ)らかな陽差しが射し込む室内に、バイパーが書類にペンを走らせる音と、その足下で丸くなって眠(ねむ)るゴブの寝息(ねいき)が微(かす)かに聞こえる。

らせる音と、その廊下で丸くなって眠るロセの寝息が微かに聞こえる
そんな、すっかり俺達の溜まり場と化し穏やかな空気が流れるバイパーの執務室で、車椅子で微睡んでいたグリムがぽつりと言った。
「平和ね……」
と、グリムの呟きにペンの音が一瞬止まると。
「はい、おかげで戦闘員の皆さんが危ない目に遭う事もないですし、平和なのは素晴らしいですね……！」
バイパーはそう言って、眠そうな目をしているグリムに笑い掛けた。
「あらあら……。この娘ときたら、またそんな良い子ちゃん発言なんかしちゃったりして。悪の幹部の自覚とやらは一体どこへ置いてきたのかしら……？　戦闘員は戦う事がお仕事なのに平和を喜んでどうするの？」

「あっ！　そ、そうですね、私が平和を望んではいけませんよね。ええと……カチワリ族の皆さんが、森で初めて見るタイプの魔獣に遭遇したそうです。まずは私が森に出向いてその魔獣を調べてきます。なので場合によっては戦闘も……」

「違うでしょう、幹部のあなたがわざわざ出向いてどうするのよ！　もっとこう、昔グレイス王国の参謀がロゼや私にやったみたいに、激戦地に送り込むとか無茶な命令を出して部下を困らせたりとか、そういうのが仕事でしょう!?」

すっとぼけた事を言うバイパーに珍しくグリムが正論を述べている。

「部下に無茶な命令と言いますと……」

部下に無茶ぶりされたバイパーは、何かを思い付いたのか俺を見る。

「先ほどから暇そうにしている六号さん。書類整理を手伝っていただけませ

んか？」
「暇そうに見えるけど実は超忙しいんだ。それに、悪の女幹部を目指すのは好感が持てるけど、自分の仕事を人に押し付けちゃいけないよ」
「ご、ごめんなさい！　そうですね、その通りです！」
「そうじゃないでしょう、諦めるのが早いわよ！　この男を見てご覧なさいな、どこをどう見ても暇でしょうに！　隊長はさっきから何やってるの!?」
　仕事に戻ろうとするバイパーにグリムがキーキーと喚き立てる。
　俺は手にしていた虫眼鏡を見せ付けながら、皿に載せた青い鉱石を指差すと。
「水精石を熱するとなんかゆっくり溶けてくんだよ。それが面白くて観察してる」

「やっぱり暇を持て余してるじゃない！　そんな事してる暇があるのなら、とっととグルネイドに向かいなさいな！」
——グルネイドという国がある。
元魔族領の奥にはミドガルズという名の山脈が広がっているのだが、グルネイドはその山脈を聖地と崇める国らしい。
山脈の麓に作られたその国は古来ドラゴン信仰が盛んであり、住人達は今も古のドラゴンが自分達を守ってくれていると信じている。
そして……。
「……グルネイドって国では、謎の魔獣に魔導石が奪われて大変なんだろ？　そんなところにお邪魔するのもどうかと思うぞ」
国ではどうやら魔導石が強奪され、[illegible]

国宝である魔導石が強奪され、大変な事になっていた
「……ねえ隊長、もうそろそろ認めましょう？　石を強奪した犯人が誰か、本当はもう理解しているんでしょう？」
　グリムが呆れたように言ってくるが、これを認めると外交問題になってしまう。
　グルネイドとかいう国もいずれ侵略する予定だとはいえ、ウチの組織のパチもん集団と和解したばかりの現状で敵を増やすのは避(さ)けたいところだ。
　なにせこの瞬間(しゅんかん)も連中の大事な資源を勝手に採掘しているのだ、いつか盗掘がバレるのは間違(まちが)いなく、その時は和解なんて出来ないだろう。
「まあ待てグリム。お前らはどうしてもトラ男さんを犯人にしたいみたいだが、まだ決まったわけじゃない」
「二足歩行でにゃーと鳴き、国宝を奪える程強い魔獣が他にいてたまるも

んですか」
　ぐうの音も出ないとはこの事だがここで諦めては試合終了だ。
「国宝を奪えそうなネコ科の魔獣なら知ってるぞ。こないだ交戦したあの連中がデカいのを飼ってたじゃないか」
「二足歩行する魔獣って言ってるでしょう!?　耳を塞いでもダメよ！　こっちをお向き！」
　肩を揺さぶってくるグリムに耳を塞いで抵抗してると、何かがモゾモゾと動き出した。
「んもう、グリムったら何騒いでるの……？　お昼なんだから静かに寝ててよー……」
　バイパーの足下で眠っていたロゼが、眠い目を擦りながら身を起こす。
「夜行性の私が頑張って起きてるのに、どうしてあなたが寝てるの

よ！　……というかロゼ、あなた最近どんどん犬みたいになってきてない？」
呆れたようなグリムの言葉に、ロゼがバッと跳ね起きると、
「いくらグリムでも犬呼ばわりは赦さないよ。っていうかそっちこそ、最近は日向ぼっこしながら昼寝するお婆ちゃんみたいになってるよ！」
「あらあらこの子ったら今とんでもない事言ってくれたわね。いいわ、トリスを国ごと呪ったように、とびきりのヤツを掛けてあげるわ！」
「ど、どうか二人とも落ち着いて……」
あっという間に戦闘体勢に移行した二人に挟まれ、バイパーが泣きそうな顔で俺を見る。
俺はそんな二人に視線を送る事もなく、虫眼鏡で石を照らして呟いた。
「平和だなぁ――」

「平和だなあ……」
「ちっとも平和じゃないですよ、六号さんも止めてください！」
現在、秘密結社キサラギ現地支部は、つかの間の平和を享受していた――

2

バイパーの部屋が大変な事になったため、片付けが終わるまでアジト街で暇を潰す事にした俺は、そこで驚きの光景に出くわした。
「スノウさん、ありがとうございました！　助かりました！」
「うむ、困ったらいつでも言ってこい。では、私はこれで失礼する」
工事現場用のヘルメット姿でショベルカーから降りてきたスノウが、なんか魔族に感謝されていた。
コイツ、現地人のクセになんで重機を扱えるんだ。

「おい、お前何やってんの？　重機の類いは勝手に触っちゃ危ないぞ」

「貴様は何を言っている。私はちゃんとコレの免許を持っているぞ」

　そう言って免許証を突き出してきたスノウの言葉に、

「なんで現地人のお前が免許なんか持ってんだよ！」

「アリスが発行してくれたのだ。アイツの講習を受けた上で、実技試験を行い認められれば即日発行してもらえるぞ？　ちなみに免許だけでなく様々な資格も取ったのだ。なにせ免許や資格を多く取れば給料が上がるからな！」

　信じられねえ、コイツが見せてくる免許証の有資格、俺より多いじゃん。

……そうだった、スラム生まれのこの女は努力家で、実力だけで騎士隊長の座に這い上がったのだ。

「……お前、騎士に返り咲いたって喜んでたクセに何でここで働いてんの？」

そう、スノウはこの間の作戦行動が認められ、元の地位に戻(もど)ったはずだが……。

「ティリス様から、私がキサラギでバイトすれば友好関係が深まる上に、キサラギの高度な技術も学べるので、これまでと同じように協力してこいと言われたのだ。おかげで、国からもキサラギからも給料が貰(もら)えるという素晴らしい労働環境(かんきょう)になったぞ」

「おいズルいぞ、何だそれ！　一人だけ給料の二重取りかよ！」

　キサラギの技術を学べるだとか、それってスパイ活動と変わらないじゃないか。

　コイツ、スパイ活動しながら給料まで二重で貰えるとか……！

「うむ、キサラギのスパイでありながら我が国で雇(やと)われ騎士をやっていた、ちょっと前までの貴様みたいな状況(じょうきょう)だ―

…と前までの貴様みたいな状況だ」
「そういやアリスはどこ行った？　トラ男さんの事で相談があるんだった」
「おい、露骨に話を逸らそうとするな」
　スノウはそう言いながらも、ふむと小さく頷くと。
「アリスならあそこで元魔王軍幹部達を教育しているのだが……。説明するよりも直接見た方が早いな。普段は冷静で知能の高いアリスが今日に限っておかしいのだ。お前からも言ってやれ」
　スノウは説明を濁しながら、とある建物を指差した。

　――そこは魔族の子供達のために建てられた学校施設。
　通常の学校教育と併せ、キサラギという組織がいかに素晴らしい団体かを刷り込み、ゆくゆくは従順な労働者に育てるための洗脳……いや、教育

機関だ。

　ここでは地球では当たり前の文字の読み書きや計算の他、秘密結社キサラギが設立された経緯や輝かしい戦歴、そして危険な魔獣の種類や対処法、採取すれば高値で買い取ってくれる資源や植物を教え込むといった、この世界独自の教育が行われている。

　今日は学校は休みなのか建物の中に子供達の姿は見当たらず、代わりに聞き覚えのある声が響いてきた。

「だからなんでそうなるんだ！　途中までは理解していただろうが！」

「そ、そんな事言われても知らないよ！　アリスが急におかしな事を言うもんだから！」

「ハイネの言う通りだよ！　ボクも途中までは分かるのに急に付いていけなくなる！」

声が聞こえてくる教室を覗(のぞ)いてみると、そこでは教壇(きょうだん)に立ったアリスがハイネとラッセルを相手に口論している。

窓から覗く俺に気付いたアリスが、こいこいと手招きしてきた。

「良いところに来たな六号。ベテラン戦闘(せんとう)員であるお前さんに質問だ。五十人の戦闘員を率いて敵の拠点(きょてん)を落としてこいという命令を下されたとしよう。拠点を陥落(かんらく)させるのにかかる期間は二週間だ。さて、お前ならどれだけの物資を用意する？」

……算数の問題か？

俺なら三日で落としてみせるという屁理屈(へりくつ)は無しだろう。

「悪天候で行軍が遅(おく)れる可能性と、予想外に敵の抵抗が激しい場合も想定して、五十人分の食糧(しょくりょう)と弾薬(だんやく)を三週間分かな。……おい何だよ、なんで頭を撫(な)でるんだよ」

「普段は脳みそ使ってなくても、戦いに関してはちゃんと頭が使えるんだなと思ってな」
これは貶(けな)されているとみていいんだろうか。
よしよしと頭を撫でてくるアリスは、続いてハイネに問い掛(か)ける。
「ハイネに五十匹(ぴき)のオーク兵が与(あた)えられたとしよう。コイツらを率いてヒイラギの拠点を落としてこいという命令が下されました。陥落させるのにかかる期間は一週間とします。……さて、お前さんならどれだけの物資を用意する？」
と、俺に出したのと似たようなアリスの質問に。
「陥落させた後のオーク兵へのご褒美(ほうび)として、どんぐりを五十個用意する」
「よし、今日からお前は六号以下のバカに認定してやる」
「なんでだよ！　アタシ、何かおかしな事言った⁉」

俺をバカの基準にするなとアリスにツッコむべきか、それともハイネにツッコむべきか。

と、慌てるハイネにラッセルが自信有り気に言ってくる。

「ハイネ、つまりはこういう事だよ。ご褒美のどんぐりはその場で与えなくても帰ってから渡せばいい。そうすれば手ぶらで行軍出来るんだ」

「よし、今日からお前もバカ枠だ。ロゼと一緒に算数ドリルを解いてこい」
「待って！　ボクは同族と違って計算出来るよ、これでも幹部だったんだから！」
同じく慌てるラッセルにアリスが呆れた表情を浮かべ。
「お前らが魔王軍幹部だったからこそ、こうして教育してるんだぞ。キサラギの戦闘員は自己中ばかりで部隊を率いれるヤツが少ないんだよ。お前さん達が隊を率いる事が出来たなら、発電所での仕事を減らしてやるから真面目にやれ」
「あ、アタシ達は真面目にやってるよ！」
「そうだよ、さっきからアリスはおかしいよ！　どこが悪いのかちゃんと言ってよ！」
この二人はキサラギにおいて、一応まともな方だと思ってたんだが。

「……それじゃあ悪いところを一つずつ上げてくが、まず人数と作戦日程に合わせてちゃんと食糧を計算しろ。あと、どんぐりの事はもう忘れろ」

アリスの言葉にハイネは悩ましい表情を浮かべ、

「オーク兵五十匹分の食糧ってどれだけだ？　アイツら、あればあるだけ食っちまうだろ」

「オークは食い溜めが出来るのに、どうしてわざわざ荷物になる食糧を持って行くの？　それだと行軍の邪魔にならない？」

ハイネと相談を始めたラッセルの言葉に、アリスがピタリと動きを止めた。

「待て、今聞き捨てならない事言ったな。アイツらはたらふく食えば、無補給で一月分の活動が可能なのか？」

「その代わり食い溜めすると動きが鈍くなるけどね。野生のオークは秋の間

に食い溜めて、食糧が不足する冬に巣穴に引き籠もるのさ。まあそれでも冬は魔獣達も餓えてるから少なくない数のオークが巣穴を掘り起こされて食われちまうんだけどね」

　さすが魔獣はびこる過酷な世界だ、そりゃあオークも人類の農場で働こうってもんだ。

　なるほど、コイツらがアリスと話が噛み合わなかった原因にようやく納得がいった。

　ハイネとラッセルの表情を見るに、同じくアリスの誤解に気付いたらしい。

「魔王軍は砂漠以外の土地が少なくて食糧不足に喘いでいたから、侵攻時の食糧は現地調達が基本だったんだよ。……うん、やっぱりご褒美のどんぐりだけでいいじゃないか」

「お前らの食糧事情や生態なんざ知るか、どんぐりぶつけるぞこの野郎」

ラッセルがアリスに脅され怯む中、俺はある事を思い出す。
「でもお前ら、魔王軍時代はちゃんと補給部隊を率いていなかったか？　特にハイネと最初に出会ったのって、俺達が補給部隊を襲(おそ)ったのが切(き)っ掛けだったろ」
　そう、あの時は俺達が補給部隊を襲撃(しゅうげき)した事で、ハイネが強襲してきたのだが……。
「アレはゴブリン兵の食糧さ。食い溜め出来るオークや、自分で倒(たお)した敵しか食わないオーガと違ってゴブリンは何でも食うからね。アイツらは腹が減ると共食いするから……」
「それ以上は聞きたくない！　アジト街にいるゴブリンをまともな目で見れなくなる！」
　オーク農場に続きまた一つ、聞きたくもない魔族(まぞく)事情を聞いてしまった。
「ねえアリス、講習はもういいだろ？　ボクだって魔王軍幹部として何度も

兵を率いたんだから問題ないよ。……だからさ、そろそろアイツを迎えに行かない？」
　一見何でもなさそうに装いながら、ラッセルが明後日の方を向いてそんな事を……。
「アイツってのは誰の事だ。アジト街は今、開拓ラッシュで絶好調だ。全く人手が足りてねえのに余計な事してる暇はないぞ」
「誰って、アイツはアイツだよ！　にゃんにゃんうるさいしキモいけど、アイツがいないとマズいんじゃないの？　だって、ここで一番強いのはアイツだろ？」
　アイツとはもちろんトラ男の事を言っているんだろうが、女装させられた上でスカートの中を覗かれたり、抱き枕にされたりこき使われたりと、散々な目に遭わされているからか名前を呼ぶ気はないようだ。

「お前までグルネイドの国宝強奪犯をトラ男さんだと決め付けるのかよ？　証拠も無いのに断定するのは良くないぞ」
「アイツ以外にこんな事するヤツがいるわけないだろ！」
　なぜか興奮気味に食い下がるラッセルの頭に、アリスが落ち着けとばかりに手を乗せる。
「なあラッセル。現時点で分かっているのは、グルネイドという国の魔導石が猫型魔獣に強奪され、混乱が起こっているという事だけだ。……そして話は変わるが、つい最近まで戦っていたどこかの機関が、巨大猫型魔獣を飼っていたな」
　アリスが何を言いたいのか察したラッセルが、信じられない者を見る目を向ける。
「……ま、まさか、ヒイラギって連中に罪を擦り付けるつもりなの？」

「人聞きが悪い事を言うんじゃねえ。現在のところ猫型魔獣を飼っているのはウチとヒイラギだけだ。そして、まだトラ男が犯人だと決まったわけじゃない。なら自分は、仲間であるトラ男を信じるってだけの話だ。そうだろ、六号？」
「ああ、俺もトラ男さんを信じるよ。キサラギは何より仲間を大事にするんだ。なあラッセル、お前はいつから人を信じられなくなったんだ？」
俺とアリスの言葉を受けて、ラッセルが愕然とした顔になる。
「ちょ、ちょっと待って!?　どうしてボクが悪者みたいに言われるのさ!?　いや、ボクだって仲間は大事にするよ!?　でも、動機や状況的にどう考えても……」
アリスがラッセルの頭を撫でながら、
「悪事ってのはな、決定的な証拠を出されてからが勝負なんだよ。今までこ

「悪事ってのはな、決定的な証拠を出されてからが勝負なんだ。今はまだ慌てるような段階じゃねえ。そうだろ、六号？」
「ああ、こういった時は証拠の粗（あら）を突（つ）いてごねまくり、むしろこっちが被害者（ひがいしゃ）みたいに逆ギレするんだ。相手が怯んだところを見計らい、不幸な事故って事で収めるのさ」
「こ、これだから人間は……！」
　頭に置かれたアリスの手を払（はら）うラッセルに、ハイネが困惑（こんわく）の表情を浮かべて言った。
「……な、なあラッセル。あんた、あの獣人（じゅうじん）の事を嫌（きら）ってたんじゃなかったのかい？　その、いつもアイツの愚痴（ぐち）ばっか言ってるから、アイツが留守で喜んでるもんだと……」
　ラッセルは当然だといわんばかりの呆（あき）れた顔で、ハイネに冷たい視線を送る。

「……もちろん大っ嫌いだし留守で喜んでるけど？　ただ、アイツの強さだけは認めてるからね。キメラは本能的に強い者に従うのさ」

同僚からそんな目を向けられたのは初めてだったのか、ハイネは挙動不審になりながら、

「そ、そうか、うん、そうだよな、安心したよ！　あんた、こないだ六号にスカートを捲られた時、一瞬女の子みたいな反応したから心配してたんだ！」

「…………ぼ、ボク、女の子みたいな反応してた？」

愕然とした表情を浮かべるラッセルからハイネが無言で目を逸らす。

そんな二人にアリスが言った。

「魔王軍の領土を吸収した事で、グレイス王国とグルネイドは隣国になった

からな。ティリス姫が先手を打って『これからはお隣同士、仲良くしましょう。ところで最近我が国は、法制機関ヒイラギが飼っている猫型魔獣に酷い目に遭わされました。そちらの国は大丈夫ですか?』って内容の手紙を送ったから、安心しろ」

「相手が敵でもやっていい事と悪い事があるんだぞ。お前らアタシ達魔族より邪悪だろ」

「やっぱキミ達人類は滅ぶべき存在だと思う」

俺達にとっては褒め言葉です。

3

ティリスが友好の使者と共に手紙を送り、向こうからの返信を待ちなが

ら平和な毎日を過ごす間も、アジト街の開発に進む
森の魔獣や未知の資源を地球に送り、その対価として様々な物資が送られてくる。
それらを惜しげも無く放出した結果、食糧や仕事を求めアジト街の人口が更に増えるという好循環が起こっていた。
後は、うまく森を切り拓く事さえ出来れば農業区や工業区の開発にも着手出来る。
現在は、森の番人たるアルラウネ型敵性生物を筆頭に、手強い魔獣への対処方法をアリスが模索しているが、それも時間の問題だろう。
……と、そんな事を考えながら、見張り台でサボりという名の監視任務に就いていた俺は、街に近付いてくる珍客に気が付いた。
なぜかロゼに一方的にライバル視されている、腰に手斧をぶら下げた小柄な仮面少女、カチワリちゃんだ。

「…………！　…………ッ！」
　カチワリちゃんは見張り台の俺を見付けると、ブンブンと手を振り駆け寄って来る。
　俺が地球産の斧をあげて以来たまに遊びに来るようになったこの子だが、蛮族みたいな見た目に反して根が理性的で真面目なためか、今のところアジト街の人々に好意的に受け入れられていた。
「業火の海に沈むがいい……。永遠に眠れ！　クリムゾンブレスーッ！」
「──!?」
　そんな好意的に受け入れられている少女に向けて、突如炎が吐きかけられる。
　咄嗟に飛び退き直撃だけは躱したものの、蛮族装束に炎が移り地面を転がるカチワリちゃん。

「――ッ！　――ッッ！」
「あたしの縄張り(なわばり)に入ってきておいて、ただで済むとは思わないでくださいね！　さあ、今こそ雌雄(しゆう)を決する時……痛い！」
　見張り台から降りた俺はロゼの頭を引っ叩(ぱた)いた。
「何するんですか隊長、この子はキサラギの敵ですよ！」
「この子を敵視してるのはお前だけだぞ。ていうか、カチワリちゃんが遊びに来る度に襲撃するのは止めてやれ。カチワリ族とは友好な関係を築きたいんだよ」
　蛮族みたいな見た目のクセに意外と紳士(しんし)なカチワリ族だが、森においては無類の強さを発揮する。
　森林戦のエキスパートであるトラ男がいない今、むやみに敵対する理由も

ない。
　……と、蛮族衣装の消火を終えたカチワリちゃんが、手斧を片手に立ち上がった。
「ラアアアアーーッ！」
「何ですか、やるんですか⁉　いいですよ、今こそ決着を付けましょう！」
「コラッ、お前ら喧嘩すんな！　似たような年なんだから仲良くしろよ！」
　今にもロゼに襲い掛かりそうだったカチワリちゃんは動きを止めると、どこか思い詰めた様子でこちらを見上げ、俺に手紙を渡してきた。
　現地語を読めない俺は流れるようにロゼへと渡す。
「ええと……『拝啓、デッドプランターの甘い香りが漂うこの頃、キサラギの皆様におかれては、ご健勝にお過ごしの事と存じます。戦いを生業とする貴社の輝かしい戦歴及び、戦争相手であったはずの魔族の難民を受け入れる

という寛大な処置に、武を貴ぶカチワリ族一同、より敬服の念を抱いております』」

　蛮族から送られてきた丁寧(ていねい)な文面に俺は思わず待ったをかけた。

「……なあ、その手紙に本当にそんな事書いてあるのか？」

「難しい言葉遣(ことばづか)いなのであんまり意味は分かりませんが、確かにそう書かれてますよ？」

　不思議そうに俺を見上げたロゼが再び手紙を読み上げる。

「『そんなキサラギの皆様に、はなはだ不躾(ぶしつけ)なお願いで申し訳ございませんが、子供達の受け入れをご相談させて頂ければと思います。わたくしごととなりますが、我々は永きに亘(わた)りヒイラギ族と戦い続けて参りました。ですがこの度、彼らが怪(あや)しげな道具を使い、竜種(りゅうしゅ)を含む大型魔獣(まじゅう)を使役した事で劣勢(れっせい)に立たされております。子供とはいえ、カチワリ族は森においてきっと役立つと自負しております。ご多用のところ恐縮(きょうしゅく)ですが、お力添(ちからぞ)えいた

だけますと幸甚でございます。ご検討のほど、よろしくお願い申し上げます。敬具』」

蛮族のくせに俺にも書けない手紙を書きやがって……いや、そうじゃない！

カチワリちゃんをよく見るとあちこちに小さな傷を負っていた。

ロゼとのじゃれ合いで付いたのかと思うも、魔獣か何かの引っ掻き傷のようだ。

俺は見張り台に駆け上がると、拡声器に向けて呼び掛けた。

《招集――！》

――突然の招集に、会議室に集まった戦闘員が不機嫌そうに口を開いた。

「おい六号、この忙しいのに何なんだよ。居住区のアパートが今日中に完成しそうなんだ、早く仕事に戻らせろよ」
「お前みたいに暇じゃねえんだ、せめて人の邪魔はすんなよな。冬が来る前にアジト街の住人に住むとこだけでも与えねえと……」
「この星は雨が少ないから雪は降らないだろうが、急がないとな」
　どうやら俺の同僚は、ここ最近の建設作業で自分達が何者なのかを忘れたらしい。

「カーッ、悪の組織の人間のくせに何で働く喜びに目覚めてるんだ！　すっかり平和ボケしやがって、お前らの本来の仕事を言ってみろ！」
「べべ、別に本業を忘れたわけじゃねーよ！　魔族連中に凄い凄いってチヤホヤされてちょっと楽しかったのは認めるが、平和なんだから仕方ねえだろ！」

「今までが人に嫌がられる任務ばかりだったせいで、住人に感謝される仕事が新鮮なんだよ！　そこまで言うなら戦闘任務を持ってこいや！」

文句を垂れる同僚にアリスが言った。

「そんなお前らに朗報だ。きな臭い話が舞い込んできたぞ」

すっかり牙を抜かれた同僚達が予想外の言葉に動きを止める。

「おっ、なんだよ、やっと戦闘任務かよ！」

「そういう事は早く言え、建設なんてやってられるか！」

「俺達が平和ボケしてないところを見せてやるよ！」

戦闘員としての本能を思い出したのか、鬱陶しくもイキり始めた同僚達は。

「あの戦闘集団カチワリ族が抗争相手に負けそうだってんで、子供だけでも保護してくれと言ってきた」

そんなアリスの説明に、表情を引き締め真顔になった。
「カチワリ族はああ見えて紳士的な隣人だ。子供を受け入れる事自体に文句はねえが……。ウチの本来の仕事は戦闘員の派遣業だ！　お前ら、やる事は分かってるな！」
「「おう！」」
戦闘員魂に火が付いたのか、同僚達が声を上げる。
それを聞いたアリスは満足そうに頷くと。
「良い返事をするじゃねえか！　ヒイラギ族は怪しげな道具を使って、竜や大型魔獣を操るそうだが……。キサラギは最強なんだ！　今こそお前らの力を見せ付けてやれ！」
「「……おう」」
急に大人しくなった同僚達は掠れた声で呟いた。

急に大人しくなった同僚達に掠れた声で呟いた

4

「隊長、あそこにスポポッチが落ちてますよ！　どうやらカチワリ族の縄張りに入ったみたいですね！　せっかくなのでアレはお土産に持ち帰りましょう！」

「アレは落ちてるんじゃなくて、カチワリ族が木の枝に刺して干してるんだぞ」

　深く険しい森の中を上機嫌の大食いキメラが先行する。

　いや、機嫌が良いのはロゼだけではない。

「やっとアタシ達の出番が来たね！　魔族の存在意義は戦う事だ、元魔王軍幹部の力を見せてやるよ！」

「ボクもこんな格好で家事ばかりさせられていたせいで、ここ最近人生を見失いかけてたからね。戦闘キメラの存在意義だって戦う事さ。ハイネには負けないからね」

　普段（ふだん）からエコな発電所としてこき使われている奴隷（どれい）組も、日頃（ひごろ）の鬱憤（うっぷん）を晴らしたいのかいつになくやる気のようだ。

　そして……。

「俺達だって戦う事こそが存在意義だ！　なんせ職業戦闘員だぞ！」

「おっぱい奴隷とラッセルきゅんは後ろで見ときな、俺達の仕事を取るんじゃねえよ」

「竜が出るとか聞いたけど要はでっけえトカゲだろ？　確かに最初はビビったけど、ヒーローが操る巨大（きょだい）ロボに比べれば楽勝だって気付いたからな」

現地人と張り合うように、開き直った同僚達がイキり立つ。
「おい、おっぱい奴隷ってアタシの事か」
「ラッセルきゅんはやめてくれないかなぁ……」
久しぶりの戦闘という事で、今日は血の気の多い参加希望者がたくさん集まった。
リーダーの俺を始め、戦闘キメラ二匹(ひき)におっぱい奴隷、そしてモブ戦闘員が三人だ。
「おい六号、俺達に危険な任務を押し付けといてアリスは一体どこ行ったんだよ」
「おう、あれでアイツは頭だけは良いからな。現場指揮官がお前じゃ不安がある」
「このパーティー構成を見てみろよ、男女比率が女三人に男が四人だ。アンドロイドでも、アリスがいれば一応バランス取れるだろ。なんで連れて来な

かったんだよ」
アリスの不在にモブ戦闘員達が文句を垂れる。
「今回は大型魔獣やヒイラギ族への威力偵察だからな。アリスを連れてくるまでもねえ。アイツはアジト街の開発で忙しいんだ、荒事は俺に任せろ」
「ねえ、ボクが当たり前のように女枠に入れられてない？」
女装キメラが困惑顔で訴えるも誰も何もツッコまない。
——と、その時だった。
「隊長、何かいい匂いがしてきません？　美味しそうなお肉の匂いが……」
先行するロゼがそんな事を言ってスンスンと鼻を鳴らす。
戦闘キメラは鼻が良いのか、同じくラッセルも鼻をスンスンさせて……。
「何かが焼ける匂いがするね。香ばしいっていうか……いや、この匂いは！」
慌てた様子のラッセルが[illegible]突然駆け出した。

慌てた様子のラッセルがなぜか突然駆け出した

「ラッセル、急にどうしたんだい!?　一人で行くのは危ないよ！」

「独(ひと)り占(じ)めはズルいですよ！　野生のお肉が落ちてたら山分けですよ！」

「拾い食いなんてするわけないだろ、野生のお肉って何なんだ！　ハイネ、この匂いはアイザックだ！　この先でアイザックが火傷(やけど)を負ってる——！」

——ラッセルの後を追うと、森が開けた空き地の中央に、あちこちを煤(すす)だらけにしたグリフォンが蹲(うずくま)っていた。

「アイザック——！」

半泣きのハイネが名前を叫(さけ)び、グリフォンの下へと駆(か)け寄(よ)っていく。

「ハイネさん、ここぞとばかりに名前付けて所有権を主張するのはズルいで

すよ！　あたしはモモ肉が欲しいです！」
「バカッ！　アイザックはアタシが飼ってるグリフォンだよ、食おうとすんな！」
　グリフォンに縋り付いたハイネがロゼから守るように背中に庇う。
「そういえばお前、昔グリフォンに乗ってたな。姿が見えないと思ったら、こんな所に放し飼いにしてたのか？」
「アタシが奴隷としてこき使われるのは仕方がないけど、この子まで巻き込むのはどうかと思って解放したのさ。グリフォンは強いから、森でも十分やっていけるだろうってね。ああ……それが……」
　涙ぐむハイネをよそに、ロゼが獲物を見るような目をアイザックに向けて呟いた。

「あたし思ったんですけど、アイザックさんは森に解放されたのなら、もう誰の物でもありませんよね？」
「……ど、同族、一応言っとくけどグリフォンは美味しくないからね？　この状況でアイザックを食べたりしたら、さすがに同族とは呼べなくなるよ？」
　口元を引き攣らせたラッセルが、アイザックに両手を当てて何かを唱える。
「昔、ハイネさんと戦った際にアイザックさんを囓った事があるんですが、アレって味付けしなかったから不味かったんだと思うんです。今はいい匂いがしますし、いける気がするんですよね」
「やめろ、アイザックにそれ以上近付くな！　ラッセル、早く傷を治してやってくれ！」
　ハイネが必死にアイザックを庇う中、ラッセルの両手が淡く光った。
「ラッセルきゅんが魔法使った！　アレって回復魔法だよな⁉」

「水属性使いが回復魔法を使えるのはファンタジーあるあるだ。ラッセルくん、チャックに皮を挟(はさ)んで怪我(けが)したんだけど俺も治してもらっていい？」
「ラッセルくんは外見も乙女(おとめ)で魔法まで使えるってのに、もう片方のキメラときたら……」
「もう片方のキメラときたら何ですか？　返答によっては齧りますよ？」
「キミ達ちょっとうるさいよ、集中してるんだから黙(だま)ってて！」
コイツらグリフォンの前で騒(さわ)いでるが、今の状況を理解してるんだろうか。
グリフォンが火傷を負って倒(たお)れてるという事は、傷を負わせた相手がいるわけで……。
「……？　なんか、急に暗くなっ……」
空を見上げたハイネが何かを言い掛(か)け、目を見開いて動きを止めた。

空を見上げたハンチな何かを言い掛け、目を見開いて動きを止めた

その反応を見たモブ戦闘員達が、空を確認する前に頭上へ向けて武器を構える。

太陽が巨大な何かに遮(さえぎ)られ辺りが薄闇(うすやみ)に包まれる中、俺がスタングレネードを投げ上げると――！

「うおおおおお、これでも食らええええ！」

この星最強の生命体と言われているドラゴンが俺達目掛けて突(つ)っ込んで来るが、スタングレネードが轟音(ごうおん)と共に閃光(せんこう)を放つと同時、目を灼(や)かれて墜(つい)落(らく)した。

「ややややるじゃん六号、無駄(むだ)に最古参兵やってねえな！」

「く、空中にいるドラゴンはスタングレネードで落とすってのは、モンパンやってりゃ常識だからな！　へっ、しょせんはデケえトカゲだ、ざまぁねえぜ！」

「ヒャッハー！　近代兵器を舐めんじゃねえぞ！　今の内だ、やっちまえ！」
モブ戦闘員達が人の手柄でイキり立つがチヤホヤされるのは嫌いじゃない。
「やれやれ、俺はグレネードを投げただけなんだがなあ……。おいロゼ、隊長のカッコイイところをちゃんと見……」
「「あああああああ！」」
空を見上げていた現地人達は、三人とも目を灼かれて悶えていた。
「キュオオオオオオオオオ！」
加えて地に落ちたドラゴンが、目が見えない事でメチャクチャに暴れ回り、辺りの木々が引き千切られる。
「ちょっ、おい六号、何とかしろよ！　手が付けられなくなってんぞ！」
「撃て撃て、距離を取って銃で撃て！　巻き込まれたらペシャンコだ！」

二号のバカッ！　余計な事しやがって、味方三人が役立たずになったじゃねえか！」
　小さな屋敷ぐらいなら簡単に押し潰せそうなドラゴンが暴れる姿に、その場の皆が逃げ腰になる。
「仕方ねーだろ、ゲームのドラゴンはここまで暴れたりしなかったんだよ！」
　俺はモブ達に言い返しながらアサルトライフルを連射するが……、
「何だこりゃ、ちっとも攻撃が効いてねえ！　誰かもっと強力な火器を呼び寄せてくれ、俺のポイントだと呼ぶのに足りねえ！」
　ここ最近健全な生活を送っていたせいで悪行ポイントがガス欠だ。
　俺とは違って性根が腐ったコイツらなら、きっと大量の悪行ポイントを……。
「「「…………………」」」
「おい」

思わずモブにツッコむと慌てた様子で言い募る。
「仕方ねえだろ、この星には娯楽がねえんだ！　夜になったら色々あるだろ！」
「ポイント使ってでも、そりゃあ日本から呼ぶしかねえよな」
「女の部下に囲まれてるお前には分からねえだろうけどなあ！」
コイツら悪行ポイントでまさかエログッズを呼び出したのか。
思い切り罵ってやりたいとこだがなぜか強く出られない。
何だか俺も昔似たような事をやらかしたような…………。
「うう……よ、ようやく目が見えてきました……」
記憶の底に封じた過去を思い出そうとしているとロゼの言葉で正気に返る。
「よし、俺達の武器だと効果が薄い。お前らの魔法的な何かでやっつけてく

れ！」
「あの暴れ回ってるヤツはあたしには無理ですよ、近くに寄ったら潰されちゃいます！　隊長の何とかばっそーがあるじゃないですか！」
俺の何とかバッソーも接近戦用の武器なんだよ。
「くっ、やってくれたねぇ……！　まさか仲間だと思っていたヤツに目潰し食らうとは思わなかったよ！」
「ハイネ、ドラゴンよりコイツを先にやっちゃおう。どうせここは森の中だ、ドラゴンに食われたって言っとけば大丈夫さ」
ロゼの視力が回復したのに合わせ、ハイネとラッセルがイキり立つ。
「おっ？　一度も俺に勝った事のない負け犬共が、やるってんならやってやるぞ？」
俺がコイコイと煽ってやると二人はみるみるうちに顔色を……。

と、赤くさせていた顔色を、突然スッと青ざめさせた。

「た、隊長……後ろ……」

気付けばドラゴンが暴れていた破壊音がいつの間にか止んでいる。

コイツらの視力が回復したという事は、当たり前だがドラゴンも……。

「撤退！」

「「ああああああ！」」

後ろを確認もせず駆け出すと、背後からドラゴンが地を踏み締める音が響いてきた。

前に向かって駆け出しながら、ピンを抜いた二本目のスタングレネードを肩越しに後ろへ落とす。

轟音と共に閃光が辺りを照らすが、先程のグレネードで学習したのか、ドラゴンからは目を灼かれた時の悲鳴が聞こえない。

ダメだ、グレネードでは僅かな足止めにしかならないようだ。
仕方ない、ここは頼れる同僚に囮になってもらうしか……！
「……おい、アイツらどこ行った！　俺達を囮にしやがったな！」
光学迷彩を使っているのかもしくは逃げたか、同僚三人の姿は既になかった。
大切な仲間を囮にするとか、やはり悪の組織の戦闘員は信用出来ない！
……と、ラッセルに回復してもらったおかげで身を起こせるようになったグリフォンが、元主人であるハイネをジッと見詰めている。
「アイザック、動けるようになったんだね！　いい子だ、アタシ達を乗せてくれ！」
「……」
ハイネに駆け寄られたグリフォンは、ドラゴンに視線を向けるとそっぽを

向いた。
「アイザック？　何だよ、どうしたんだよ、アタシだよ！　まさかご主人様の顔を忘れたわけじゃないだろうな⁉」
　ハイネがグリフォンをユサユサと揺さぶるも、どこか拗ねたようにクエエと鳴くだけだ。
「ハイネさん、アイザックさんは森に捨てられたんだと思って拗ねてるんですよ！」
「ハイネ、謝って！　アイザックに謝るんだ！」
「あ、アタシはアンタの事を思って森に解放したんだよ！　そりゃあ別れるのは辛かったさ。でも仕方ないだろ、アタシが奴隷にされた以上、あのままじゃあきっとアンタもこき使われて……！」
　ハイネとグリフォンが妙なドラマを始める中、俺は地球から取り寄せた制

圧装備、強化催涙弾をドラゴン目掛けて投げ付けた。
「ピギャアアアアアアアアアアアア！」
催涙弾はドラゴンにも効果がある、これはアリスに要報告だ！
ドラゴンが苦しんでいる間に逃げようと、先行しているはずの皆を振り返ると――
「なあ、聞いてくれよアイザック。アンタとは子供の頃からの付き合いだ。アンタの事は、大事な弟みたいに思ってたんだ……。痛いっ！　何で突っつくんだよアイザック！」
「ハイネさん、アイザックさんは女の子ですよ」
「妙な名前付けるなと思っていたら、性別を間違えてたんだね……」
「お前ら何でもいいから早くしろよおおおお！」
まだモタモタしていた三人は我に返って慌てて出す。

「ごめんよ、アタシが悪かったよ！　アジト街に帰ったら、アリスから貰った小遣いでとびきりの肉を食わせてやる！　それに、これからはもうアイザックを離さない！」

ハイネの必死の説得に、グリフォンが乗れとばかりに翼を広げて地面に伏せた。

全員でグリフォンに飛び乗ると、四人は重量オーバーだったのかジタバタと暴れ出す。

「おい、アイザックはオーク兵五匹だって乗せられるのに、どういう事だよ！　誰か重いヤツが乗ってるだろ！」

「重いのは隊長です！　正確には隊長の鎧が重いんです！」

「同族、コイツを一緒に蹴落とそう！　……あっ！　何するんだ、足を放

せ！」
舐めた事を言い出したラッセルを道連れにしようと足を掴むも、このまま森の中を逃走すれば、ゲリラ戦に慣れた俺はともかく三人は食われるだろう。
「お前らアジトに帰ったら覚えとけ、これはデッカい貸しだからな！」
グリフォンから飛び降りた俺は、Ｒバッソーを起動させ警戒するドラゴンと対峙した。
「弱っちいお前らが逃げられるよう、俺が少しだけ足止めしてやる！　その後でドラゴンがお前らを追ってきても、アジト街の防衛兵器ならどうにかなるだろ！」
俺が飛び降りた事でグリフォンが翼を広げて空を見上げた。
「隊長ー！　無事に帰って来れたなら、あたしの晩ご飯を分けてあげま

す！」
　食い意地の張ったコイツにしては大盤振る舞いのつもりなのだろう。
「今まで散々触られた分、むしろ貸しはアタシの方が多いはずだ！」
「ボクも今までスカートをめくられた分、貸しはこっちが多いはずだよ！」
　あの二人に関しては、アジトに帰ったら体で払わせてやるとしよう。
　やがて背後で聞こえてくるのは、グリフォンが地を蹴り飛び立つ音。
「巨大ロボや変身ヒーローに比べれば、てめえなんて空飛ぶデカいトカゲじゃねえか！　戦闘員を舐めんじゃねえ！」
「キョエエエエエエエエ！」
「隊長ー！」

5

森の中をひたすら駆けながら、俺は一人愚痴っていた。
「全然デカいトカゲなんかじゃなかったわ。アレは無理だ、ヒーローよりよっぽどヤバい」
ドラゴンヤバい、超ヤバい。
まず硬くて重くてデカい上に頭が良い。
Ｒバッソーで斬り掛かってみたものの、傷を負わせたら空を飛ばれて炎を吐かれた。
アレは個人で戦うもんじゃない、大勢で対空兵器なんかを使って遣り合うヤツだ。
「……迷った」
森に分け入り何とかドラゴンを撒いたものの、アジト街の方角が分から

ない。

この森は磁力を帯びているのか、富士の樹海のようにコンパスを狂わせる。

だんだん薄暗くなってきたし、まさかこのヤバい森で野宿するのか？

落ち着け、最古参兵戦闘員六号、サバイバル生活なら今まで幾らでも送ってきただろう。

不安なんて何もない、悪行ポイントも多少はあるしどうにでもなる！

……と、人間にとってとことん優しくない森の中で自分に言い聞かせながら警戒していると、ふと何者かの視線を感じた。

腰の後ろに手を回し、ハンドガンを握り締めると——

「――？」
目の前の茂みから声にならない音が聞こえ、やがて見覚えのある仮面が現れる。
「カチワリちゃんだー！」
「――ッ!?」
森で心細くなっていた事もあり、俺はカチワリちゃんに縋り付いた。
「助かったよ、ドラゴンに追い掛けられたせいで方向を見失ってさあ！」
縋り付かれてオロオロしていたカチワリちゃんは、やがて子供を慰めるかのようによしよしと頭を撫でてきた。
森で中学生くらいの少女に慰められるこの絵面は、なんだか酷く犯罪臭がする。
「おっと誤解しないでくれよ？　別に不安に思ってたわけじゃないし、俺一

人でも何とかなる。でも早くアジトに帰ってやらないとさ。ほら、でないと俺の部下が心配するだろ？」

「――！　――！」

分かってるとばかりにうんうんうん頷(うなず)き、なおも頭を撫でてくるカチワリちゃん。

これはどうやらちっとも分かってない。

「ていうかカチワリちゃんは何でこんな所にいんの？　体もまだあちこち怪(け)我(が)だらけじゃん、アジトで治(ち)療(りょう)を受けてたはずだろ？」

「――。――！」

ジェスチャーから推測するに、傷の治療もそこそこに集落が気になり、医療室から抜け出(だ)して来たらしい。

戦闘民族とはいえ、子供一人で集落に行かせるのはどうかと悩(なや)み、閃(ひらめ)いた。
「頼(たの)みがあるんだけど俺をアジトまで送ってくれない？　もちろんお礼はするからさ」
　カチワリちゃんはコクリと頷き、まるで迷子を送り届ける保護者のように俺の手を取り先導を始める。
　これは人の好いカチワリちゃんに仕事を頼みアジトで保護するという作戦なのだが、どうやらお姉さんぶりたいお年頃(としごろ)らしい。
「……おいおい、さっき取り乱していたからって子供扱(あつか)いしてんのか？　俺も随分(ずいぶん)舐(な)められたもんだ、別に手を繋(つな)がなくても迷わな」
「ラアアアアアアアアアアアーッ！」
「ギュッ!?」
て おの

カチワリちゃんが突然手斧を投げると、茂みの中から悲鳴が上がった。
茂みに分け入ったカチワリちゃんは、頭をかち割られたデッドリーヘッグを嬉々として見せ付けてくる。

「――ッ!」

手斧を掲げて声なき勝ち鬨を上げるカチワリちゃんに、俺は片手を差し出した。

――魔の大森林と呼ばれるこの森は、アリスいわく大陸の六割近くを占めてるそうだ。

それだけ広大な森ともなれば、蛮族が独自の文化を築いていてもおかしくない。

俺達にとっては危険なこの森も、カチワリ族にとっては住み慣れた家であり庭のようなものなのだ。

つまり何が言いたいかというと……。

「カチワリちゃん助けて！　二足歩行のウサギが追い掛けてくる、何アレ怖い！」

「ラアアアアアアア！」

現在俺達はよほど森の奥深くに迷い込んだのか、魔獣の襲撃を受けまくっていた。

俺に向かってダッシュしてきた角の生えた大きなウサギが、カチワリちゃんの手によってウサギ肉へと変えられる。

手斧を使って器用に肉を解体するカチワリちゃんは、晩ご飯を確保出来た事が嬉しいのかどことなく上機嫌だ。

「一応言っとくけど、俺が本気を出せばこのキモウサギも余裕だからね？

ただ、キモかったから任せただけで、俺って結構強いから」

俺の弁明にコクコク頷き、解体を終えたカチワリちゃんはウサギ肉を葉っぱで包むと竹筒みたいな物に入った水で手を洗う。

やがて綺麗になった小さな手をスッとこちらに差し出してきた。

子供に手を引かれる事に慣れてきた俺は自然とその手を握り締め、

「おわっ!?　何すんのカチワリちゃん、急に引っ張られるとビックリする……」

勢いよく手を引かれた事に対する抗議の声は、俺が元いた場所に降ってきたヘビを見て引っ込んだ。

手斧を片手にヘビの胴体を踏み付けて、手際良く頭を刎ねるカチワリちゃんは、

「……なあ、カチワリ族って本当に負けそうなの？　一体どんなヤバいのと

戦ってんの？」

「……？」

皮を剥ぎ取りヘビ肉を葉っぱで包みながら、不思議そうに首を傾げた。

すっかり陽が暮れた森の中を、カチワリちゃんが分けてくれた干し肉を囓りながら進んでいく。

カチワリ族は夜目が利くのか、暗い森の獣道を危なげなく案内してくれる。

彼等との関係は今後どうなるか分からないが、改造手術を受けた戦闘員も夜目が利くとはいえ、夜間での森での戦闘は控えた方が良さそうだ。

「――！」

「おっ、さっき俺が食われ掛けたヤバい花だな。大丈夫だ、もう騙されないよ」

俺の手を引くカチワリちゃんが指差す先には、人の頭ほどの大きさの綺麗な花が咲き誇っていた。

花の中心部には宝石みたいな物が埋まっており、先ほど、それを回収しようと手を伸ばしたら勢いよく花びらが閉じたのだ。

落ちていた小枝で宝石を突いてみたところ、この花の花びらは鋭利な切れ味を持っている事が判明した。

カチワリちゃんが止めてくれなければ、危うく片手を失っていたところだ。

「――！　――！」

俺が学習した事を褒めているつもりなのだろう。

背伸びしたカチワリちゃんが『えらい！』とばかりに俺の頭を撫でてくるが、これは完全に舐められているな。

か　これは完全に舐められてるな

――しばらく森の中を歩いて行くと小さな沢に辿り着いた。
カチワリちゃんが身振り手振りでここで休憩しようと伝えてくる。
「よし、今度こそ俺に任せろ。科学の力を見せてやる」
小枝を組んで焚き火の用意をしていたカチワリちゃんが小さく首を傾げているが、ここは文明の利器の出番だろう。
以前アリスやバイパーと共に森に入った時は、バイパーが何でも出来すぎた。
ここはライターや携帯食を使って現代人の力を蛮族に……、
「――！」
「……カチワリちゃん、それって何？　何で一発で火が付くの？」

キラキラした赤い石を手斧で叩き、手際良く火を付けたカチワリちゃん。
まただよ、この星の現地人はサバイバル能力が高過ぎだろう。
カチワリちゃんは拾った小枝を手斧で器用に尖らせると、塩を振ったウサギ肉やヘビ肉を突き刺し、焚き火にかざした。
取り出した大きめの鍋状の葉っぱを焚き火に載せて、中に沢の水を注ぎ込む。
この葉っぱは火に強いのか燃える事はなく、やがて湯が沸き出した。
カチワリちゃんは葉っぱを使って沸かした湯を竹製の水筒に補充すると、残ったお湯の中に道中で採取した野草を浮かべる。
多分、カチワリ族が飲むお茶みたいな物なのだろう。
良い匂いが漂ってくるソレを、仮面越しにフーフーと息を吹きかけ冷まし
葉っぱの容器ごと差し出してきて……、

「いや、これ子供に面倒見てもらってるダメな大人じゃん。うん、お茶はもらうよ？　飲ませてもらうし、ありがたいんだけどさ……」

不思議そうに首を傾げるカチワリちゃんは、俺が葉っぱを受け取ると良い感じに焼けた串焼き肉を差し出してきた。

アリスといいカチワリちゃんといい、俺は子供に養われる属性が付いてるのだろうか。

――と、食事を終えてまったりとお茶を飲んでると。

「……おっと、これはさすがに俺でも分かる。そこの茂みに何匹か魔獣がいるな」

「ッ――

「――ッ！」
　手斧を片手に立ち上がったカチワリちゃんは、俺を背中に庇うように前に出る。
　気付かれた事を悟ったのか、デッドリーヘッグが四匹ほど茂みの中から現れた。
　戦闘集団のカチワリ族でもこの数は脅威なのか、ジリジリと後退ったカチワリちゃんは俺に触れると動きを止める。
　チラリとこちらを振り返り、意を決したように魔獣に向けて駆け出そうとするカチワリちゃんを捕まえた。
「カチワリちゃんは俺の仕事を知らないの？　俺って戦う事を生業にしてるんだ」
　俺はこちらを見上げるカチワリちゃんへ、安心させるように笑みを浮かべ。

「ここまで道案内してくれたお礼だ。今度は俺が助けるよ」
　腰から銃を引き抜く俺に、カチワリちゃんはこくこくと何度も頷いた——

——真っ暗な森の中、俺は無数のデッドリーヘッグに追われながらカチワリちゃんを抱えて駆け抜ける。
「カチワリちゃんごめんな、最初の四匹だけだと思ったんだよ、あの数なら余裕でいけたんだ」
　肩に担がれたカチワリちゃんは、弁明する俺の頭を気にしてないよとばかりにポンポンと撫でてきた。
　最初のデッドリーヘッグ達はどうやら斥候部隊だったらしい。
　四匹目を撃退したと思ったら、無数のデッドリーヘッグに囲まれていた。

スタングレネードで目を眩（くら）ませた隙（すき）に、この子を抱えて逃（に）げ出したのだが――

戦闘服で強化されているとはいえ、さすがに犬型魔獣には追い付かれる。

黒い影（かげ）が迫（せま）り来る中、肩からぶらんと垂れ下がっていたカチワリちゃんが手斧を握（にぎ）った。

「ラアアアアアアアアアーッ！」

背後から飛び掛（か）かってきたデッドリーヘッグの頭に向けて、肩に担がれたままの体勢でカチワリちゃんが斧（おの）を振り下ろす。

魔（ま）獣（じゅう）迎撃（げいげき）装置と化したカチワリちゃんを担ぎ、森の合間から見える光を目掛けひた走る。

遠くに視認できるあの光は、アジト街の見張り台から森を照らすサーチライトだ。

あそこまで出られれば同僚達の援護が期待出来る。

やがて転がり出るように森から抜け出た俺達が、明るい光を見上げると

――

なんか、アジト街が燃え盛っていた。

6

焼けた瓦礫を住人達が片付ける中、カチワリちゃんを医療室に預けた

俺はキサラギの主要メンバーと共に会議室に呼ばれアリスの説明を受けていた。
「そんなわけで、お前さんが偵察任務に就いてる間にハイネ達を追い掛けてきたドラゴンによる襲撃を受けた。ドラゴンの気を引いていたロゼとラッセルが怪我を負ったが、死者がいないのは幸いだな」
　怪我を負わされたキメラ組は現在医療室にて治療を受けている。
頑丈なアイツらが絶対安静を言い渡されるとは、正直ドラゴンの力を舐めていた。
　アジト街で燃えたのは木造の倉庫のみで人的被害は無かった事が判明し、皆が胸を撫で下ろしたものの住人達の表情は暗い。
　それもそのはず。
「まったく、この役立たず共ときたら俺が居ないと何も出来ないのかよ！
これだけの防衛施設と装備に囲まれながら、トカゲすら倒せないのか！」

これだけの防衛施設と装備に囲まれながら、アイツでも倒せないのか」
アジト街には多数の戦闘員が居たにも拘わらず、飛来したドラゴンに手も足も出なかったらしい。
罵声を浴びせる俺に向け、俺を囮にして逃げ出した役立たずAが噛み付いた。
「う、うるせえバーカ！　俺達だって備え付けの重火器で対抗したんだよ！　でもどういうわけか飛び道具が効かねえんだ！」
「ああ？　コイツ、適当な言い訳かましやがって！　素直に僕達では手も足も出ませんでした、やっぱ戦闘員六号さんが居ないとダメなんですって言ってみろ！」
俺の煽りを受けて殴り掛かってきた役立たずAを迎撃していると、アリスが珍しく擁護した。
「いや、本当に重火器の効果が無かったんだよ六号。そしてこの現象には覚

えがある」
アリスの言葉に俺と役立たずAが動きを止めると、スノウがそれに追随(ついずい)する。
「うむ、砂の王や巨大猫(きょだいねこ)が持っていた、飛び道具無効化の特殊(とくしゅ)能力だな」
俺達が戦ってきたデカい魔獣(まじゅう)は大体この能力を持っていた。
なるほど、そうなると空を飛ぶドラゴン相手だと対抗手段が……。
「分かったかアホが、俺達だって何もしなかったわけじゃねーんだ！　攻撃(こうげき)が効かない時点で住民の避難(ひなん)を優先させたんだよボケが！」
「大体お前は、森で迷子になった挙げ句にカチワリちゃんに保護されたんだってなあ？　オラッ、役立たずはどっちなんだよ、言ってみろ！」
役立たず二人が、先ほどのお返しとばかりに煽り返した。
そのまま二人と取っ組み合いの喧嘩(けんか)をしていると、会議室のドアが控えめ

に叩かれる。
「失礼します。街の様子を見回って来ましたが、大きな被害はありませんでした。これなら冬への備えは間に合いそうです」
そう言いながら入って来たバイパーは、どことなくホッとした表情を浮かべていた。
と、取っ組み合っている俺達を見てバイパーが慌てたように、
「あ、あの、六号さん？　悪の組織とはいえ喧嘩は良くない事ですよ？」
「これは喧嘩じゃないよバイパーちゃん、役立たずを叱ってたんだ。コイツらは戦う事しか取り柄が無いクセに、それすら遂行出来なかったらタダのうんこ製造機じゃん」
「コイツ、次にドラゴンが襲ってきたらお前一人で戦わせるからな！」

「おう、泣き喚いても助けてやらねえぞ！　バイパーさんが居たから良かったものの、お前じゃぜってー敵わねえから！」
　バイパーさんが居たから良かったものの、って……。
「ひょっとしてバイパーちゃんがドラゴンを撃退したの？」
「あ、はい……。アリスさんが、飛び道具が効かないのなら戦闘員の皆さんをロケットで打ち上げようと言い出したので、それなら私がと……。ロケットではなくハイネのグリフォンで運んで貰い、ドラゴンに飛び移ってから魔王パンチを……」
　相変わらず自分の体を張る事に躊躇の無いバイパーの言葉に、本職の戦闘員達が気まずそうに視線を逸らした。
「……お前ら、新人の女幹部に特攻させて恥ずかしいと思わないの？　しかも、ロゼとラッセルみたいなガキ共ですら体を張って怪我したのに……」

「ちょっとだけ思ってるよ！　でも仕方ないだろ、俺達が止めてもバイパーさんが乗り込んで行くんだもんよ！」

「俺達だってちゃんと戦える相手なら先陣(せんじん)切って突(つ)っ込(こ)んでくから！　ドラゴンへの対抗手段を考えておくから、次は見とけよ！」

　負け犬じみた言い訳をしながら出て行くモブを見送っていると、アリスが言った。

「カチワリ族の手紙からすると、竜(りゅう)を始めとした多数の大型魔獣がいると書かれてた。なら、あのドラゴンみたいなヤツがまだいると考えた方がいい」

「そうか……。私は建設業を生業としているからいいが、戦闘員は大変だな」

　本業が騎士(きし)だったはずの建設作業員が他人事(ひとごと)のように言ってくる。

「お前ふざけんなよコラ、相手がヤバそうだからって腰引けやがって！　何が建設業だ、いつもの騎士のコスプレはどうしたんだよ！」
「ぶ、無礼な事を言うな、コスプレ呼ばわりは赦さんぞ！　確かに昨夜のヤツはデカかったが、あれほどの大物はそうそういるものではないだろう。それにドラゴンは売れば金になる、そこまで言うならやってやろう！」
　言い合いを始めた俺達に、バイパーがおずおずと手を上げて。
「あの、言い難いのですが……。あの小ぶりのドラゴンはあまりお金にならないかと……」
　えっ。
「アレで小ぶりって何言ってんのバイパーちゃん。俺達、命辛々（いのちからがら）逃げて来たんだけど」

「い、いえその……。昨夜のはそもそも下位種のドラゴンでして。もちろん弱くはないのですが、この星で本当に恐れられ、高い値段が付けられているのは、最上位種と呼ばれ自然災害とも言われる存在でして……」
　しばらくの間はスノウと共に、俺も建設作業員を営む事にした――

――会議室を後にした俺が、転職を決意し重機置き場に向かっていると、アリスに突然ナンパされた。
「おい六号、ヒイラギの所に抗議に行くぞ」
「俺は建設作業員になったから、悪いが他を当たってくれ」
　訳の分からない事を言い出したアリスの誘いに俺は迷い無くノーを突き付けた。
　昨日の今日で森の奥に出向くとか、バカも休み休み言えって話だ。
「お前が警戒してるのは森でドラゴンを操るヒイラギ族だろ。自分が抗議に

行くって言ってるのは、法制機関を名乗る連中だよ」

そういえば、どっちも同じヒイラギって名前だったっけ。

「以前、アデリーって女が言っていただろ。『あの地上人達は我が眷属(けんぞく)。人々がその身に過ぎた力を手にした時、それを妨(さまた)げるための調停者』ってな」

なるほど、ヒイラギ族が本当にアイツらの関係者なら停戦協定に違反(いはん)する事になる。

「でも、アイツらがヒイラギ族に指示を出したのなら、ノコノコと本拠地(ほんきょち)に乗り込むのは危なくないか？」

そんな俺の疑問に対し、アリスが悪い事を企(たくら)む顔で。

「実は情報収集のために、連中のところに戦闘員十号を潜入(せんにゅう)させているんだ。あいつらの出方によっては、十号に指示を出してヤツらの拠点(きょてん)を爆破(ばくは)してやろう」

7

　アリスと共に元トリスへとやって来た俺は、連中が拠点にしている城でごねていた。
「悪の組織がアポなんて取ってられるか、いいからアデリーってポンコツを呼び出せや！」
　いきなり面会を求めた俺達は、城の門番らしきヤツに事前の連絡が無ければ通せないと止められていた。
「使徒アーデルハイト様は現在他のお客様を応対中です！　これ以上騒ぐのであればヒイラギの精兵を呼びますよ！」
「お？　先の戦いで俺達に蹴散らされたクセに、お前キサラギ舐めてんの

か？　やるってんなら容赦しねーぞ？」
　と、俺が門番に絡んでいると頭上から声が降ってくる。
「構わないからその人達を通してやれ。アーデルハイトの代わりに私が相手をしよう」
　城の窓から声を掛けてきたのはアデリーの上司のイケメンだった。
　確かフリッツとかいう名前だったはずだが、門番の兵士に案内されたのは質素な造りの部屋だった。
　ここはフリッツの自室らしいが、現在停戦中とはいえ一時は敵対した俺達と馴れ合うつもりはないという事だろう。
　ここは舐められないために、もっと好待遇で扱えやと文句の一つも……、
「実はグルネイドという国の使者がわけの分からない苦情を言いに来ていて、アーデルハイト君が応接室を使っていてね。すまないが、キミ達の対応は

この部屋でお願いしたい」
「……そうか。自分達もアポ無し訪問だからな、そういう事なら仕方がないさ」
　今回はこっちが引いてやるみたいな態度のアリスだが、グルネイドからの苦情という俺達が送った手紙が原因ですね。
「キミ達がここに来た理由は分かっている。ヒイラギ族が操る魔獣についての話だろう？」
　どこか余裕を感じさせる笑みを浮かべ、フリッツはテーブルの上で両手を組んだ。
「すっとぼけるかと思えば話が早いな。お前らが飼ってるヒイラギ族がドラゴンをけしかけて来やがった。まだ停戦期間中だったはずだが、どういう事なのか聞きに来た」
　アリスの苦情にフリッツは未だ余裕の笑みを崩さない。

何か切り札でも隠し持っているのかと思った、その時だった。
「確かにヒイラギ族は我が機関と関わりがある。だが彼らは、高い技術と文明を持つ我々を神の使徒だと崇める集団でね。アーデルハイトは彼等の事を眷属だのと呼んで可愛がっているが、言ってみれば下部組織……いや、我々を勝手に崇める信者だな」
そんな事を言いながら冷笑を浮かべるフリッツの背後で静かにドアが開かれて――
音も無く部屋に入って来たのは、右肩にバスタオル、そして左肩に光学迷彩を引っ掛けた、素っ裸の戦闘員十号だった。
俺達に気付いた十号は、やあとばかりに片手を上げる。
潜入任務はもっと慎重にやるべきはずなのに、どうしてコイツはお偉いさ

んの部屋に住み着いてるんだ。

「ヒイラギ族という呼称も、我々に近付きたいがために彼等が勝手に名乗っているに過ぎない。……とはいえ、我々の思想や理念を説き、使わなくなった技術を払い下げはしたのだが」

フリッツが何か言ってるが話が頭に入って来ない。

アリスも予想外の展開だったのか、俺の隣で完全にフリーズしている。

濡れた体をほこほこさせている事から、どうやら風呂上がりらしい。

十号が出てきた奥の部屋は浴室になっているのだろうが、勝手に風呂まで入っておいてどうしてお前はバレないんだ。

フリーズしたままのアリスを肘で突くと、ハッと我に返って再起動した。

「……ああ。つまりそちらの言い分は、ヒイラギ族が勝手にやった事だ、自分達に責任はない、みたいな……ええと……」

いつになく言動が定まらない事からまだ完全に再起動したわけではないようだ。
しっかりしろアリス、アンドロイドのお前が動じてどうする、俺達が変な反応を見せると振り向かれてバレるだろうが。
「いや、そこまで無責任な事は言わないさ。だがキミ達の組織では下の者が勝手に暴走したりはしないのかな？　枝葉の組織は無いのかね？　今回の件について謝罪はしよう。その上で、これまでの関係についても維持したいと考えている」
バスタオルで体を拭き終わった十号は、にこやかに笑うフリッツの後ろで、冷蔵庫らしき物から勝手に飲み物を取り出した。
やめろ、『お前も飲むか？』みたいなジェスチャーを取るんじゃない。
「そ、そうか。謝罪してくれるならそれでいいさ。ええと、それじゃあアイツらはどうすれば……」

アリスがいつもの強気を出せていないが、コイツは想定外の事態に弱いのかもしれない。

と、十号がハンドサインとジェスチャーでこちらに何かを伝えてきた。

「先ほども言ったが、あくまで彼等は私達を一方的に慕っているだけの者達だ。好きに対処してもらえばいい」

『重要機密・コイツ・女・男装してる』

……この状況で十号がそんな事を伝えてくるせいで、本当に話が入ってこない。

いや、確かにどことなく線は細いし声質もハスキーだが、それって今伝える必要がある事なのか、コイツ絶対今の状況を楽しんでるだろ。

「ええと、それでは……あの連中に報復しても構わないのか？」

未だ動揺を隠しきれないアリスをよそに、十号が再びハンドサインを送ってくる。
『証拠・見せる』
違う、別にフリッツが女だとか今はそこまで重要じゃない。
そんな俺の願いも虚しく、十号は堂々とタンスを開けて中を漁った。
「ああ、私はそれで構わないさ。とはいえ……」
十号はタンスから取り出した女物の下着を一切の迷いも無く身に着けて。
『な？』
なじゃない、どうして装着する必要があったんだ。
どうしてこの状況で俺達の邪魔するんだ、お前今絶対悪行ポイントが発

生してるだろ。

俺達はお前がバレないように真面目な顔を取り繕ってるんだぞ、その格好で親指くわえてセクシーポーズを取るのはやめろ。

「彼等が使っているのは、我々にとって時代遅れの技術とはいえ、キミ達にとって十分な脅威となるだろう。なにせアレは、下位のドラゴンすら操れる代物だ」

いよいよ我慢出来なくなった俺は肩を震わせ俯いた。

それを見て交渉を有利に進められているとでも受け取ったのか、フリッツは不敵な笑みを浮かべてみせるが……。

「彼等は案外手強いぞ。フフッ、せいぜい報復とやらがうまくいく事を祈って

いるよ」
あなたの部屋のベッドの中で、下着姿のおっさんが寝始めましたよ。

――ヒイラギからの帰り道。

疾走するバギーの助手席で、俺は運転席のアリスに言った。

「送り込むヤツを考えろよ。笑っちゃいけない状況だと、余計笑いたくなるんだぞ」

「アレを自分のミスみたいに言われるのは心外過ぎるぞ。お前ら戦闘員は本当に何なんだ、一体何を食べてどう生きればあんなバカな行動が取れるんだ」

キワモノの多い戦闘員に今さらそんな事言われても。

「何にせよ、これで言質は取った。頼まれたのは子供の受け入れだが、もうカ

チワリ族に加勢するぞ、これは悪の組織と法制機関の代理戦争だ」

「つまり、久しぶりの戦闘員派遣業って事か。戦う事なら任せとけ、って言いたいところなんだけど……」

問題は、敵が手懐けている銃弾の効かない大型魔獣だ。

言ってみれば圧倒的に火力が足りない。

デストロイヤーを持ち出しても、ドラゴンに空を飛ばれては手が出ないのだ。

「お前さんの懸念は分かっているさ。それに関しては自分に任せろ、ウチの最強の戦力を頼ればいいんだ」

現時点での俺達の最強戦力といえば、それは一人しかいない。

何だかんだで面倒見の良いあの人が、ロゼとラッセルが入院中と知れば間違いなく駆け付けてくるだろう。

幕間①　――お姉さん、初めまして！――

聞き慣れた声が頭に響いた。

「今の気分はどうだい？　頭痛や吐き気なんかは無い？」

薄っすらと目を開けると、白衣の女の人がこちらを覗き込んでいる。

……何だか頭がぼやっとする、と目の前の女の人に答えた。

「そりゃそうさ、キミに打ったのは記憶を取り戻すための薬だからね。脳に負荷が掛かってるんだ、ぼやっとするのも当然さ」

どうしてそんな薬を打ったの？

「どうしても何も、本来のキミの人格を取り戻すためさ。覚えていないと思うけど、改造手術であちこち弄り回したキミの体は定期的にメンテナンスを必要とするんだ。そして、メンテナンスの最後には、こうして記憶の回復措置

を行っているのさ」

　別に、記憶を失ったままでもいいのに……。

「そういうわけにはいかないよ。キミが可哀(かわい)そうな子になったのは僕の責任だからね。たとえどれだけ時間が掛かったとしても、必ず元に戻してみせるよ」

……今までどんな方法を試したのか、聞いてもいい？

「……催眠療法(さいみんりょうほう)だね。大丈夫(だいじょうぶ)、今回は自信があるよ。前回ちょっとだけ効果があった催眠療法と特殊(とくしゅ)な薬を併用(へいよう)するのさ。キミを催眠状態にして、遠い過去の記憶を呼(よ)び戻すんだ」

……本当に、催眠療法はちょっとだけ効果があったの？

ぼやっとする記憶の欠片(かけら)に、何か酷(ひど)い事を言わされた覚えが……。

と、乗り気じゃない私の言葉に、女の人は心外だとばかりに首を振り。

「アレは遊んでいたわけじゃないからね！　ちゃんと催眠に掛かっているかを確認するため、キミが普段言わなそうな事を命じただけだよ！　ちょっと官能小説を朗読させただけだから、あまり気にしない事だ」

……………。

　黙り込んだ私から目を逸らし、女の人は誤魔化すように咳払いすると。

「それじゃあ記憶の回復を始めるよ！　キミは今、既に遠い過去へと記憶を遡っている。言葉遣いが昔のままなのがその証拠さ！　さあ、まずは自己紹介だ。そして、今の自分がどんな状況なのかを言ってごらん？」

　名前……私の名前……そして、今の私は――

「私の名前は三条ゆかり……明日は小学校の入学式……」

「戻り過ぎぃ！」

二章

ベリアル来襲

1

訓練場に集められた俺達の前で、笑顔の上司が言ってきた。

「来ちゃった」

一体何がどうなったのか、キサラギ最強の戦力である業火のベリアルがやって来た。

俺は隣に立つアリスにだけ聞こえる声で。

(てっきりトラ男さんを迎えに行くのかと思ったら、何でベリアル様がいるんだよ！)

(地球での戦闘が小康状態らしくてベリアル様の手が空いてたんだ。以前リリス様を騙くらかして呼んだ時と違って、今はアジトの転送装置も安定しているからな。地球から呼び出しを受けたらすぐ送り返す条件付きでベリアル様を借りられたのさ)

三人の最高幹部の中で、ベリアルだけはデスクワークがない。

正確にはデスクワークが出来ないのだが、地球で戦力を持て余しているぐらいなら現地で使った方がいいという事なのだろう。

確かに今の状況なら誰よりも頼りになるが、この人はフットワークが軽過

ぎる。
（おいアリス、お前ベリアル様がどういう人なのか分かってるのか？　ある意味ではリリス様より問題児なんだぞ）
（理不尽で話が通じず、何でも力で解決する武闘派だとは聞いてるよ。そもそもキサラギにまともな人間なんていやしねえんだ、厄介事が起こるのは想定済みだよ）
　アリスがそこまで理解しているならいいのだが、実はさっきから、ベリアルについて一つ気になる事が。
「ベリアル様、ちょっと質問いいですか？」
「何だ六号、言ってみろ」
　そう言って胸を張るベリアルに。
「それじゃあ聞かせてもらいますけど、何でそんな格好してるんですか？

今までのドスケベ幹部服はどこいったんスか」
　水着みたいな服を着ていたはずのベリアルは、赤くカスタマイズされた戦闘服を身に着けていた。
「お前が安物のコスプレAV嬢みたいって言ったからだろうが！」
　あれはただ感想を言っただけなのだが、根っこのところが純粋なベリアルはどうやら気にしていたらしい。
「戦闘服は良いんですけど、胸元をベルトで強調しているのはなんなんですか？　どうしてすぐエロくなるんですか」
「上司に向かってエロとか言うな！　仕方ないだろ、胸のファスナーが閉まらないんだよ」
　ベリアルはそう言って、ナチュラルにエロを振り撒いてくる。
「それで、今はどういう状況なんだ？　あたしは誰を焼けばいいんだ」

挨拶もそこそこに物騒な事を言い出すエロ上司。

「森に住んでるヒイラギ族って連中が、デカい魔獣を操ってるんでソレを片付けて欲しいんス。ですが、その前に現地の部下を紹介しますよ」

すぐに帰る予定のベリアルにわざわざ紹介するのには理由がある。

他の同僚達が先ほどから微動だにしないのも、ベリアルに目を付けられないようにと、あえて動かないのだ。

「おいハイネ、こっち来い！　この方はキサラギ最高幹部の一人、ベリアル様だ」

と、様子を覗っていたハイネに向けて、俺がコイコイと手招きをしたその時だった。

「お前が報告書にあったパチもんか！」

「ぱ、パチもん⁉　パチもんってどういう事⁉」

突然キレ出したベリアルに怯えたハイネが後退る。
「おいお前、自分の事を炎のハイネとか名乗ってるらしいな！　あたしは業火のベリアル様だ！　紛らわしいから名前を変えろ！」
「何で!?」
初対面でいきなり理不尽な事を言い出したベリアルに、ハイネが唇を噛み締めながら言い返す。
「お、お言葉ですが、これは炎使いのアタシが前魔王様から頂いた大切な称号なんです。紛らわしいと言われても、おいそれと変えるわけには……」
そういえばコイツは、魔王軍四天王とか炎のハイネとか呼ばれる度に喜んでいたし、よほど思い入れがあるのだろう。
……だが、
「そんな事はどうでもいい、お前は今日からただのハイネだ！　あと、自分の

事をアタシって言うとこもキャラ被ってるんだよ！　これからは『あたい』か『あちき』にしろ！」

「理不尽過ぎる！」

ついでに言うなら、二人ともエロい体をしているとこまで被ってると思う。

ハイネが喚いているが、理不尽の塊みたいなベリアルには正論を言っても通用しない。

戦闘に関しては最高に頼れる人だが、それ以外に関しては色々ヤバい。

俺がハイネを紹介したのは、このちっとも人の話を聞こうとせず、理不尽で気分屋なベリアルのとばっちりを分散するため。

「よし、それじゃあハイネ！　同じ炎属性で現地人のお前はベリアル様の案内係だ。失礼が無いようしっかりやれよ！」

そして、何かと似ているコイツにベリアルを押し付けて、面倒を無くすた

めだ！
「お前と会うのも久しぶりだし、あたしの案内係は六号がいい」

2

目の前の光景にハイネが呆然と呟いた。
「ベリアル様、フットワーク軽いですね……」
　ベリアルがこの星にやって来てからまだ一時間ほどしか経っていないのだが、行動力の塊みたいな武闘派上司は、この星の観光もそこそこに森に火を放っていた。
　この星の敵性生物と戦ってみたいと言い出したので、目の前の森に連れて来たのだ。
　お共としてベリアルから指名を受けた俺とハイネがその光景を遠巻きにこ

見守っていると、ベリアルの力で業火に包まれた森の中から蠢く影が現れた。
「おっ？　おい六号、なんか変な女が出てきたぞ！」
「アレは森を焼くと現れる、ここの番人みたいなヤツです。頭がパックリ開いたら弾丸みたいなのを撃ち出してくるんで、気を付けてくださいね」
　ベリアルの力は、リリスのヤバい脳手術で得た発火能力だ。
　その火力は絶大で、個人で兵器並みの攻撃力を持つベリアルは完全に人間を辞めている。
「あたしを誰だと思ってる、今さら銃弾なんて効くわけないだろ」
「……それでもまあ、念のためっス」
　全身に限りなく改造手術を施したせいで、高い防御力と身体能力も有

しているベリアルは、何かと最前線に立ちたがる。
「あっ！　い、痛……くない、痛くないぞ！　おい六号、ちっとも痛くないからそんな目で見るのは止めろ！」
「分かりましたから隠れてください、わざわざ当たってやる必要はないでしょう」
「いや、森の番人の弾丸をまともに受けて、どうして生きていられんの……？」
　引き気味のハイネをよそに、敵性生物が放つ弾丸を真正面から受け止めていた意固地なベリアルが、泣きそうな顔で木陰に隠れた。
　それと同時に燃え盛っていた木々が枝葉から霧状の水を噴出し、辺りの炎を消し始める。
「おい、コイツらスプリンクラーを内蔵してんのか？」
「この星の森は自力で消火活動するんですよ。そのおかげで焼き畑農業も

出来ないんス」
ベリアルは感心したように頷（うなず）くと、ポケットから何かを取り出した。
「つまり、森を焼くには火力が足りないって事か」
「色々と間違（まちが）ってますが、ベリアル様が納得するならそれでいいっス」
ふんふんと頷いていたベリアルは、自分の首筋にソレを打ち込んだ。
ニトロを主な原料とするカートリッジで、ベリアルの発火能力を増加させる物だ。
コレを打ち過ぎると副作用で翌日が酷い事になるのだが、学習能力が無いこの人は何度言い聞かせても躊躇（ちゅうちょ）なく使用する。
血管に直接打ち込まれたニトロの効果か、ベリアルの目が充血（じゅうけつ）し輝（かがや）いた。
「おい新入り、炎使いならよく見とけ！　火力さえ足りてれば、あたし達に敵はいないって事を教えてやる！」

「は、はいっ！」

ハイネの返事に上機嫌になったベリアルは、木の陰から右手を突き出す。

「これでも！　食らええええええ！」

ベリアルが叫ぶと同時、森の中央に巨大な炎が打ち上がった——！

「——なるほど、その結果がコレか」

ベリアルが挨拶代わりに森の一部を消滅させた衝撃で、アジト街の窓ガラスが全滅した。

突然の大爆発に住人達がパニックになり、グレイス王国からも様子見の使者がやって来ている。

そして現在、それらの後始末を終えたアリスに呼ばれ、窓の割れた会議室の隅っこで俺達三人は正座していた。

「ごめんなアリス、いつもと同じ感覚で攻撃しちゃった。地球のアジトの窓は全部強化ガラスで出来てるだろ？　それに、向こうの住人は爆発には慣れてるからさぁ」

　申し訳なさそうな顔をしたベリアルが頭を掻きながら謝るが。

「いや、ベリアル様はしょうがねえ。多少のトラブルが起こるのは承知の上で呼んだんだ。ちゃんとフォローしなかった二人が悪い」

「ちょっと待ちなよ！　あたいは悪くないだろ、ベリアル様の力がどれほどかも知らなかったんだからさ！」

　ベリアルの火力を目の当たりにしたハイネは一人称があたいになった。

「おっ、それじゃあ悪いのは俺だってか？　そいつはキサラギの戦闘員としては褒め言葉だね！　お前もベリアル様のお供に選ばれたんだ、一人だけ責任逃れは赦さねえぞ！」

「アンタはベリアル様と長い付き合いなんだろ？　なら、こうなる事は予想

しときなよ！」
　正座したまま喧嘩を始めた俺達に、アリスがやれやれと肩を竦めた。
「アジト街の窓は全部割れちまったが、ベリアル様の戦果を考えれば代償としては小さなもんさ。なにせ開発が進まなかった森のド真ん中に広大な空き地が出来たからな。クレーターさえ埋めてやれば、すぐに開拓地として利用できる」
　ベリアルが引き起こす爆発の最大威力はTNT火薬1万トンに相当するらしい。
　それがどれほどの威力なのかは知らないが、そんな攻撃をニトロカートリッジ一つでポンポン放てるのがベリアルの強みの一つだ。
「まあ自分もまさかベリアル様が、この星に来て即日出撃するだなんて思わなかったからな。だがキサラギが誇る最強戦力が来た以上、もうヒイラギ

族なんて敵じゃねえ」
キサラギの科学力に絶対の信頼を置くアリスは、小さな拳を握り締めると。
「悪の組織がやられたまんまでいられるか！　明日は戦闘員を集めて、カチワリ族の拠点に援軍に向かうぞ！」
「ああ！　大怪我負わされたキメラ二人の仇討ちだ！　明日はあいつらに目に物見せてやるよ！」
盛り上がるアリスとハイネをよそに、ベリアルが俺の耳元に囁いてくる。
（なあ、今から襲いに行っちゃダメなのか……？）
この人の行動力と労働意欲だけは、怠惰なリリスに見習わせたいところだ。

――翌日。

「うう……ろくごう、気持ちわるい……」

「朝っぱらから何て事言うんスか、俺のどこがキモいんですか」

戦闘員の宿舎に迎えに行くと、部屋から顔を出したベリアルが酷い事を言ってきた。

「ちがう……。あたまが痛くて気持ちが悪い……」

「昨日、ニトロカートリッジを使ったからですよ。だからいつも言ってるじゃないですか、あんな体に悪い物は使わない方がいいですよ、って」

浴衣をはだけさせたまま、まるで二日酔いのように青い顔をしたベリアルは、おもむろにニトロカートリッジを取り出した。

「こういう時は、寝起きに一発打つとシャンとするんだ……」

「それは酒飲みのおっさんのセリフっス。そんな理由で打たせませんよ」
カートリッジを奪われたベリアルは恨めしそうな視線を向けながら、
「返せよ、あたしの大事な物……」
「返せません。リリス様から打ち過ぎ注意って言われてますから」
フラフラしているベリアルを、部屋に戻して着替えさせようと背中を押すと、背後でドサッという音がした。
何事かとそちらを見れば……。
「隊長……。そのエロい女の大事な物って？」
こちらをガン見するグリムが立っていた。
誰かへの差し入れだったのか、廊下にはサンドイッチか何かが入ったバスケットが転がっている。
「見るからに二日酔いみたいな、そこのエロエロ女から何を奪ったの？　服を[illegible]その女の、大事な物って何なのよぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

「あなたにとってその女の大事な物って何なのよおおおおおおおおおお——」

「朝から何だようるせえな！　コレだよコレ、ベリアル様のニトロだよ！」
　ベリアルから取り上げたニトロを見せると、グリムがふと真顔になる。
「……ベリアル様って、名前だけは聞き覚えがあるわね」
「キサラギの最高幹部の一人だよ。俺の上司で偉い人だ」
　グリムはその場でピシッと正座すると、深々と頭を下げて。
「いつもウチの隊長がお世話になっております。私、隊長の部下兼婚約者のグリム＝グリモワールと申します。若輩者ですが、今後とも私達二人をご指導くださいませ」
「お前誰彼構わず婚約者を自称するのは止めろ、でないときっと後悔するぞ」
　思わず突っ込む俺に向け、グリムがカッとこちらを見詰め。
「後悔するってどういう事よ！　今更アレは嘘でしたは通じないわよ！」

「婚約者がいるって言って回ると、他に男が寄ってこないって事を教えてやってるんだぞ」
　真剣な顔で悩み込むグリムにバスケットを拾って渡してやると、いつの間にか顔色が良くなっていたベリアルが口を開いた。
「お前、相変わらず変な女にモテるなあ。婚約者って何なんだ？」
「十年後にお互い独身だったら結婚するってだけですよ。まあ、俺はそれまでに誰かとくっつくつもりですが」
「仮にも婚約者の目の前で、この人最低な発言したわね」
　バスケットを抱きながら文句を言うグリムに向けて、ベリアルが訝し気にジッと見詰め。
「なあ、グリムって言ったか。お前、何で裸足なんだ？」

「宗教上の理由です。靴や靴下を履くと、大変な事になるんです」
初対面では誰もが気になる部分に突っ込まれ、グリムが笑みを浮かべて返す。
「……六号、コイツに靴下穿かせてみないか？」
「ダメですよベリアル様、俺の予想だと多分コイツ死にますよ？」
だが好奇心旺盛なベリアルは、子供みたいに目を輝かせると。
「靴下穿いて死ぬって何だ、そんなバカな話があるか。あたし悪の組織の人間だから、嫌がってるとむしろやりたくなる」
「いや、コイツ本当によく死ぬんですよ。ちょっと目を離しただけで、いつもくだらない理由でリタイヤするんス」

そんな事を言ってる間にベーテルが転送機とメモを取り出した

どうやら本気で試すようだ、このままだとグリムが死ぬ。

「……ねえ隊長、まさか本気じゃないわよね？　私、隊長に食べて欲しくって朝ご飯作ってきたの。良妻ってヤツね。そんな可愛い婚約者がどうして殺されかけてるの？」

「いいかグリム、合図したら全力で逃(に)げろ。この人は言い出したら聞かない人だから、俺が体を張って時間を稼(かせ)ぐ。暫(しばら)くの間逃げ切(き)れば、ベリアル様は何をやろうとしていたのかすぐに忘れる」

俺の真剣な空気を読んだのか、グリムが怯(おび)えた顔で後退った。

だがグリムは、大切そうに胸に抱(だ)き締(し)めていたバスケットを廊下の隅にそっと置くと。

「隊長、今日のサンドイッチはいつもより気合いを入れたの。ピヨピヨモゲラの高級肉を使った自信作よ。この戦いが終わったら、中庭で一緒(いっしょ)に食べまし

ょう？」
「俺が知らない肉を使うなよ、元の生き物の姿を見てから食べるか決める。……そうじゃない、お前は逃げろって！　俺達が束になっても勝てないから！」
　グリムは口元に指を当て、フッと優しく微笑むと。
「私はただ守られるだけの女じゃない。愛する女を命懸けで守ろうとする婚約者を置いて逃げられるような、そんな要領のいい女じゃないわ。フフッ、それが出来るんだったら、今頃とっくにイケメンセレブと幸せな家庭を築いているわね……」
「別に命懸けで守ろうとはしてないし、愛する女は言い過ぎだぞ」
　俺の突っ込みを聞き流し、グリムが幾つもの指輪を取り出した。

「これこそは夜の街を巡回し集めて回った愛の結晶！　彼ら、彼女らの想いをこめて、今ここに……」

「オラァ！」

シチュエーションに酔い盛り上がっていたグリムは、言い終わる前にベリアルの低空タックルで引き倒された。

さすがはキサラギ一の武闘派だ、ろくに反応すら出来なかった。

「ベリアル様に捕まっちゃったらもうどうにもならないな。しょうがない、ちょっとお供え物集めてくる」

「早々に諦めないで！　待って隊長、私を守ってくれるんじゃなかったの⁉」

ベリアルに押し倒されたグリムが喚くが、最高幹部を前にしてしまっては、俺に出来るのは時間稼ぎがせいぜいなのだが……。

「だから逃げろって言ったのに、しょうがねえなぁ……。ベリアル様すんません、そいつ一応俺の部下なんで、ここで死なれちゃ」

「そおい！」

場の空気を読めないのではなく読もうとしないベリアルは、俺達のやり取りを全てスルーしグリムに靴下を穿かせていた。

3

グリムの亡骸を祭壇に収めた俺達が集合場所に行くと、三人のモブ戦闘員とハイネ、そして案内役のカチワリちゃんが待っていた。

集落を救ってもらえる事が嬉しいのか、カチワリちゃんは手斧を片手に上機嫌だ。

「どうするんスかベリアル様、アレは当分復活しませんよ」

どうするんだハーデス様？　アレは完全復活しませんよ」
「アレだとか復活だとか言われても何の事だか分かんないな。だってほら、あたし改造手術で記憶が一部失われたから」
　過去に行われた改造手術でどうしてさっきの記憶が飛ぶのかは分からないが、さっきのアレは無かった事にしたようだ。
　――気を取り直したベリアルは、居並ぶ戦闘員に向けて大声を張り上げる。
「よし、全員揃ったな！　番号！」
「六！」
「十五！」
「十七！」
「二十九！」
「

「――ッ！」
「えっ……あ、あたいはどうすれば……」
　それぞれが自分の番号を叫ぶとベリアルに頭を叩かれた。
「誰がお前らの名前を言えっつった！　もういい、戦闘員四人に現地人が二人だな！　あたしを含めて七人か。軽い負傷なら作戦続行、一人減ったら撤退だ！」
「そこは一人も欠けないようにとか言ってください、オケラやミジンコだけじゃなく戦闘員にも命があるんスよ」
　リリスといいアリスといい戦闘員の命を何だと思ってやがる、これだからキサラギはブラック企業だと言われるのだ。
　だがベリアルは、ブーイングを上げる俺達を不思議そうに見回すと、

ハナ、あたしがいるんだからお前らが先に死ぬわけないだろ？　ちゃんとお前らは守ってやるよ。減るとしたらあたしが最初だ」

「急にそういう事言われるとキュンとするんで止めてくれませんかね」

この人は普段は理不尽の塊なクセに、たまにこうやってたらしにくるのだ。

同僚達が照れくさそうに俯く中、ちょっとだけ顔を赤くしたハイネがそっと囁きかけてくる。

（なあ六号、ひょっとしてベリアル様は案外まともな上司なのか？）

まともな上司かはともかくとして、根っこのところは善良なんだよ。

――カチワリちゃんに森を先導されて数時間後。

生い茂る森の奥から、カチワリ族の合図らしき、何かを打ち付ける音が

聞こえてきた。

「――！」

それを聞いたカチワリちゃんがハッと顔を上げた後ワタワタとジェスチャーするが、何を伝えたいのかが分からない。

音が聞こえてきた方に立ちはだかり大きくバッテンをしてくる事から、この先に行くなと言いたいのだろうか。

「おい、伝えたい事があるならちゃんと言え！」

「――!?」

理不尽な上司は蛮族（ばんぞく）の少女が相手でも容赦（ようしゃ）がなかった。

この子はまだ共通言語の習得が怪（あや）しいだけで、別に喋（しゃべ）らないわけではない。

カチワリちゃんもブンブンと首を横に振（ふ）り、その事を伝えようとしているが……。

「この先で何が起きてるのか言ってみろ。仮面付けるほど人見知りなのはしようがないが、恥(は)ずかしがってる場合じゃないだろ！」

人見知りで仮面を付けてるわけじゃないと思うのだが。

カチワリちゃんはひとしきり迷った様子を見せると、ベリアルの耳元に仮面を寄せて。

「――。――！」

「よし、ちゃんと言えるじゃないか」

ベリアルが、よく出来ましたとばかりにカチワリちゃんの頭を撫(な)でる。

「さっきのを解説すると……。『この先にある集落が、大型魔獣(まじゅう)と多数のドラゴンの襲撃(しゅうげき)を受けており、戦況(せんきょう)は最悪。大人達は集落に火を放ち魔獣達を道連れにする。これを聞いた子供達はキサラギに保護を求めよ』だとさ」

ベリアルはこちらに背を向けたまま淡々と言葉を続ける。
「そしてこのちっこいのは、『これ以上は巻き込めない、もう帰ろう』って言ってるぞ」
　そして、嫌がりもせず頭を撫でられるがままのカチワリちゃんを見下ろすと。
「お前ら、子供にここまで言わせたからにはやる事は分かってるな！」
　それを聞いてハッと顔を上げたカチワリちゃんに、ベリアルは安心させるように笑いかけると、あれほど副作用で苦しんでいたくせに迷う事なくニトロを打った。
「お前ら行くぞ！　乗り込めえええええ！」
「「「ヒャッハー！」」」
「ラアアアアアアア！」

「ま、待って、あたいを置いてかないで！」

ニトロの副作用で目を血走らせたベリアルは、血気に逸る戦闘員を引き連れて音が鳴る方へ駆け出した――！

「――ベリアル様が突っ込んでって、森も魔獣もみんな焼けた」

「もうちょっとまともな報告をしろ」

帰還した俺の報告に、アリスが詳細を尋ねてきた。

「午前十一時二十分、襲撃を受けていたカチワリ族の集落に到着。十一時二十一分、ベリアル様が、大型魔獣を率いていたレッサードラゴンの一匹に飛び蹴りを放ち、これを撃墜。その後、ベリアル様がカチワリ族の集落ごと残りのドラゴンと魔獣を焼いた」

「何て事してくれるんだ」

[illegible]

俺にそんな事言われても
「ベリアル様を止める暇も無かったんだよ。敵と遭遇した瞬間に、熱に強いはずのドラゴンが蹴飛ばされて焼かれたんだぞ。人的被害が無かっただけマシだと思ってくれ」
　俺の説明を受けたアリスがどうしたものかと腕を組む。
「……で、肝心のベリアル様はどこ行った？」
　ベリアルの姿がない事に気付いたアリスが尋ねてくるが。
「うっかりカチワリ族の集落を焼いちゃったけど、もう片方も焼けばバランス取れるなとか言って、ヒイラギ族の集落を襲いに行った」
「今すぐ追い掛けて止めてこい」
　アリスが真顔で言ってくるが、
「もう間に合わないと思うぞ。カチワリ族の集落からそんなに離れていないらしいし……」

「……」

　と、まるでタイミングを合わせたように、割れた窓ガラス代わりに張り付けていたビニールがビリビリ震え、森に巨大な炎が打ち上がる。

「……アイツらが持つ、魔獣を操る技術とやらが欲しかったんだがなあ」

「多分もう燃え尽きてると思う」

　とはいえこれで敵対蛮族が滅び、今後の侵略が楽になった。

「なあ六号。法制機関ヒイラギのフリッツが、『彼等は案外手強いぞ』だの、『フフッ、せいぜい報復とやらがうまくいく事を祈っているよ』だのドヤ顔で言ってたのは何だったんだ。竜は瞬殺されてるし、ヒイラギ族なんてもののついでに狩られてるじゃねえか」

「まあ結果的には良かったじゃないか。カチワリ族の集落は焼けたけど、死を覚悟していた大人達も助かったんだし。ベリアル様が帰ってきたらご馳走で労ってやらないとな」

そもそも俺が一人で帰って来たのには理由がある。

ベリアルが、アジトに帰ったらこの星ならではの物を食べたいと言い出したのだ。

相変わらずの気紛れぶりだが、オークのかぶと焼きで驚かせてやろうと思う。

「……そうだな。最高幹部が来る時点で穏便に済まねえのは分かってた。サクッと問題が解決した分、リリス様よりよっぽどマシだ。本部には無理を言って借り受けたから、二日で返す事が出来て良かったよ。今夜はせいぜい労って、気持ち良く地球に帰ってもらおう」

「ベリアル様は敵さえ与えておけばちゃんと働いてくれるからな。ただ……」

俺が途中まで言い掛けると、アジトの無線に同僚達から連絡が入った。

『こちら戦闘員十五号。集落を焼却したまでは良いんだが、ベリアル様が逃走した魔獣の群れとヒイラギ族を追い掛けてった。このままだと見失い……』

「あの人は敵を見付けると後先考えず突っ込んでって、はぐれて迷子になるんだよ」

「ベリアル様を追い掛けろ！」

無線に向かって呼び掛けながら、アリスが珍しく慌てていた。

4

そろそろ日も暮れる頃、同僚達が数名のヒイラギ族の捕虜を連れて帰ってきた。

ベリアルの姿が見えない事から、どうやら誰も追い付けなかったようだ。
「……参ったな。キサラギ本部から呼び出しがあった際にはすぐ帰すって条件で借り受けたのに、ベリアル様に何かあったら言い訳出来ねえ」
俺の部屋にやって来たアリスは、人のベッドに寝転がると、見た目相応の子供みたいに足をばたつかせながら弱音を吐く。
一応捜索隊を出してはいるが、未だに発見の報告は無い。
ベリアルが地球から水や食料を呼び寄せてくれれば転送先の座標が分かるのだが、サバイバル能力が高いせいか、まだ無補給で活動中のようだ。
まあ、ベリアルはあれで良いところのお嬢様だ、夜になればさすがに野宿を嫌がり、簡易コテージや物資の転送を要請してくるだろう。
「ベリアル様ならそのうち平気な顔して帰って来るよ。スマホも使えない未開なこの星が悪いんだ。電波塔が無くても使える携帯をリリス様に作って

もらおう」
「……まあ、キサラギ最強の幹部が魔獣に後れは取らないか。引き続き捜索は続けるが、ベリアル様から連絡をくれる事を期待しよう。本部からの呼び出しがあったら上手く誤魔化すしかねえな」
と、アリスが愚痴を零していた、その時だった。
普段はあまり使う事のない地下牢から、切羽詰まった悲鳴が聞こえてきた――
「――フーッ！　フーッ！」
薄暗い地下牢で、興奮状態のカチワリちゃんが格子を手斧で殴りつけていた。
強烈な殺意を向けられた牢の奥には、ビクビクと身を震わせる女の姿。

「ダメだよカチワリちゃん、そいつは大事な捕虜だからね。コイツらの技術も欲しいし、処刑されちゃ困るんだよ」

勝手に地下に入り込み格子を壊そうとしていたカチワリちゃんは、止めに入った俺を見上げると肩を落としてションボリした。

斧を手にした凶悪犯が囚われた女の頭をカチ割ろうという絵面のはずだが、なんとなく罪悪感を覚えてしまう。

と、アリスがそんなカチワリちゃんに。

「長年争ってきた相手に報復したい気持ちは分かるが、それは尋問が終わってからな」

「おい、とんでもない許可を出すなよ。コイツはヒイラギ族の族長なんだろ?」

――ベリアルが集落を襲った際、ヒイラギ族の大半には逃(に)げられたものの数名ほどを捕縛(ほばく)した。

　そこで何かと謎(なぞ)の多いコイツらを尋問し、色々聞き出そうという事になったのだが……。

「自分達の最終目的は全地球人の移住だからな。今は未開拓(かいたく)地が余っているが、その内この星も移住してきた地球人で飽和(ほうわ)する。なら、適度に間引いておいたほうが……」

「アンドロイドだからってドライにも程があるだろ！　……あれっ？　俺がこの星に派遣(はけん)されたのって、地球をキサラギが支配したら戦闘(せんとう)員が仕事を失うから、リストラ対策って事じゃなかったのか？　別に人類全部を引(ひ)っ越(こ)しさせる必要は無いんじゃねえの？」

そんな俺の問い掛けに、アリスがニコリと笑みを浮(う)かべ。

そんな俺の問い掛けに、スノーがニコリと笑みを浮かべ

「そうだよ。お前ら戦闘員を路頭に迷わせるわけにはいかないからな。キサラギは仲間を大事にする秘密結社だ」

…………。

「おい、今の地球ってどうなってんだよ。なんかマズい事でも起こってんのか？　俺が帰還申請出してるのに許可下りないのって、アパートを爆破されただけじゃないだろ！」

「よし、それじゃあヒイラギ族を尋問するか。六号喜べ、相手は女族長だぞ。こういうのは大好きだろ」

「そりゃあ確かに嫌いじゃないけど、今は俺の質問に答えろよお！」

と、その時だった。

「蛮族は思考が下劣で構成されている」

そんな事を呟(つぶや)いたのは、牢の奥で囚われているヒイラギ族の族長だった。
捕虜にした際に付けていた仮面を没収(ぼっしゅう)されたその女は、猫(ねこ)科を思わせる気の強そうな目で、こちらを卑下(ひげ)するような目で見詰(みつ)めている。
この族長はベリアルによる襲撃(しゅうげき)の際、仲間を逃がすために殿(しんがり)を務め捕(つか)まったらしい。

「蛮族ってのは自分達の事を言ってんのか？　それよりお前さん、ちゃんとした言葉を喋(しゃべ)れるんじゃねえか。バイパーに通訳させようと思ったが、これなら手間が省けるな」
「ヒイラギ族はお前達蛮族より優越(ゆうえつ)な存在である。なので私は蛮族言語を話す事が出来る」

確かに言葉は通じているが、なんか翻訳サイトを通したような言い回しだ。

「……ところで、そこのカチワリ族個体も日常は蛮族言語で喋っています。体に存在している刺青も擦れば落ちる。原住民族的キャラクター作りです」

「!?」

族長の言葉に驚き、慌てて首を横に振るカチワリちゃん。

「――!　――!!」

「分かった、大丈夫だから!　刺青拭かなくても大丈夫、俺はちゃんと信じてるから!」

刺青を拭いてみろとばかりに、必死に布を押し付けてくるカチワリちゃんを宥めていると、それを見ていた族長が笑い出す。

「ウフフフ、ジョーク！　私は冗談を言いました。カチワリ族的特徴として総じて真面目である、アハハハハ！」

「――ッ！　――ッッッッ！」

　手斧で格子を殴り始めたカチワリちゃんに、族長がちょっとだけ後退りながらも、顔の横で両手をヒラヒラさせて子供のように挑発する。

「その斧で格子を壊すのはたくさんの時間が掛かります！　頑張れ！　頑張れ！　アハハハハハ、これは長期に及び我々に妨害行為を働いた事への報復挑発であり、それに対しカチワリ族個体はとても必死です！」

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

　猛りながら格子を殴るカチワリちゃんに、アリスが牢の鍵を差し出した。

「捕虜はもう何人か居るから、コイツは好きにしていいぞ」

「フーッ！　フーッ!!」

「カチフリ族個体、頭を冷却してください！　挑発行為を謝罪します！」

しかしカチワリ族と我々は長期に及ぶ敵対関係にあります、私の心を理解してください！」

　アリスから鍵を受け取り牢を開けようとするカチワリちゃんに、族長が半泣きになって弁解する。

「……おい、分かってると思うが、自分の質問に舐めた答えを返したらコイツをけしかけるからな」

「理解した」

　顔を引き攣らせる族長に、カチワリちゃんが見せ付けるように素振りを始めた。

「それじゃあそろそろお楽しみタイムといこうか。へっへっへっ、女族長さんよお。悪の組織に捕まった女捕虜はどんな目に遭わされるか知ってるか？」

「おう、思えばコイツらにはアジト街建設の度にソーラ・レイ攻撃で邪魔さ

れたからな。何をどうやったらあんな事が出来るのか、これからジックリ聞いてやろう」

牢越（ろうご）しにゲスな笑みを浮かべる俺達に族長が青い顔で身を引かせる中、カチワリちゃんが待ってましたとばかりに拍手（はくしゅ）した。

敵の頭をカチ割る蛮族なだけに、こういった血腥（ちなまぐさ）そうな事に抵抗（ていこう）はないようだ。

「自分はここの実質的な責任者、キサラギ＝アリス。で、こっちは戦闘員六号だ」

「これはどうもご丁寧（ていねい）に。私はヒイラギ族族長、ミヤビ＝ヒイラギ＝アラキルシア……」

族長が自己紹介（しょうかい）を始める中、俺はアリスに耳打ちする。

「おいアリス、俺こんな長いの覚えられない」
「確かに名前が長くて面倒だな。お前は今日から蛮族Aな」
「…………私は今日から蛮族A、理解した。キサラギ=アリスは蛮族Aに何を問う?」
　コイツらに関しては色々と聞きたい事はあるのだが……。
　と、地べたに座り格子を掴んで尋ねる蛮族Aの前に、アリスは身を屈めると。
「まずはお前らのソーラ・レイ攻撃についてだな。空に衛星らしい物も無いのに、アレは一体どこから撃ってるんだ?」
「空に浮かぶ空中要塞に座標を送り、支援砲撃を要請してます」
　……空中要塞。
「そうだよ、俺達が成層圏から降下した時は無かったはずなのに、知らない

間に城が浮かんでたんだよ。あの城どっから生えてきたの？」

「城は生えていません、最初からそこに居ました。あの要塞は法制機関ヒイラギの本拠地である。日常は光学シールドで蛮族有視界を阻害している。だからお前には見えなかった」

　俺は蛮族Ａのその言葉に、アリスと顔を見合わせる。

「『おいアリス、光学シールドなんて単語が出たぞ。マジで俺達と変わらないレベルの技術じゃないのか？』」

「『そもそもソーラ・レイって言葉の意味が通る時点でおかしいんだよ。部分的には間違いなく地球の技術を凌駕してやがる』」

　日本語で囁き合う俺達に蛮族Ａが不敵に笑う。

「法制機関ヒイラギの力は凄く凄い。彼らのスーパーパワーの前にお前達は敗北者になります。なので、ヒイラギ関係者である私を良くもてなすと楽に

なります」
　俺達のやり取りを見て、どうやら強気に出る事にしたようだ。
「なあ、ちょっと尋ねたいんだけどさ。アデリーって女幹部がデカい猫を飼ってたんだけど、ひょっとして砂の王とか森の王とかもお前らが作ったの？」
「その通りです。法制機関ヒイラギが砂の王を作りました。そして違いそう。トカゲ型機械生命体ガーディアンは法制機関ヒイラギの敵対勢力が作製しました。生もの魔獣の多くはヒイラギ製、機械魔獣の多くは敵対勢力です」
　どうやら蛮族Aは、俺達に技術をひけらかしたり解説するのが楽しくなってきたようで、ドヤ顔をしながら答え始める。
「『おい、ますます分かんなくなったぞ。生物型の巨大魔獣はヒイラギ製で、メカメカしいのはヒイラギと戦ってた組織が作った？　ヒイラギの敵対勢力

ってどこなんだよ』」
「『ほら、森の王ってメカトカゲが守ってた地下施設があっただろ？　アレが敵対勢力のアジト、もしくは研究施設だと思うんだが……』」
　話に付いてこれず暇を持て余したカチワリちゃんは、おもむろに手斧を研ぎ出した。
「もうすぐお前達悪者に天罰が下るでしょう。なぜならヒイラギは、とある王族に対魔王用隔世遺伝子を埋め込んだ。そう、通称勇者遺伝子が間もなく目覚め、魔王や魔族を根絶やします。そうなれば次の攻撃目標は……」
「その勇者とやらは行方不明だし、魔王なら転職したぞ」
「!?」
……静まり返った地下牢にシャコシャコと手斧を研ぐ音が響く中、アリス

が何事も無かったように質問を続けた。
「お前さんはウチがアジト街を築く度に壊しに来てたが、一体何がしたかったんだ？　森に縄張り意識でも持ってんのか？」
「蛮族共が分不相応な物を築き始めたら、それを破壊するのが私のお役目。それを合図に、法制機関ヒイラギが愚かな蛮族を管理するために降りてくる」
蛮族Aは何かのスイッチが入ったかのように、両手を広げて立ち上がった。
「かつてこの世界には人類が大変に繁栄していた。高度な技術で高度な生活を送り、皆が人生を謳歌中でした。だが人類は増え過ぎたのだ！　食糧問題、住居問題、婚活問題……」
「面倒な言い回しすんな、もっと分かりやすく説明しろ。見ろ、飽きた二人が勝手な事を始めたじゃねえか」

斧を研ぐカチワリちゃんの隣でナイフの手入れを始めた俺に、蛮族Aが聞いて欲しそうな視線を向ける。
「……昔は凄い技術があったおかげで人が増えた。そしたら、食糧不足に温暖化、土地不足や環境汚染、問題が色々起きて戦争が起こった。結果、ヤバい武器で大地の殆どがヤバくなって人が住めなくなった」
……ん？
「『なあアリス、この星の昔の話って、今の地球の状況になんか似てねえ？』」
「『地球も人口増え過ぎ問題で大変な事になってるからな。キサラギが世界を侵略しなかったら放っておいても戦争が勃発したよ。文明社会を築いた種族が行き着く先はどこも大体そんなもんさ』」
どこもかしこも世知辛いな、ここは未知の惑星だってのに夢がねえよ。
「敵対勢力は荒廃した大地を復活させるため、遺伝子改良を施した種子を

敵対勢力は荒廃した大地を復活させるため、遺伝子改良を施した種子を
蒔いて森を生み出し、番人を作って地下に隠れた」

「……？　荒廃した大地の復活はいいんだけどさ、今じゃ世界の大半を森が覆い尽くしてないか？　しかも普通の森ならともかく、開拓すらままならないヤベぇ森じゃん。かえって人が住める場所が減ってねぇ？」

「ミステイク。遺伝子改良を施し過ぎて、森の侵食が止まらなくなった」

おい。

「ヒイラギも荒廃した大地を復活させるため、そして侵食する森を止めるために、砂の王を作って空に隠れた」

「…………？　大地を復活させるために砂の王を作った？　アイツ、大地を緑化するどころか砂漠に変えまくってたぞ」

まあ、確かに森の王とは敵対していたみたいだが。

「ミステイク。モグラは土を耕し豊かにするという話を鵜呑みにして、開発

部が適当に作ったらああなった」
「お前らも敵対勢力とやらもろくでもないな。そういうのは悪の組織がやる事なんだぞ」
　俺に突っ込まれても悪びれる様子のない蛮族Aに、アリスが尋ねた。
「お前らの歴史は分かった。でも、分不相応な物を築くと破壊するってのは一体どういう了見なんだ。アデリーって女は、自分達こそが正義だと喚いていたぞ」
「ヒイラギの偉い人は言いました。かつての戦争や世界汚染は蛮族が不相応な技術を手にしたから起こったのだと。そこで偉い人は考えました。蛮族はアホのままにしておこうと」
「おいアリス、コイツら悪だ！　これって愚民化政策ってヤツだろ！」
　簡単に言ってしまえば、与える情報を制限して教育レベルを徐々に引き

下げ、政治に疑問を持つ知能を持たせないという、キサラギ幹部ですら悩んだ末に却下した統治法だ。

　だが蛮族Aは悪呼ばわりが癇にさわったらしく、格子を掴んで罵声を浴びせた。

「お前ら蛮族は放っておけばポコポコ増えて、資源はあるだけ消費する！　バカは偉い人に管理されなければならない、さもなくば世界が滅ぶ！」

「うるせーバーカ！　俺は嫁さんもらったら増える行為は毎日やるぞ、何が管理だふざけやがって！　俺が少子高齢化を解決してやる！」

「やはり蛮族はやはり下品で下劣です！　ヒイラギの世界管理が完了したら、やはりお前のようなバカは真っ先に殺処分だ！」

　コイツ、言いたい放題言いやがって！

「やれるもんならやってみろ！　自分がどんな状況なのか分かってねえな、

悪の組織では捕虜をエロい目に遭わせても赦されるんだぜ！」
「本当は赦されねえぞ」
突っ込んで来るアリスを尻目(しりめ)に、俺は鍵を開けて牢(ろう)へと入る。
これから行われる事を予想したのか蛮族Aが両手を突き出し(だ)後退る。
「先の発言を取り消します、お前はイケてる蛮族です。何なら謝罪の踊り(おど)りを披露(ひろう)します」
「何が謝罪の踊りだ、バカにしてんのか。へっへっへ、今さら取り繕(とつくろ)っても遅(おそ)いんだよ。さーて、この女どうしてくれようか」
下卑(げび)た笑みを浮(う)かべてにじり寄る俺に向け、アリスが興味深そうに言ってくる。
「特にこれと言う、自分は謝罪の踊りが見てみたい。[illegible]

「待て六号、自分は誤射の踊りが見てみたい。そもそもお前らは何でソーラ・レイ攻撃の前に踊るんだ？　あの踊りで攻撃目標を教えてるのか？」
そういやコイツら、攻撃する前には必ず踊っていたな。
アリスが指摘する通り、空中要塞に座標を教える行動だったり……。
「あれは今からお前ら消し飛ぶぞという、勝利と煽りの踊りです」
「ラアアアアアー！」
蛮族Aのバカな答えに、いつの間にか牢に侵入したカチワリちゃんが襲い掛かった。

5

ベリアルが帰って来ないまま二日が経った。

集落が焼けた事で住む所を失ったカチワリ族は、捕虜にしたヒイラギ族をこき使い、アジト街の傍に新たな拠点を築いている。

危うく頭をカチ割られるところだった蛮族Aは謝罪の踊りで赦しを乞い、その結果カチワリちゃんの手下にされた。

カチワリちゃんに脅されながら資材を運ぶ蛮族Aをよく見掛けるが、今のところは概ね問題も無さそうだ。

この二つの蛮族は深い因縁があるみたいだし、このまま任せておくとしよう。

後は、帰って来る気配の無いベリアルをどうやって捜すかなのだが……。

――アリスと二人で悩んでいると、なんかグランド・ドブルという国から使者が来た。

今まで聞いた事もない国からの突然の使者に、俺は首を傾げながらも応

接室へ招き入れると……。

グランド・ドブルからの使者が部屋に入るなり頭を下げた。

「我が国はキサラギと戦う意志はありません。こちらにはあなた方と国交を結ぶ用意があります。我が国で採れる鉱石は質の良い物が多く、格安でお譲(ゆず)りする事が可能です」

「……そうか。こちらとしては、水精石や工業品が現在の主な輸出品だ。ウチが買い取る鉱石は格安じゃなくても構わない。他より安ければそれでいいよ」

初対面にもかかわらず低姿勢な使者の姿に、アリスは動じる事なく応じてみせる。

一切理由を尋(たず)ねる事なく話を進めるのがコイツらしいが、ちょっとだけ

譲歩している辺り、何があったのかは察したようだ。
というか既に俺も察した、これってベリアル案件だ。

「ほ、本当ですか！　ありがとうございます、ありがとうございます！　手土産として稀少な鉱石をお持ちしましたのでお納めください！　今回の交渉につきましては陛下が大変気を揉んでおられますので、私はこれにて！　今後ともよろしくお願いします！」

「……おう、ありがとさん。気を付けて帰ってくれ」

満面の笑みを浮かべ深々と頭を下げる使者に向け、アリスも小さく頭を下げる。

使者が退席した応接室でアリスがぽつりと呟いた。

「……………ベリアル様のお手柄だな」

「本当か？　実はちょっと困ってないか？　ベリアル様を呼んだ事、少し後悔してるだろ」
　俺が軽く問い詰めると、アリスはニコリと微笑みながら。
「さすがは自分の相棒だ、悩みを共有出来て嬉しいよ。ベリアル様とは長い付き合いの六号にあの人の事を聞いてもいいか？」
「言ってごらん」
　アリスは俺の腕を掴むと笑みを浮かべて尋ねてくる。
「魔獣を追ったベリアル様はこの後何ヶ国を敵に回すと思う？　ちなみに、たった今友好関係を築いたグランド・ドブルは潜在的な敵国にカウントされた。理由は言わなくても分かるよな？　……何だよ相棒、つれないな！　この状況で逃がさねえぞ！」

「放せよ相棒、こんな事になったのもお前の秘密主義が原因だろ⁉　もっと普段から俺を信じろよ、そうすりゃこうなる前に止められたのに！」
責任の擦り付け合いを始めた俺達は、やがて不毛な時間を費やした事に息を吐く。

「使者があそこまで低姿勢になるなんて、あの人一体何やったんだろうな。俺、怖くて聞く事が出来なかったよ」

「知ってるか？　グランド・ドブルってところは、頑強な古代遺跡を改造した要塞都市が自慢の国で、どことも関わる事なく独自の道を歩んできた強国だ。そんなところが頭を下げにやって来たんだ、さぞかしとんでもない事を……」

やめろ、それ以上は聞きたくない。

「しかしグランド・トーン川は魔族領すら越えた先にある国のはずなんだが、どうやったらそんな所に迷い込むんだ？　てっきり森で彷徨ってると思ってたんだが……」
「ベリアル様は行動力が凄いからな。例えばニートが一日一ターンしか行動出来ないと仮定すると、俺達戦闘員は一日五ターン、あの人は一日百ターンぐらい行動出来る。つまり、ニート百人分は働けるって事だ」
「比較対象が悪いせいで凄いのか凄くないのか分かんねえな」
まあ何にしても、森からは抜けられたようで何よりだ。
そこら辺は同じ想いなのか、アリスは幾分ホッとした表情を浮かべながら。
「おかげで現在地は判明した。何をやらかしたのかは分からねえが、仮にも

一国が慌てて使者を送るぐらいの事をやったんだ。ベリアル様がグランド・ドブルで体を休めている今のうちに、ピンポイントで捜索隊を送り込めるな」

　そんなアリスの呟きを聞いて、俺はこれが失敗フラグになる事を確信した――

　　　【ベリアルが帰って来ないまま三日が経過】

　送るのは一瞬だけど帰るのは何日も掛かるんだぞと喚くモブ戦闘員を、無理矢理グランド・ドブルに転送したが不発に終わった。

　モブに現地で聞き込みをさせたところ、ベリアルは要塞都市に迫った巨大魔獣を要塞の一部ごと消滅させ、修理費はキサラギに請求してくれと言って去って行ったらしい。

「修理費に関しては問題ない。『要塞の一部で済んで良かったですね、ベリアル様が本気出したらこんなもんじゃ済みませんから。ところで修理費お幾らですか?』と、送り付けた戦闘員が強気に言ったら、払わなくていいと申し出てきたらしい」

「どうしてウチのヤツらは揃いも揃って喧嘩腰なんだ、もっと大人しく出来ないのかよ」

　俺が思わず愚痴を零すと、ベッドに腰掛けたアリスがなぜか、俺に何かを言いたそうな顔でジッと見てくる。

……と、俺の部屋に向けてドタドタと騒がしい足音が近付いてくると、バンとドアが開けられ、慌てた様子のモブ戦闘員が言ってきた。

「おい、北西の凍土地帯で高熱反応と震動が確認されたってよ！　これってベリアル様がやったんじゃねえのか⁉」

「嘘だろ」
　アリスが思わずといった様子で呟くも、気を取り直してモブに命じる。
「凍土地帯って、グランド・ドブルから車を飛ばして三日は掛かるぞ。体一つでどうやってそんな所に行ったんだ。……いや、これで現在地が分かった。今度こそ転送機で……」
　ベリアルの行動力に、アリスが自分を納得させるように呟いているが。
「おい六号、賭けようぜ。転送機で捜索隊を送り付けるまでの短い間に、ベリアル様が大人しくその場にいるか」
「もちろん俺は、ベリアル様がジッとしてない方に賭けるよ」
　それじゃあ賭けにならねえだろと喧嘩を始めた俺達を、アリスが何か言いたそうな顔でジッと見ていた。

【ベリアルが帰って来ないまま四日が経過】

凍土地帯に新手のモブ戦闘員を転送したが不発に終わった。
モブが現地に到着（とうちゃく）すると、黒焦（くろこ）げになった大量の魔獣の亡骸（なきがら）が残っていたらしい。
辺りを見回しても既にベリアルの姿はなく、どの方角に向かったかも分からないと、転送したモブから無線連絡（れんらく）があった。
何の手掛（てが）かりも得られないとは、これだからモブ戦闘員は……。
もういいから帰って来いと伝えると、車両を呼べるほどの悪行ポイントが無いから迎（むか）えに来てくれと面倒（めんどう）な事を言い出したので無線を切った。
そう、今は戦闘員の救助よりベリアルの捜索が優先される。
とはいえ、何の手掛かりも無い以上、こうしてアジトで待機するしかやる

事がない。
モブ戦闘員を送り出したその翌日、俺がカチワリ族の仮設拠点で蛮族Aの不思議な踊りを眺めていると……。
《戦闘員六号へ業務連絡！　ベリアル様の仕業と思われる熱源反応が観測された！　現在アジトに滞在中の戦闘員は、お前を除けば後二人だ！　早く転送しなきゃ間に合わねえのに誰も無線に出やがらねえ。どっちでもいいから連れてこい！》
救援要請が鬱陶しいので、今はアジト街の戦闘員全員が無線を切っている。
おかげで無線が誰にも繋がらないため、こうして緊急アナウンスを使ったのだろう。
ちょっと切れ気味のアリスの声がアジト街へと響き渡った――

【ベリアルが帰って来ないまま五日が経過】

俺の悪行ポイントが少ないのは知ってるだろと、泣いて嫌（いや）がるモブを捕獲（ほかく）し転送したが不発に終わった。

モブが現場に着いた時には、巨大（きょだい）なクレーターを見下ろし震（ふる）え上がっているリザードマンが居たらしい。

モブの聞き込みによると、赤髪（がみ）の女が荒神（あらがみ）に喧嘩を売りこんな事になったのだとか。

何でもクレーターからちょっと離（はな）れた所にリザードマンの集落があるそうで、荒神とやらは彼らに年に一度の生贄（いけにえ）を要求していたのだそうだ。

ゲームとかでよくあるヤツだが、それに興味を示したベリアルがリザードマンに案内を頼（たの）み、その後荒神に遭遇（そうぐう）。

ベリアルを見るなり、『今年の生贄は活きが良さそうだな』といきり立つ荒神に対し、『今日からあたしが荒神やるから、お前今から生贄役な』と言って荒神を葬った後、どこへともなく立ち去って行ったそうだ。

一部始終を見届けたリザードマン達は、ベリアルを荒神と呼び崇めており……という報告の辺りで、もう聞かなくていいかなと思い無線を切った。

リザードマンに恩を売れたので良かったが、いい加減ベリアルを捕まえたい。

それもこれも、モブが散々逃げ回ったおかげで熱源観測から時間が経ち過ぎたせいだ。

――だが今回は大丈夫。

「おいアリス、なんで次に送られるのが俺なんだよ！　そこに六号も居るんだから、せめてジャンケンで決めさせろよ！」

「うるせー！　俺は最後の切り札みたいなものなんだからお使い任務に就

くわけねーだろ！　それに、お前らを転送する度になんか悪行ポイントが増えるんだよ。主力の俺がポイント貯めておかなくてどうすんだ」

俺はワイヤーで拘束されたモブ戦闘員の肩を、分かるなとばかりにポンと叩く。

「ふざけんな、あちこちに送られた戦闘員がまだ誰も帰ってないんだぞ！　送るなら最低限の装備ぐらいよこせ！　おいコラ、押すな！」

喚くモブを転送機に押し込みながら、俺はふと気が付いた。

「なあアリス、ベリアル様の反応を感知してから送ったんじゃ遅いと思うんだ。ここは次の爆発ポイントを予測して、先行して送っちまおう」

「お前さんにしては賢いな。いい案だ、それでいこう」

「いくんじゃねえよ！　六号はともかく、アリスはもっとよく考えろ！」

よく分からない事を言い出したモブを尻目に、俺とアリスは地図を広げ

て次の爆発ポイントを予測する。
アリスが真剣に何かを考える中、俺は鉛筆を地図上に置いてそれを倒した。
「俺の予想はここだ。最古参戦闘員の勘だ、多分きっと間違いない」
「自分はこっちの自治都市周辺だと思うんだが、戦闘員の勘ならそっちを選ぶか」
「バカ野郎、鉛筆倒しで行き先決めんな！　自治都市！　自治都市でお願いします！」
贅沢を言うモブに最低限の装備としてカロリーゼットと水を持たせる。
「俺なんてサイコロの出た目でこの星への派遣戦闘員に選ばれたんだぞ！
ワガママ言ってないで行ってこい！」
「おい待て、せめて俺を縛ってるワイヤーを一

モブに最後まで言わせる事なく、転送機のボタンを押して悪行ポイント加算のアナウンスを聞いていると、熱源を探知する観測モニターに光が灯った。

その光は自治都市周辺に灯っており、つまりそれが意味するのは……。

「戦闘員の勘だってたまには外れる事もあるさ。ドンマイ、次は上手くやろう」

「おいアリス。お前、適当に送り出すのがちょっと楽しくなってきてないか」

【ベリアルが帰って来ないまま六日が経過】

「昨日適当に送り出した戦闘員が自力で自治都市に着いたそうだ。せっかくだし、ベリアル様の事を説明しつつ国交を結ばせる交渉をさせているし

くだし、ハーフノ様の事を説明して、国家を納得させる交渉をこなせている」
「なら、結果的に大戦果だな。アイツもちゃんと働いてるじゃないか」
転送機が置かれた部屋で、俺とアリスは頷（うなず）き合うと。
「というわけで、とうとう転送する戦闘員が尽（つ）きたわけだが……」
「大丈夫だ、戦闘員より弱いお前さん達はちゃんとセットで送るからな」
そんな俺達の視線の先では、ワイヤーで縛られたスノウとハイネが転がされていた。
「お前達は何を言っている！　待て、アジト街から戦闘員の姿が消えたのは……」
「待ちなよ、あたい達二人で知らない土地に送られたら、生きて帰れるわけがないだろ！」
縛られたままギャンギャン喚く二人だが、コイツらにはちゃんと物資も用意してある。

意して　あそ

「水と食べ物、テントに無線。地図とマッチにコンパス……と。他に忘れ物は無いかな？」

「これだけあれば十分だ。与え過ぎてもサバイバル訓練にならねえからな」

……サバイバル訓練？

「待て、訓練とは何の話だ！　私はグレイス王国一の騎士だ、そんな物は必要ないぞ！」

「あたいだって元は魔王軍の幹部だよ！　こんな事に何の意味があるのさ！」

食って掛かる二人に向けて、アリスがやれやれと首を振る。

「ここ最近は皆平和ボケしていたからな。魔獣なんかに後れを取った戦闘員に、この星がいかに人類にとって過酷なのかを思い出させてやるんだよ」

「それなら私は無関係だろう！　私は騎士だが、どちらかと言えば頭脳系

だ！」
「そ、それならあたいも頭脳系……う、うう……」
「お前ら二人の脳みそは俺とあんまり変わらないだろ」
　この二人はともかくとして、アリスはただ転送を楽しんでいたわけじゃなかったのか。
　確かに過酷なこの星はサバイバル訓練には持ってこいだし、さすが本物の頭脳系……、
「よし、お前らの転送先はドラゴンが生息すると言われるミドガルズ山脈にするとしよう。ドラゴンと言えば火属性。炎使いのハイネは仲間が多くて嬉しいだろ」
「待て、ミドガルズ山脈は距離が離れ過ぎている！　訓練では済まないだろう！」

属性が同じでも、ドラゴンに仲間意識なんて持ってないぞ！　ちょっ、待……」

……と、俺が感心している間にアリスが転送ボタンを押していた。

「とは言っても、ミドガルズ山脈に住むドラゴンは上位種しかいないらしい。そういったヤツは賢いから、わざわざ人を襲わないそうだし大丈夫だろう。そろそろ最初に送り出した戦闘員が帰って来る頃だ、今度はどこに送ろうか」

「お前、やっぱ今の状況楽しんでるだろ」

【そして……】

ここしばらく従属を申し出てくる国や都市が止まらなかったのだが、昨日は珍しくベリアルの反応が無かった。

その代わりに今日は、グレイスから使者が来た。

その代わりに今日は、グルネイトから使者が来た

そう、二足歩行する猫（ねこ）型魔獣に国宝の魔導石（まどうせき）を奪（うば）われた、あのグルネイドだ。

「トラ男さんと俺達の関係がバレたのかな？　これって戦争になるヤツか」

「いや、疑ってはいるかもしれんが、決定的な証拠（しょうこ）は無いはずだ。それならまだやりようはある。ほら、法制機関ヒイラギが猫型魔獣を飼ってると教えてやったろ？　それで、詳（くわ）しい話を聞きに来ただけの可能性もある」

まずは相手の出方を見て、逆ギレするか素直に謝る。

俺とアリスはそんな打ち合わせをして、使者を応接室へ招き入れると――

幕間②　――彼と出会った最初の記憶――

「もう一度聞こうか。その男が何て言ったって？」
ぼうっとする頭で、こちらを覗(のぞ)き込むリリスに答えを返す。
アルバイトとして入ってきたその新入りの男の子は、初対面で私に『ゆかりさんおっぱい凄(すご)いですね、何食ったらそうなるんですか？』と……。
「これはいきなりマイナス点」
少女はそう言いながら手帳に何かを書き付ける。
「ええと、それから？　その男の子は他に何か言っていたかい？」
その言葉に従って記憶(きおく)を少しだけ進めると……。
確か……『俺、おっぱい星から来たおっぱい星人の王子なんですけど、定期的に頭におっぱい乗せないと死ぬんです。なので助けてもらっていいですか？』……。

か？』と……
「うーん、これは大量マイナス点」
……そうだった、何かと大きいこの胸は、子供の頃からのコンプレックスだった。
　昔から同学年の男子に体の事でからかわれ、色々と意地悪された。
　その事を新入りの男の子に話した時は、『気になる子に意地悪したがるクソガキ特有のヤツですよ。つまりそいつはゆかりさんの事が好きだったんです』なんて、あり得ない事を言われて慰められたものだけど……。
「これ以上アイツの悪行を聞いてると減給処分を下さなきゃならなくなる。でも、キミの記憶を呼び戻す際に、一番反応が良いのもアイツの話なんだよなあ……」
…………そうだった、何かと大きいこの体も、子供の頃からのコンプレックスだった。

それで、出来るだけ小さく見えるようにと、いつも背中を丸めていて……。

「質問を続けるよ。その男の子に言われた事で、一番記憶にある言葉はなんだい？」

……一番記憶にある言葉。

あの男の子は、いつも猫背（ねこぜ）な私に明るい顔で言ったのだ。

私の背中をバンと叩いて無理矢理背筋を伸（の）ばさせると、私を見上げて言ったのだ。

『ゆかりさんはもっと胸を張るべきだと思います。じゃないと勿体（もったい）ないですよ？』と。

——そして、続けてこう言ったのだ。

「せっかく良い物持ってるんだから、もっと胸張って爆乳アピールしていきましょう。そうすればヒーローなんてイチコロですよ……」

「はいギルティ――――!」

三章　VSトラ男！

1

　グルネイドからの使者を帰らせた、その翌日。
「嫌(いや)ですす嫌ですす嫌ですよー！　ドラゴン戦での怪我(けが)が治ったばかりなのに、あたしグルネイドなんて絶対行きませんからね！」
　アジト内の会議室で、病み上がりのキメラ二人に行き先を教えたらこうなった。
「おい見習い戦闘員、キサラギでは上司の命令は絶対だ！　駄々(だだ)こねたって

逃がさねえぞ、もういい加減諦めろ！」
「そんなの嘘です！　だって隊長、いつもバイパーさんの言う事をちっとも聞いてないじゃないですか！」
　いつになく激しい抵抗を見せるロゼだが、残念な事に今は人手が足りないのだ。
「俺は悪の組織に染まった男だから命令違反したって良いんだよ。それにバイパーちゃんは上司ってイメージが湧かないし」
「じゃ、じゃあ、あたしも悪に染まった女です！　昨日なんて、カチワリさんのおやつを強奪してやりましたから！」
　昨日コイツはカチワリちゃんに追い掛けられていたのだが、そんな事しやがったのか。

と、そんな俺達のやり取りに警戒を露わにしたラッセルが。
「ねえ、せめてボク達二人が怪我してる間、何があったのかを教えてくれない？」
「そうですよ！　グルネイドってあれですよね、トラ男さんがやらかした国ですよね！　そんな所から使者が来て、これからそこに向かうって事は……！」
　何かを勘違いしているロゼに、アリスがふっと笑い掛けた。
「それが、昨日グルネイドの使者が来てな。ウチが魔王軍を撃破した事を知って、戦闘員の派遣を頼んできたんだ」
　現在俺達は周辺国に、グレイス王国に雇われた傭兵集団みたいに思われている。
　戦闘員の派遣業は俺達にとっても望むところだし、二つ返事で引き受け

たのだ。
「……グルネイドってちゃんとした軍隊も持っている国なんですよね？　それが、何でわざわざウチにそんな事頼むんですか？」
ここのところ小学生低学年レベルの教育を施されたおかげか、ロゼが余計な知恵を付け始めた気がする。
ロゼを安心させるためか、アンドロイドのクセにアリスがにこやかな笑みを浮かべ。
「実は、グルネイドの国宝を奪った猫型魔獣が森に逃げ込んだらしいんだが、こいつが森での戦闘に滅法強くてな。そこで、森の開拓に成功したウチに協力を求めに来たのさ」
「……なるほど、トラ男さんが奪った魔導石を私達が取り返してきたように見せかけて、依頼料をせしめるって事ですね？　前々から思ってたんですが、隊長達ってマッチポンプが好きですよね」

た、隊長達って、[illegible]大好きです、それ」
突っ込みを入れてくるロゼに向け、俺は悲しみに満ちた顔で訴える。
「ロゼ……。お前、出会った頃はもっと真っ直ぐで仲間想いで、小さな体のクセに勇敢なヤツだったのに変わっちまったな。そりゃあ俺達だって、魔導石強奪犯はトラ男さんだって思ったさ。でも、まだあの人の犯行だって決まったわけじゃないんだ。可能性は低くても、俺とアリスは仲間を信じるよ」
「さすがだ六号、よく言った。そうだ、キサラギは悪の組織だが仲間だけは大事にするんだ。自分達だけでも信じてやらなくてどうするんだ」
「あまり頭の良くないあたしですが、さすがにそんな小芝居には騙されませんよ？　ていうか、トラ男さんを説得して魔導石を返して貰えば済む話じゃないですか。なら、別に私達が行く必要無くないですか？」
疑いの目を向けてくるロゼの言葉にもう開き直る事にした。
「そうだよ、トラ男さんから魔導石を貰って、グルネイドに恩に着せるつもり

だよ。こんな美味しい依頼が他にあるか。国からの依頼なだけあって報酬がスゲえんだぞ」
「おう、お前らを連れて行くのは、トラ男が魔導石を返したくないってごねた時の生贄要員だ。あいつはロリっ子に弱いからな」
　アッサリ認めた俺達に、ロゼとラッセルが食って掛かる。
「生贄要員って何ですか、あたし一体何させられるんですか！」
「そんな理由なら行かないよ！　ロリっ子が必要ならアリス一人で十分じゃないか！」
　トラ男はあれで面倒臭いのだ。
　アリスに好意的ではあるものの、生身のロリではないので無条件で言う事を聞くわけではない。
「アリス、もうコイツらは取り押さえて送っちまおう。鋼鉄ワイヤーを取り寄

せてくれ」
「そうだな、そっちの方が早そうだ。自分はバイパーを呼んでくるから、それまでに二人を縛り上げといてくれ」
　ワイヤーを取り寄せたアリスが出て行くと、残されたキメラ二人がいきり立つ。
「力ずくなんて最低ですよ！　な、何ですか、やるんですか⁉　こっちは二人居るんですから、隊長には負けませんよ！」
「戦闘キメラも舐められたもんだね。真正面から遣り合って人間ごときが勝てるとでも？」
　俺はワイヤーを手にしながら、対キメラ用アイテムを目の前にポンと放り投げた。
「ロゼが前から食べたがってた地球産の高級おやつだ。ちなみに一人分しか

無いからな」
「とうっ！」
目の色を変えたロゼが、俺が投げたチューブ状のおやつに飛び付く。
「ちょっと同族何やってるの！　そんなのは後にして、今はコイツを倒そうよ！」
「ロゼ、そいつは今俺が言った通り一人分しか無い。ラッセルと共闘して俺に勝っても、その後はおやつの取り合いになる。この意味がお前に分かるか？」
おやつをしっかりと握り締めたロゼは、ラッセルに警戒の視線を向けた。
「ど、同族？　ボクはおやつなんて要らないし警戒する必要無いからね？」
ラッセルは困惑しながらロゼの説得を試みるも、俺は被せるように追撃した。
「なあロゼ、俺と激戦を繰り広げて消耗した後、一人分しかないおやつを盗

られない保証がどこにある？　そう、ラッセルが言う通り、ソイツはお前の同族なんだぞ？　同じキメラ仲間として、おやつなんて要らないって言葉を信用出来るか？」

　ロゼはハッとした表情を浮かべながらラッセルから距離を取る。
「信用……出来ません……。戦闘キメラがこの星では手に入らない高級おやつを諦めるだなんて、そんな事あり得ないと思います……」
「あり得るよ！　ていうかキミ、前から思ってたけど戦闘キメラの評判を落とさないでくれる!?　ボクはキミみたいに食い意地張ってないからね！」
　警戒を露わにしたロゼにラッセルは必死に訴え掛ける。
　ワイヤーを片手に構え、俺はラッセルの背後に回り込むと。
「ちなみに、その高級おやつ『テュール』は人用のおやつじゃないから俺は食べない。つまり俺と共闘してラッセルを倒したら、確実にテュールは残る。さあ

選べ！　元魔王軍幹部の女装キメラか、長い間一緒に戦ってきた仲間の俺か！」

「キサラギは悪の組織ですが、仲間だけは大事にするんですよね？　どちらを選ぶかなんて決まってます。あたしは秘密結社キサラギの見習い社員、戦闘キメラのロゼですから！」

「お前絶対同族じゃないだろ！　キメラはこんなにバカじゃない！」

半泣きで叫ぶラッセルに、俺達は同時に襲い掛かった――！

――俺が転送機の前で待ってると、アリスとバイパーがやって来た。

「おう六号、ご苦労さん。既に準備は出来てるみたいだな」

「こっちはいつでもＯＫだ。それじゃあバイパーちゃん、アジト街の防衛と転送機の操作をよろしくねー

転送機のポッドの中では、猿ぐつわを噛まされワイヤーで縛られたキメラ二人が何かを訴え掛けるように呻いている。
本来であればバイパーも連れて行きたいとこなのだが、現在アジト街は深刻な戦闘員不足に陥っているため、いざという時の備えが必要なのだ。
悪行ポイントが稼げるからと、あいつらをポンポン送るべきじゃなかったか。
と、アリスから転送機の操作を教わっていたバイパーが、改めて俺達に向き直る。
「六号さん。グルネイドでは現在、急な国王の崩御により王位争奪戦が起きています。どうか、巻き込まれないようお気を付けを……」
不安気なバイパーが、そんなフラグになりそうな事を言ってくるが……。
「大丈夫だよバイパーちゃん、ぶっちゃけこれは出来レースだから。そういう

のは全部スルーして、早めに仕事終わらせて国を出るよ。だから安心してお土産（みやげ）期待して待っててね」
「ああ、自分が目を光らせておくから問題ない。アジト街の留守は任せたぞ」
　俺とアリスはそう言って、未だ不安そうなバイパーに見守られながら。
「むーむ！　むーっ！」
「ふぁいふぁー！　ふぁいふぁー、たふへへえ！」
　グルネイドへ向かうべく、転送ポッドへと踏（ふ）み込んだ――！

2

「おいアリス、アレってドラゴンの子供か？　この国の連中は物騒（ぶっそう）なの飼って

るな」
「翼も無いし、ドラゴンってよりトカゲだな。グルネイドはドラゴン信仰が盛んだそうだから、似た生き物も崇めてるんだろ」
　グルネイドに転送された俺達は、拠点となる宿を取ってロゼとラッセルを部屋に放り込むと、この国を偵察するため街に繰り出していた。
　街中ではコモドドラゴンみたいなトカゲが闊歩しており、果物屋の店主が寄ってきたトカゲに売り物を投げ与えている。
　山脈の麓にある国だけあって水資源に余裕があるのか、荒野に佇むグレイス王国より随分と栄えていた。
　街から見えるミドガルズ山脈には木が生えている様子が無いが、伐採し尽くしてしまったのだろうか。

建築物や服装なんかはグレイス王国やトリスとあまり変わりはない。
行き交う人々を観察しながら、アリスが日本語で話し掛けてくる。
『グレイス王国より人が多いな。戦争をしていないおかげで男も多い。街も巨大な城壁で覆われているし、この国を侵略するのは大変そうだ』
『だから魔王軍もグレイス王国を狙ったのか。まあ、あっちの方が距離的にも近いしな』
日本語でやり取りする俺達を住人達が気にも留めない事から、他国の商人との交易も盛んに行われているのだろう。
あちこちの商店を覗いていたアリスは、小さく首を傾げると。
『この国は山が近いのに鉱物を扱っている店が少ないな。山脈には何らかの資源が眠っているもんだが、もう掘り尽くしちまったのか？　でなきゃこん

な所に街を作ろうなんて考えないだろうに』
『この国にも、何かのアーティファクトがあるんじゃないか？　グレイス王国も、雨を降らせるアーティファクトを動かせないからあそこに街が出来たらしいぞ』
　この星の国々は古代遺跡(いせき)やアーティファクトの近くに作られる傾向(けいこう)がある。
　なので、グルネイドにもそういった物があってもおかしくない。
『アーティファクトには興味があるな。魔導石(まどうせき)とやらも色々と調べてるんだが、分かんねえ事が多過ぎる。仕事が早く終わったら色々と調査したいな』
『フラグを立てるわけじゃないけど今回の仕事は楽勝だ。行方(ゆくえ)不明のベリアル様の事もあるし、チョロい仕事を終わらせようぜ――！』

——依頼主の話を聞き終えた俺は、もう一度尋ね返した。
「すんません、もう一度言ってもらっていいですか？」
ここはグルネイド城内の応接室。
偵察という名の観光を終えた俺達は、チョロい仕事を済ませるべく王城に来たのだが。
「依頼内容は、森に潜伏している猫型魔獣から国宝を奪還する事です。魔獣の生死は問いませんが、これを討伐出来れば別途報酬を支払います」
そう言って俺に再び説明するのは、執事風の中年男性だった。
その隣でこちらを値踏みするように見ている二十代前半のお姉さんは、この国の第一王女、クリストファー・リディア・グルネイドさん。
長い金髪と気の強そうな碧眼を持つ、いかにも施政者といった感じの人だ。

うん、別にここまではいい。

猫型魔獣の生死は問わずというのも、トラ男と戦う気は無いのだから都合がいい。

俺達が問題にしているのは……。

「国宝を奪い、幼い第二王女を攫った猫型魔獣は森に入った者を襲撃し続けております。我が国の騎士は森林戦には慣れておらず、恥を忍んでキサラギの皆様に依頼したのです」

トラ男が越えてはいけない一線をぶっちぎった瞬間である。

あの人とうとうやりやがった。

普通は冤罪を疑うところだが、『幼い』第二王女という時点で一切の擁護が出来ない。

が出来ない
　と、動揺を隠し切れない俺の隣で、完璧な営業スマイルを浮かべてアリスが言った。
「分かりました、お引き受け致しましょう。その猫型魔獣は何があっても駆除します」
「えっ？　いえ、猫型魔獣はあくまでついでで……お、お願い致します」
　そうだな、子供に手を出す輩はキサラギでは死刑だからな。
　完全にやる気のアリスの言葉に執事が気圧され頷くと、それまでこちらを観察していた王女が口を開いた。
「そちらの方はどうやら納得がいかないみたいね」
「……。……？　……えっ、俺の事？」

急に話を振られて戸惑う俺に、微笑を湛えながら冷たい視線を向ける王女様は。
「誤魔化さなくても貴方の言いたい事は分かっているわ。攫われた第二王女の奪還に触れていないのが気になるのね？」
俺の仲間がガチの性犯罪者になった事で動揺していただけなんですが。
……と、俺が言葉を選んでいると王女は自嘲気味な笑みを浮かべる。
「今、この国に何が起きているのかは知っているでしょう？　父上が急に身罷られた事で、第一王女の私の派閥と、第一王子である弟の派閥で王位を巡り争っている事を」
すいません、知らないです。
無言でいる事を肯定と受け取ったのか、王女様は酷薄な微笑を浮かべ言い放つ。

「国宝の管理を任されていたのは私なの。この国は、かの魔導石が無ければ立ち行かないわ。継承順位第一位の長女が国宝を奪われる失態を犯し、対抗馬の弟がそれを取り返したなら、王座は誰の物になるのかしらね？　つまり……この事件の黒幕は弟よ」

　すいません、多分違うと思います。

「甘いところがある弟にしては良く考えたものだと思うわ。私を追い落とした上で国宝を取り戻したと喧伝すれば、王位を得られるのは間違いないわね。妹を攫ったのも、第三位の継承権を持っているから念には念を入れたのよ。あの子は妹を傷付けるような真似はしないと思っていたのに……」

　妹さんは傷一つなく大事に保護されていると思います。

「そもそも魔導石なんて食べられもしない物を、しかも厳重に警備されている場所に潜り込んでまで魔獣が奪いに来る理由が無いわ。それに、もっと食

べ応えのある人間がいたはずなのに、なぜ幼い妹を攫ったのかしら？　弟が魔獣をけしかけたのでなければ、事件の説明が付かないのよ」

　すいません、俺達なら全部説明出来ます。

「とはいえ、弟がどうやって魔獣を手懐けたのかその方法が分からなかった。これでは糾弾すら出来ないわ。……でも、そこにこんな物が送られてきたの」

　王女が目配せすると、執事が胸元から手紙を取り出し、テーブルの上にスッと置いた。

「これはグレイス王国から送られてきた手紙です。トリス王国を乗っ取った法制機関ヒイラギを名乗る者達が、グレイス王国に対し猫型魔獣をけしかけたと書かれております」

いたと言われています」

「ええ、あの時は大変でした。アイツら突然グレイス王国にやって来て、街で問題起こして回ったんですよ」

「おう、しかもバイパーってウチの幹部が連中に大怪我負わされたからな」

俺とアリスの相槌に、王女はやはりと言うように顔色を悪くすると。

「実は今、その法制機関ヒイラギという組織の人間が、この国に来ているのよ――」

3

――グルネイド城の会議室の前に立った俺とアリスは、ドアを蹴破り押し入った。

「オラッ、アデリー出て来い！　てめーこんな所で何やってんだ！」

「ブッ!?」
会議室に乗り込むと、お茶を飲んでいたらしいアデリーが口の中の物を噴き出した。
部屋の中では、アデリーと何かを相談していた銀髪の青年が驚き固まっており、突然の乱入者に警護の騎士が剣の柄に手を掛けていた。
「ロクゴー!?　あ、貴方がどうしてここに居るの!?」
口元のお茶をハンカチで拭いながらアデリーが立ち上がる。
「俺達は戦闘員なんだから、そりゃあもちろん決まってるだろ。猫型魔獣に奪われた国宝を取り返すため、戦闘員の派遣依頼を請けたんだよ」
「お前さんこそ、こんな所で何してるんだ。トリスに続いてこの国も乗っ取るつもりか？　王女様から聞いたが、色々と黒い噂が流れているな」

いきなり現れ難癖を付け始めた俺達に、アデリーが慌てて言ってきた。
「ち、違うわ！　猫型魔獣が魔導石を強奪した事件がなぜかウチのせいにされそうだったから、無実を証明するためにここに来たの！」
「そ、そうだ！　我々が使者を送った事でグルネイドの窮状を知ったアーデルハイト殿は、わざわざ国宝奪還のために駆け付けてくれたのだ！　姉のリディアは、なぜか私が黒幕だと疑っているが断じてそんな事はしていない！」
アデリーの釈明に追従するのは先ほど何かを相談していた様子の青年だ。
おそらくはこの人がリディアの弟なのだろう。
「でも王子様、そいつグレイス王国で散々悪事を働きましたよ。正義の味方を名乗って他人の国で勝手に取り締まりを始めたり。そいつが猫型魔獣を逃がしたせいで、ウチの善良な女上司が大怪我負ったり―

返したせいで「その善良な女」言った大怪我負った」
「おう、それにこの国の第二王女が攫われたそうだが、この女は年端もいかない少年を連れ去ろうとした前科があるぞ」
　俺達の言い掛かりに王子が不安気な顔でアデリーを見上げ、
「……ア、アーデルハイト殿？」
「ちちちち、違……！　違わないけど違うんです！　彼らの言ってる事は本当ですが、それらの件については深い事情が！」
　コイツが無実である事は誰よりも俺達が知っているが。
「おう、何かとやらかしが多いアデリーさんよぉ！　王子様の派閥とやたら仲がいいみたいだが、それって内政干渉って言うんだぞ！」
「気を付けろよ王子さん、コイツらはトリス王国を乗っ取った前科がある。お前さんを王座に就けたら、助けた事を恩に着せて何要求されるか分からねえぞ」

れ[illegible]」

「…………………」

「待ってくださいマディア王子、お願い黙(だま)り込まないで！　そもそも我が機関に猫型魔獣について使者を送ったのは貴方じゃないですか！　私達は使者が来るまで、そんな騒(さわ)ぎがあった事も知らなかったんですよ!?　嘘(うそ)発見水晶(すいしょう)を使ってくれても構いませんから！」

アデリーの説得にマディアと呼ばれた王子が我に返った。

「そ、そうであった。確かにアーデルハイト殿と面会した使者の話では、まさに寝耳(ねみみ)に水(みず)といった反応だったと……」

「口では何とでも言えるからな。嘘発見器(はっけんき)の精度なんて高が知れているし、誤魔化しようは幾(いく)らでもあるもんさ」

混ぜっ返すアリスに向けて、アデリーが何かを取り出しテーブルに載(の)せた。

「法制機関ヒイラギの水晶シリーズ第二弾、真実判別水晶よ！」
アデリーが取り出した水晶玉を、俺は指で突いて転がすと。
「俺、こういうの知ってる。嘘を吐くとチンチン鳴る魔道具みたいなのを何かで見たぞ」
「説明するから話を聞いて！　これはカルマ測定水晶と原理は同じよ。その言葉が真実でなければ水晶玉は黒く濁るわ。まずは私が試してみるから、貴方達は嘘を言ってみて！」
王子に信じて貰うためなのか、いつになく必死なアデリーが水晶玉に手を置いて。
「信じてくださいマディア王子、私達は国宝を奪った魔獣とは何の関わりも

ありません。そして私は、本当に無実である事を証明するためこの国に来たのです！」

　アデリーが王子様を真っ直ぐ見据え堂々と宣言すると、水晶玉が白く輝いた。

「アーデルハイト殿……。もう十分だ、私は貴方を信用しよう。ええと、忠告に来てくれたキミ達には申し訳ないのだが」

　王子様が言い終わる前に俺とアリスは水晶玉に手を置くと、

「実は俺、遠い星からこの世界を侵略にやって来た改造人間なんだ」

「自分は人の手で造られたゴーレムみたいな存在で、そもそも人間ですらない。深刻なダメージを受けると自爆して、辺り一面を焦土と化すから気を付けろ」

突拍子も無いその言葉に、だが水晶玉は輝きを放ち続けて。
「……あ、あなた達……まさかそれは、嘘ではなくて……」
　それを見たアデリーと王子がゴクリと唾を飲み込む中、
「人類の命運を賭けた重要任務のはずなのに、超安月給でこき使われながら平社員やってます。そんな俺の得意技は、鼻に詰めたピーナッツを狙った所に飛ばす事な」
「自分の特技は八十兆桁の円周率を一分以内に算出する事だ。この星を侵略に来たメンバーには、お姫様の部屋でうんこしようとしたり、スパイとして送り出せば敵地司令官の風呂に勝手に入って寛いだりするヤツが居て……」
「アーデルハイト殿、この水晶は壊れてますよ」
「ち、違うんです、多分彼らが本当の事を……そんな訳ないですよね、すいません！」

ません」

水晶玉の性能に疑いが持たれた事で、アデリーが泣きそうな顔で訴(うった)えた。

王子から不審(ふしん)の目を向けられたアデリーは、俺達に縋(すが)るような目を向けてくる。

そんな姿にほだされたのか、アリスが仕方なさそうに口を開いた。

「おいアデリー、自分の国には正義は勝つという言葉がある。お前さんは常々正義正義と喚(わめ)いているが、本当に正義の味方なら自分達に勝ってみせろ。猫(ねこ)型魔(ま)獣(じゅう)から国宝を奪還(だっかん)した方が勝者であり正義って事だ。分かりやすくていいだろう？」

「……なるほど、正義の名を賭けて勝負するって事ね。いいわ、凄(すご)くいい！」

少年漫画(まんが)に良くある勝負事だが、どうもアデリーの琴線(きんせん)に触れたらし

い。
「そして貴方達が勝負に勝った場合の条件とかがあるんでしょう？　私が簡単に呑めないような、いやらしい要求をしてみたり……！」
　と、自らの身を抱き締め後退るアデリーに。
「それじゃあ……自分達が勝った暁には、お前さんを悪と認定し処刑でいいか？」
「良いわけないでしょう!?　もうちょっと手加減しなさいよ！」
　主人公に無茶な勝負を吹っ掛ける、悪役キャラみたいなセリフをアリスが吐いた——

4

宿に帰った俺達は、未だ縛られたまま転がされているキメラ二人に経緯を説明。

「——というわけで事情が変わった。討伐対象は元秘密結社キサラギ幹部、ロリコン怪人トラ男だ。手段は問わない、必ずコイツを抹殺しろ」

「アリスさんすいません、何を言ってるのか分かりません」

「えっと……アイツ、本当にそんな大それた事したの？　何か事情があるんじゃないの？」

説明を聞いたキメラ二人は困惑の表情を浮かべるが。

「キサラギでは子供に手を出した時点で処刑だからな。お前らはトラ男に懐いているみたいだが、アイツがどういうヤツかは分かってるだろ？」

「俺はトラ男さんならいつかやると思ってた。こないだキサラギの顧問弁護

士に、他の惑星内で行われた犯罪に地球の法は適用されるのかを真剣に相談していたからな」

そんな俺達の説得に、トラ男の魔の手（まて）により、すっかり餌付（えづ）けが済んだ二人が言った。

「キミ達はトラ男の仲間じゃなかったの？　もうちょっと信じてあげなよ。話し合いじゃ解決出来ないの？」

「そうですよ、あれでトラ男さんは子供に対しては紳士（しんし）ですよ？　それにあたし達じゃ、トラ男さんと戦ってもまるで相手になりません。ラッセルさんの言う通り、まずは話を聞きましょうよ」

相手は怪人最強と呼ばれるトラ男、この二人の協力がなければ俺達だけでは分が悪い。

俺とアリスはアイコンタクトを交わし頷（うなず）き合うと……。

「お前らがそこまで言うなら仕方がねえな。トラ男にも何らかの事情があっ

たと考慮して、まずは話をする方向で行くか」
「まったく、お前らのワガママを聞くのも今回だけだぞ？」
　やれやれと肩を竦める俺達に、ロゼとラッセルが笑顔を見せた――

『――潜伏中の性犯罪者、怪人トラ男に告ぐ！　大人しく出て来ればアレな注射で苦しまずに処刑してやる！　出てこないなら、制裁部隊に引き渡した上で処刑してやる！』
　グルネイド近くに広がる森に向け、アリスが拡声器を使い日本語で呼び掛ける事一時間。
　耳の良いトラ男なら聞こえているはずなのだが……。
「おいアリス、ちっとも出て来る気配が無いぞ。そろそろプランBに移行しよう」

「そうだな、トラ男は話し合いに応じるつもりはなさそうだ。もうやれるだけの事はやった、ロゼとラッセルとの約束はこれで十分果たしただろう」
「お二人はひょっとして、今のを話し合いって言い張るつもりなんですか？」
　俺達の説得に応じない以上、ここからは強硬手段だ。
「というわけでラッセルには、これからしっかり働いて貰うぞ」
「ふむー！　んーっ！　んー！」
　先ほどからずっと縛られたままのラッセルが、猿ぐつわ越しに何かを喚くが。
「トラ男さんの弱点はロリだからな。まずは話をするっていうお前らの頼みは受け入れたんだ。今度は俺達の頼みを聞いてもらうぞ」
「大丈夫だ安心しろ、アイツならきっと来る。プランBなら間違いない」
「ふぁんなのは、はなしあいりゃないよ！」

ラッセルが何かを訴え首を振る中、アリスが再び拡声器へと呼び掛けた。
『潜伏中のトラ男に告ぐ！　我々は現在ロリキメラを確保している！　このまま出て来ないのならラッセルは、お触り自由のメイド喫茶で働かされる事になるぞ！』
《悪行ポイントが加算されます》
　アリスの横で悪行ポイント加算のアナウンスにホクホクしてると、ロゼが軽く引き気味の表情で言ってくる。
「アリスさんが何を言っているのか分かりませんが、多分ろくでもない事なんでしょうね」
「さっき、ラッセルにはこれからしっかり働いて貰うって言っただろ？　ラッセルを喫茶店で働かせるだけだよ。トラ男さんは、怪人クマ女さん並に獲物への執着が凄いから……」
　と、その時だった。

俺達の足下目掛け、突然何かが投げ込まれ――

目を瞑りながらアリスを抱えて横に飛ぶと、轟音と共に閃光が奔った。

「ぎゃ――！　目が――！」

ロゼが何かを叫びながら両手で顔を覆って転がり回るが、スタングレネードによる耳鳴りで言ってる事を聞き取れない。

森の奥から大きな塊が飛び出した。

こちらに向かって真っ直ぐ突っ込んでくる塊目掛け、俺に抱えられたアリスがショットガンをぶっ放す。

飛び出してきた塊ことトラ男は、片手で目だけを覆うと散弾を物ともせずに迫り来る。

すに迫い来る
片腕(かたうで)でアリスを抱えたまま、もう片方の手で銃(じゅう)を引(ひ)き抜(ぬ)くと——！
「動くんじゃねえー！」
《悪行ポイントが加算されます》
ロゼと同じく目を灼(や)かれ、悶(もだ)えるラッセルに突き付けた。

ラッセルに甘いトラ男が動きを止めてボソリと呟(つぶや)く。
「……お前、いつも飯作ってくれてるラッセルにゃんに、幾ら何でもそれはないにゃあ」
「今耳がキーンってなってるんで、何言ってるのか分かんないっス」
俺の腕(うで)から這(は)い出たアリスが一本の注射を取り出しながら。
「よし、抵抗(ていこう)するんじゃねえぞトラ男。せめて苦しまないように楽にしてやる」

「アリスにゃんの思い切りの良いとこは結構好きだが、いきなり処刑はドン引きだにゃー」
　聴力が回復してきた俺は、トラ男へにじり寄るアリスを横目に問い掛けた。
「トラ男さん、どうしてこんな事やらかしたんスか。イエスロリータ・ノータッチの精神はどこ行ったんです？　せめて最期ぐらいは、悪足掻きせず格好いいまま逝ってください」
「事情を聞こうともせずに躊躇なく殺しに来るところがキサラギだにゃあ。先に誓って言っておくが、攫ったナディアにゃんに犯罪行為なんてしてないにゃー」
　誘拐は結構な重犯罪のはずなんだが。
「ていうかお前ら、こんな所で何やってんだにゃあ。街の防衛と開拓はどうし

たにゃん」
「何言ってんスか、トラ男さんのやらかしのせいで猫型魔獣を討伐してくれって依頼が来たんですよ。とりあえず、奪った国宝とナディアにゃんを返してください」
　交戦の意思はなさそうなので銃をしまって促すと、トラ男がキッパリ言った。
「嫌だにゃー」
　アリスが無言のまま注射器を投げ付けるが、トラ男はひらりと躱す。
「ワガママ言ってんじゃゃねえぞロリコン野郎！　キサラギの制裁部隊呼ばれたくなきゃ、魔導石だけでもとっとと寄越せ！」
　確かに最優先事項は国宝奪還と言われたが、そこはナディア姫を返せじゃないのか。

……と、それまで地面を転がり回っていたロゼがフラつきながらも立ち上がった。
「あたし、トラ男さんが意味もなく女の子を攫う人だとは思いません。何か理由があるんですよね？」
「魔導石を盗みに行ったら、なんか一人で寂しそうにしてたから持ち帰ったにゃん」
ロゼは息を吸い込むとトラ男に向かって炎を吐いた。
その場を飛び退き炎から逃れるトラ男に、俺は妥協案を出す事にする。
「トラ男さん、聞いてください。実は今、法制機関ヒイラギってヤツらと国宝を取り返す勝負をしてるんで、一旦国宝だけ渡してくれません？」
「……そうだな。自分としては処刑してえがとりあえずそれで妥協してやる。自分達が国宝渡して報酬を受け取った後は、もう一度奪ってくるなり

好きにしろ」
　言ってる事は最低だがしょせん俺達は悪の組織、この国が困ろうが……。
「無理だにゃー」
……………………。
「トラ男を包囲しろ。アレな注射を大量に取り寄せて、全員で一斉(いっせい)に投げ付けるぞ」
「落ち着いてくれよアリスにゃん、俺は嫌じゃなく無理だって言ったにゃー。だって……」
　トラ男はポケットから、二つになった宝石のような物を取り出すと。
「魔導石ならこの通り、雑に扱(あつか)ったら割れたにゃん」
「あんた何て事してくれたんですか」

――地面に置かれた魔導石を取り囲んだ俺達は、一時休戦し話し合う事にした。
「とりあえず接着剤でくっ付けてみたけど、コイツは一体どうしたもんかな」
魔導石を復元したアリスがそれをしげしげ眺め、繋げた箇所を突っついている。
目の前にある魔導石は大人の拳二回りぐらいの大きさで、赤色をしていた。
「パッと見だと修復した物には見えないな。このまま渡せば何とかなるか？」
このまま渡そうかと提案すると、ロゼがはいと手を挙げる。

「正直に魔導石が割れた事を打ち明けて、代わりの物を用意するんじゃダメですか？　ほら、魔法を使うラッセルさんの魔導石、元魔王軍幹部の物だけあって、かなりの大きさだと思うんですが……」
「んんんんー！　んー！」
　同族の発言にラッセルが呻く中、トラ男が首を振る。
「ナディアにゃんから聞いた話だと、グルネイドで使われる魔導石は特殊な物らしいにゃん。ラッセルにゃんの魔導石は青色の水属性だし、多分無理じゃないかにゃー」
　トラ男の言葉を受けて、ふとロゼが思い出したように。
「そういえばトラ男さん、ナディアさんは今、一体どんな生活してるんですか？　仮にもお姫様ですし、森での生活は大変じゃないですか？」
「キサラギから送ってもらったトレーラーハウスで毎日楽しく暮らしてるにゃん。地球産の料理に大喜びしていたし、食後の高級デザートにはなんか感

動してたにゃあ」
　と、ロゼはほっと息を吐くと、にこりと笑みを浮(う)かべて言った。
「なるほど、それなら安心ですね。……ところで、お姫様なら女性のお世話係や護衛が必要じゃないですか？　たとえばあたしとか向いてると思うんですよね」
「ロゼは美味い飯が食いたいだけなのが透(す)けて見えるにゃん。お世話係にするのなら、家事が出来るラッセルにゃんを連れて行くにゃあ」
　トラ男がそう言って、縛(しば)られたまま諦(あきら)めの表情を浮かべるラッセルを抱(だ)き寄(よ)せた、その時だった。
「そこまでよッッ！」
　突然現れたアデリーが、脚(あし)に青白い光を纏(まと)わせながらトラ男に飛び蹴(げ)りを放った。

何もない空間から現れた事からコイツのスーツは光学迷彩が備わっているのだろう。

回避不可能かと思われたアデリーの奇襲は、トラ男が咄嗟に盾にした物で防がれた。

奇襲を防がれたアデリーは、その場から飛び退るとトラ男に指を突き付ける。

「年端もいかない少女を攫い、更には少年にまで魔手を伸ばす邪悪な魔獣よ！　法制機関ヒイラギの使徒、鈍色のアーデルハイトが相手になるわ！」

隠れて俺達の話を聞いていたのかとも思ったが、この様子だと俺達の関係には気付いていないようだ。

「お前いきなり何するんだよ。自称正義の味方が奇襲はダメだろ」

「正義よりも人命よ。少年の命を救うためなら、卑怯者の汚名も受けて立つわ」
何の後悔もないと言わんばかりに爽やかな笑みを浮かべるアデリーだが、皆の視線は別の所に向けられており……。
「魔導石、砕けちゃいましたね」
ロゼの小さな呟きにアデリーが動きを止めた。
「……違うの。私は、魔獣に捕らわれた少年を助けようとしただけで」
なるほど、コイツはラッセルを縛り付けたのはトラ男の仕業だと思っているのか。
確かにワイヤーで縛られ猿ぐつわを噛まされたラッセルの絵面は、犯罪臭しか漂ってこない姿だが……。
『おい六号。急に現れて魔導石を粉砕したこの女は誰だにゃー』

トラ男が日本語で話し掛けてくるが、キサラギの関係者だとバレるのはマズい。
と、俺がどう返そうか迷っていると、何かを思い付いたらしいアリスが言った。
「アデリーの追及（ついきゅう）は後だ。六号、猫（ねこ）型魔獣をスタングレネードで眩（くら）ませてやれ」
「おう、魔獣は音や光に弱いからな。何なら、音にビビって逃（に）げるかもしれないしな」
『つまり、六号がスタングレネードを投げたら俺は森に逃げろって事かにゃー』
猫型魔獣は人語を解さない体で話す俺達に、トラ男が日本語で呟いた。

「この魔獣は強いとは聞いているけど、私と貴方が組めば何とかならない？　驚かせて森に逃げられるぐらいなら、ここで皆で仕留めた方が……」

余計な事を言ってくるアデリーに、トラ男がこれ見よがしにラッセルを見せ付ける。

「くっ、ラッセルを人質に取られている以上、俺達には手が出せない！」

「わ、わー、魔獣に攻撃なんてしたら、ラッセルさんがどうなるかー……」

「自分達にラッセルを見捨てろって言ってんのか？　アデリー、お前見損なったぞ」

俺達の小芝居にアデリーが慌てて首を振り、

「ち、違うわ！　そうね、少年の命が最優先よね！　いいわ、その作戦でいきましょう！」

返事を聞き終わるまでもなく、俺はスタングレネードを投げ付けた——！

5

「……とまあそんなわけで、猫型魔獣は仲間を人質として攫い、再び森へと逃げ込んだ。そして肝心（かんじん）の魔導石は……」

アリスと俺の人差し指が、土下座するアデリーへと向けられて。

「「この女が割りました」」

「もうしわけありません！　もうしわけありません！　本当にもうしわけありません！」

依頼主に面会を求めた俺達は、応接室へと通されたのだが……。

「あらそう！　弟が引き込んだ者が魔導石を……これは大変な事になった

わね！」
「ぐうううううう……！」
　応接室で俺達の報告を受けたリディアが勝ち誇った笑みを浮かべる横で、王子が悔しげに呻いていた。
　王位争いをしているリディアとしては、対抗派閥の失態が嬉しいのだろう。
「だから言ったろ王子さん、この女はろくでもねえって」
「オラッ、お前はどうしてこんなにポンコツなんだ！　魔導石砕いてごめんなさい、生まれてきてごめんなさいって謝れコラァ！」
「生まれてきてごめんなさい、産んでくれたお母さんダメな娘でごめんなさい！　でも聞いて！　私は捕らわれた少年を助けようとしただけなの！
それがまさか、こんな事になるだなんて……！」

この女は縛られたミッセルを見て、猫型魔獣に人質を取られた俺達が危機に陥っていると考えたらしく、それでスーツの潜伏機能を使って奇襲したらしい。

トラ男の説得には失敗したが、魔導石を割った罪を被ってくれたので結果オーライだ。

「あ、あの！　確かこの国は、魔導石が無いと立ち行かなくなるって聞いたんですけど、この状況ってマズいんじゃないですか？　今は誰が悪いとかじゃなく、魔導石をどうにかする事を考えた方が……」

泣いて謝る姿に良心が耐えられなくなったのかロゼが話の流れを変えた。

それを聞いたアデリーは、救いを見付けたように顔を上げ。

「そ、そうね！　今最も大切な事は魔導石よね！　リディア王女、マディア

王子、この度の事につきましては本当にもうしわけありませんでした。至急ヒイラギに使者を送り、代わりの魔導石を用意してもらいますので……」

「我が国に必要な魔導石は特殊な物ですが、本当に用意出来るの？　必要なのは、魔力伝導率が最高レベルの赤の魔導石。これを手に入れようと思ったら、最上位クラスのドラゴンを狩るしかないわね」

　リディアの返答に、顔色を悪くしたアデリーがなぜか縋るようにこちらを見詰め。

「最上位クラスのドラゴンだそうよ……」

「何でこっち見るんだよ、俺達は手伝わないぞ。元々、猫型魔獣を討伐して魔導石を取り返すって依頼だから引き受けたんだぞ」

「おう、ついこないだアジト街を襲った下位種のドラゴンですら手を焼いたんだ。これ以上は割に合わねえ、責任持って何とかしろ」

突き放されたアデリーがしょんぼりと項垂れるが、ハッと何かに気付き顔を上げた。

「そうだわ、ここはグルネイド。ミドガルズ山脈の麓の国！　となれば、この近くに古代遺跡があるはずよ！」

それを聞いたリディアと王子が不思議そうに顔を見合わせ、

「確かに古代遺跡はあるけれど……。あそこはもう隅々まで探索済みよ？」

「それに長年放置されていたせいで、現在は魔獣達の住処になっているはずだが……」

あんな所に何しに行くんだと言いたげな二人に、アデリーが笑みを浮かべ。

「あの遺跡には、世界の管理者である私達にしか開けられない隠し扉があるんです。その先には、最高品質の赤の魔導石が保管されていたはずです」

自信有り気なその態度に、俺はふと気になって尋ねてみる。
「何でそんな所にそんな物が仕舞ってあんの？」
というか、どうしてコイツがそれを知っているのかも気になるのだが。
「それは、この国が建国された理由に繋がるわ。長い話になるけれど、それでもよければ」
「それならいいや」
話を聞いて欲しかったのか、アデリーが寂しそうな顔になる。
と、それまで大人しかった王子がニヤリと笑った。
「私が雇ったアーデルハイト殿が魔導石を手に入れてくれる、と。これは王位継承争いに決着が付く功績になるな」
それを聞いたリディアがバンと机を叩き立ち上がる。

「はあ!?　魔導石を砕いたのもその女でしょう？　差し引きゼロで功績にはならないわ！」
「そうだ、差し引きゼロだ！　だが姉上は、魔導石を強奪された分マイナスだな！」
　二人が醜い姉弟喧嘩を始める中、俺はアリスと目配せすると。
「それじゃあ俺達はこれで失礼しますね」
「依頼を達成出来ずもうしわけねえ。法制機関ヒイラギの妨害が無ければ結果は違ったんだがな。おいアデリー、お前さんには掛かった経費を請求するからな」
「何この額！　ま、待って、私そんなにお金がなくて……！」
　アリスが置いた請求書にアデリーがおののく中。
「待ちなさい。まだ話は終わってないわ」

その場を後にしようと立ち上がったところを、リディアに呼び止められた。

「いや、もう俺達にはどうしようもないんですけど。まさかドラゴン狩（か）って来いなんて言いませんよね？」

「さすがにそんな事は言わないわ。……でも、何かあるでしょう？　要は、その女より先に魔導石を手に入れられればいいのだから」

　そう言って不敵に嗤（わら）うリディアに、王子がハッとする。

「姉上！　まさかこの者達に、アーデルハイト殿から魔導石を奪（うば）えと唆（そそのか）しているのか!?　そのような事が民に知れれば王としての支持は得られないぞ！」

「何を言っているのか分からないわね。私はただ、手段は問わない。結果が全て。魔導石を持って来てくれたら報酬（ほうしゅう）を払（はら）うと言ってるだけよ。……それ

に、もし彼らが魔導石を奪ったとしても、貴方はどうやってそれを証明するの？」
　自らの爪先を弄りながら、察しろとばかりに俺に流し目を送るリディア。
「やはり姉上はクソだ！　そっちがその気なら、私にも考えがあるぞ！」
「王族には多少の黒さも必要なのよ！　グレイス王国を見なさいな、弱小国だったはずなのに、腹黒姫が王位に就いてからはどんどん発展を続けているわ。あそこまで真っ黒になれとは言わないけれど、甘く優しいだけの国王なんて必要ないわ！」
　おいティリス、お前他国でボロクソに言われてるぞ。
「交渉役のお嬢さんは確かアリスと言ったかしら？　よーく考えてご覧なさい。ここで私に恩を売っておく事は利益になるわよ。それに、貴方達が生業としている傭兵業は信用が大事でしょう？」

戦闘員の派遣業は現地資金と相手国の情報を得るための副業なのだが、提案を受けたアリスが考え込む仕草を見せた。

このままアデリーを放置すれば王子が王位に就く事になるのが面白く無いのだろう、ヒイラギとの仲も深まりそうだし。

「ろ、ロクゴー？　私達、一応停戦中の間柄よね？　まさか請けたりしないわよね？」

「いやまあ、お前結構強いし面倒くさいから、あんまり請けたくは無いんだけど……」

それを聞いたアデリーが、ホッと息を吐き安心した素振りを見せて。

「もし請けないというのであれば、キサラギは依頼を放り出して逃げ帰る弱小傭兵だと周辺国に言い触らすわよ。私は王になる為なら何でもする

わ！」

「あ、姉上……」

お姉さん、弟さんがドン引きですよ。

6

返事を保留したまま宿に帰った俺達は、備え付けのソファーに寝そべり、今後について話し合っていた。

「どうするアリス、もう依頼は無視してアジトに帰るか？　トラ男さんはこのまま野生に返してやるって事で」

「当初は簡単なお仕事のはずだったんだが、割に合わなくなってきたな。かといって、今の状況で周辺国へ弱小傭兵って噂を流されるのはマズい。ベリアル様が暴れたせいで従属を申し出てきた国や都市だが、弱いところを見せ

ると一斉（いっせい）に敵に回りそうだ」
　そういえばそっちの問題もあったんだっけ。
「あと、自分は負けるのが嫌（きら）いなんだ。ヒイラギの連中がこの国でデカい顔するようになるのも気に食わねえ。タダ働きも嫌いだな」
「お前アンドロイドのクセに嫌いな物多過ぎだろ」
　学習能力が高いせいか、出会った頃（ころ）と比べるとコイツどんどん人間臭（くさ）くなってきたな。
「というか、リディア姫かマディア王子、どっちかに肩入（かたい）れするならお姫様だろ。マディア王子は潔癖（けっぺき）過ぎてウチとは合わねえ。その点、お姫様なら柔軟（じゅうなん）に付き合えそうだ」
「腹黒い王族はティリスだけで間に合ってるんだけどなあ」
……と、何だかロゼの様子がおかしい事に気が付いた。

「お前なんか震えてないか？　どうした、カロリーゼットが切れたのか？」
「いえ、何だか凄く強い生き物が、こっちに向かってきている気がしまして……。……あの、カロリーゼットが切れたってどういう事ですか？　いつも定期的に貰ってるアレって、何か変な物が入ってるんですか!?」
　ベッドの上でシーツを被って震えるロゼに、俺とアリスは首を傾げる。
「新手の大型魔獣が近付いてるとか？」
「それなら街の住人がもっと大騒ぎしてるだろ。砂の王を相手にした時ですらこんな反応見せなかったんだ。なら、さっき話に出ていた最上位クラスのドラゴンとか……」
　と、アリスが言い掛けたその時だった。
　宿の外で突然爆発音が響き、それと同時に悲鳴が上がる。
　何事かと窓下を覗くと、恐らく誰かに喧嘩を売って逆襲されたのだろう

チンピラが、道に出来たクレーターの前で腰（こし）を抜（ぬ）かして震えていた。
辺りの住人達が何があったと騒（さわ）ぐ中、ドカドカと宿の階段を上ってくる音がする。
その足音が俺達の部屋の前で止まると、勢いよくドアが開けられて――

「六号、風呂（ふろ）を用意しろ！」

開口一番にそんな事を命じてきたのは行方（ゆくえ）不明になっていたベリアルだった。

「風呂を用意しろじゃないですよ、今までどこ彷徨（さまよ）ってたんスか。最高幹部が未開の敵地で迷子になるなんて笑えないっス」

「迷子になんてなってないぞ、単独での作戦行動だ」
　この人は仲間とはぐれると毎度迷子になるくせに、いつも頑(かたく)なに認めない。
　野外活動が多かったせいか、ベリアルは土や埃(ほこり)に塗(まみ)れていた。
「作戦行動って一体何してきたんスか。おかげで大変だったんですよ、色んなとこから友好や従属の使者が来たんですから」
「あたしは魔獣を狩ったり、喧嘩売ってきたヤツをぶちのめしたりしただけで悪い事なんてしてないぞ。悪行ポイント加算のアナウンスも流れてないしな」
「俺も他人の事言えませんが、悪行ポイントで善悪を判断するのは止めましょうよ」
　なぜ突然こんな所に現れたのかは分からないが、問題の一つが解決した

事はありがたい。
　ベリアルが見付かった事で、どこかホッとした様子のアリスが言った。
「それにしても、ここしばらくの間に、キサラギに友好の使者を送ってきた国が二ヶ国と、恭順したいと申し出てきた集落が五つもあったんだが、ベリアル様は何やらかしたんだ。侵略するにしても人手が足りな過ぎるんだが」
　そんなアリスの苦情を受けて、ベリアルが恥ずかしそうに頭を掻きながら。
「風呂やトイレで困る度に見付けた街に乗り込んだんだよ。それで、キサラギについて知ってる事を吐けって脅して回ったら色々揉めて、全部返り討ちにしてたらこうなった」
「風呂やトイレのついでで従属させられた所はいたたまれねえな」
　なるほど、この宿に俺達がいる事が分かったのも表のチンピラを脅したからか。

らた

「ベリアル様、なんか色々お疲(つか)れ様(さま)です。それじゃあ、お風呂にします？　トイレにします？　それともトラ男さんをしばきに行きますか？」

「先にトイレで風呂はそれから……トラ男をしばくってアイツ何やらかしたんだ。……ところで六号、そこで振動(しんどう)してるのは一体何だ？」

　ベリアルの視線の先には、激しく震えるシーツの塊(かたまり)が居る。

「おいロゼ、この人はキサラギの最高幹部、ベリアル様だ。敵じゃないから安心しろ」

　コイツの震えの原因はおそらくベリアルのせいなのだろう。

　ロゼはシーツからコッソリと頭を覗かせるも、ベリアルと視線を合わせられないでいた。

「あたしのキメラの本能が、ベリアル様には近付いちゃダメって訴えてます」
「普段(ふだん)は危機感の無い犬みたいな生活送ってるクセに、こんな時だけキメラぶるなよ」
初対面のベリアルは小さくなっているロゼに興味を覚えたのか、シーツ越(ご)しに突(つ)っついてビクビクと怯(おび)えさせている。
「お前の話は聞いてるぞ。何でも、食べた生物の力を取り込めるんだって？」
「は、はい……。とは言っても、よほどたくさん食べないと影響(えいきょう)は出ないんですけど」
それを聞いたベリアルは真面目(まじめ)な顔で頷(うなず)くと。
「おい六号、コイツに二十五メートルプール一杯(いっぱい)分のバッタを食わせてみよう。キサラギから送って貰ってくれ」

「バッタはこの星にもいますからそこら辺で捕まえません？　俺、あんまり悪行ポイント無いからバッタに使いたくないっスよ」
「どうしてキサラギの人達はあたしにバッタ食べさせようとするんですか!?」
　ロゼが半泣きで喚く中、俺はふとある事に気が付いた。
「ベリアル様、小型転送機はどうしたんですか？」
「何もしてないのになんか壊れた。邪魔になったから置いてきた」
　会社のパソコンを壊したおっさん上司みたいな事を口にするベリアルの腕からは、キサラギから支給される転送機が無くなっていた。
　多分戦闘中に壊れたのだろうが音信不通だったのはこれが理由か。
　この人、補給物資も金も無しでどうやって生きていたんだろう。
「それで、お前らは何でこんな所にいるんだ？　この国を侵略しに来たの

か？」
　不思議そうに尋ねるベリアルに、俺はキサラギからタオルを取り寄せながら。
「説明すると長くなるんで、まずは風呂にしましょうか。ベリアル様からメスの匂いが漂ってますよ」
「メ、メスの匂いって言うのは止めろ！」

幕間③　――彼と深夜のエッチな記憶――

「それじゃもう少しだけ時間を進めようか。アパートを追い出されたあの男が、キミの家の居候になった頃がいいね。アイツと一緒に暮らしてて、何か困った事は無かったかい？」

　ぼうっとする頭をゆっくり動かし、あの時の事を思い出す。

　行くところを無くしたあの子を初めて家に泊めた夜、部屋は遠く離れているはずなのに、緊張して眠れなかった。

　お手伝いの菊さんも居るから、同じ屋根の下二人きりというわけでもなかったのに。

　それなのに、なぜか夜、なかなか眠れなかった……。

「……ほ、ほう。それはどうして眠れなかったんだい？　アイツに何かされた

りした？」
何かされた……？　どうだったっけ……。ああ、されたと言えばされたのだろう。
　そう、確かあの子を家に泊めた次の日だった。
　その日は、ヒーローの柔戦隊ジュウレンジャーにボロボロにされたにもかかわらず、俺、もっと強くなりたいんで稽古付けてくれませんかと頼まれて……。
　確か寝技の特訓と称して、朝まで彼と……。
「寝技!?　朝までアイツと寝技の特訓!?　……いやちょっと待って、寝技の特訓と〝称して〟って言った？　朝まで彼と何したの!?」
　……うん、あれは寝技の特訓じゃなかった。
いや、最初は確かに寝技を教えようとしていた筈なのだ。

いや、最初は確かに寝技を教えようとしていた筈なのだ
　でも、体が硬(かた)くてストレッチも満足に出来ない彼にはまず柔軟(じゅうなん)が必要だと、足が開くように背中を押したり、筋肉が張ってパンパンになった太ももを解していたはず。
「ねえ、どうしてそこで黙(だま)り込むの？　本当に何を思い出したの!?」
　ストレッチ……そう、朝まで二人でストレッチを……。
「それってストレッチじゃないヤツだよね!?　ストレッチって準備運動じゃん！　朝まで夜通しやるヤツは、それもう大人のストレッチで……！」
　そうだ、カチコチに凝(こ)り固(かた)まった彼の体を、半ば意地になりながら解していったのだ。
　おかげで、ストレッチというより整体治療(ちりょう)になってしまった。

「ねえ、本当の事白状しなよ。エロエロな事をやっちゃったんだろう？　よく思い出してごらん、ソイツに何を言われたのか。セリフだけで何が起きたのか分かるから！」

　その結果、汗ばんだ私を見てあの子がこう言ったのだ。

「ゆかりさんってエロいですね。メスの匂いがプンプンします、と……」

「アスタロトー！　早く来てえええええ――！」

四章　清く正しい一票を！

1

アジト代わりにしている宿の中で俺はこれまでの説明をようやく終えた。
風呂から上がったベリアルは、ベッドにあぐらをかいて膝上にシーツにくるまったロゼを乗せ、ぬいぐるみのように抱き締めている。
真剣な顔で途中何度も頷いていたベリアルは最後に大きく頷くと。
「なるほど、完璧に理解した。とりあえずトラ男はあたしが駆除する」
「ベリアル様が理解したってマジっスか。大分こじれてややこしい事になって

るなと思ってたんですが、いきなり賢(かしこ)くなってどうしたんスか」
　今のゴチャゴチャした状況(じょうきょう)をこの人が理解した事に衝撃(しょうげき)を受ける。
「つまり、魔導石(まどうせき)を手に入れたヤツが王様になれるんだろ？　あたし、一度王様やってみたかったんだ」
　全く理解していない事が判明し少しだけホッとする。
「ベリアル様が魔導石を手に入れたって王様は無理っスよ。継承(けいしょう)権が無いじゃないですか」
　俺が正論で説得を試みるも、ベリアルは真剣な顔で言い放つ。
「キサラギの人間が無理って言葉を口にするな。諦(あきら)めなきゃ夢は必ず叶(かな)うんだよ」
「トラ男さんは小学生になるのが夢らしいですが、これもいつかは叶うって事スか？」

「それは無理だろ、諦めさせろ」

数秒前の発言を全否定したベリアルはロゼをシーツ越しに撫で回しているが、されるがままに撫でられる姿はまるで愛玩動物か何かのようだ。

「よし、それじゃあ明日は遺跡とやらに行ってみるか。作戦は幾つか考えてるが、悪の組織のお約束として、王子派の連中を尾行して最後に魔導石を強奪するのが良いと思う」

ベリアルへの説明を諦めたらしいアリスが明日の予定を提案してくるが、以前トリス王国の遺跡でハイネやラッセルに行ったヤツか。

「アレは成功率高いからな。遺跡は長い間放置されたせいで魔獣の巣窟になってるみたいだし、アイツに露払いしてもらおう」

「――というわけだが、ベリアル様もそれでいいか？」

生みの親にすら逆らうアリスにしては珍しく、上司であるベリアルに確認を取るが。
「いいんじゃないか？　この星の事はお前達に任せているから、あたしの事は一戦闘員として扱えばいいぞ」
　指揮官は一人の方がいいとの判断なのか、ベリアルが気楽な様子で笑みを浮かべた。
「マジッスか。俺この星で偉い立場なんで、パン買ってきて貰っていいっスか」
「グーで殴られたくなきゃお前が買いに行って来い。焼きそばパンとメロンパンな。手に入るまで帰って来るなよ」
　この星では手に入らないパンを要求してくる理不尽上司に悪行ポイントでパンを貢ぐと、未だ膝上で抱かれていたロゼがクスクスと笑い出した。
「隊長とベリアル様は仲が良いんですね。なんだか姉弟みたいです」

「言われてますよベリアル様。お姉ちゃんって呼ぶんで甘やかして貰っていいですか？」
「あたし、こんなバカな弟は嫌(いや)だ。もっとしっかりしたのが良い」
　そんな俺達のやり取りに、ロゼが楽し気な笑みを浮かべている。
　そういえばベリアルが改造手術を受ける前は、出来の悪い弟にするみたいに俺に何かと世話を焼いてくれたのを思い出す。

あの頃のベリアルは今と真逆な性格で、ヒーローに挑発され突っ込んで行こうとする俺を宥めたり、敵地で迷子になった俺を保護してくれたり。
反社会勢力には貸せないと、前のアパートを追い出された俺を実家に住まわせてくれもした。
家に厄介になっていた時はなぜかベリアルと風呂で遭遇する事が多かっ

たが、それもまた良い思い出だ。
……いや、今思えば俺の入浴中にベリアルがうっかり入って来ていたようなな。
というか、『ごめんなさい、貴方が入ってるとは思わなくて……』と恥ずかしそうに慌てながらも、いつも俺の裸をガン見していた。
当時のベリアルはしっかり者だったはずなのだが、そんなミスをするだろうか。
「ベリアル様って、ひょっとして俺の事好きなんですか？　エロい目で見てたりします？」
「とりあえず今は一発殴ろうかとは思ってるよ」
真顔で酷い事を言ってくるが、あの時は俺がベリアルの部屋を訪ねる度に、いつも誘ってるかのように着替え中だったりしたのだ。
「俺の事を好きかどうかは置いといて、ベリアル様って結構なドスケ

「俺の事を好きだとシカに置いといて、ベリアル様って結構なドスケベですよね」
「よし、久しぶりに鍛えてやる。お前ちょっと外に出ろ」
　あの頃のベリアルはパッと見は清楚だが、実はムッツリスケベだったのは知っている。
　部屋が散らかっていると掃除してくれたりするのだが、放り出していたエロ本を見付け、俺が入って来るまでガン見していた事がよくあった。
「お前、あたしに怒られてるのに何ニヤニヤ笑ってんだ。ガチの戦闘訓練やるからな。手加減はしてやらないぞ」
　照れ隠しなのか、ちょっと赤くなった顔でぶっきらぼうに言ってくるベリアルに。

「戦闘訓練って聞くと俺がキサラギに入った頃を思い出しますね。あの時は毎日吐くまでしごかれたもんですが……」

そう、あの時とは違う事が一つある。

「お世話になったベリアル様に、強くなった俺を見せてあげますよ」

辛かったけど楽しくもあった昔を思い出しながら、俺は不敵な笑みを浮かべた。

2

翌日の昼過ぎに起き出してきた俺に向け、アリスが開口一番に言ってきた。

「おう負け号、遅かったな。とっくに準備は出来てるぞ」

「負け号隊長、おはようございます。今日は遺跡に行くって言ってたのにもうすぐお昼になっちゃいますよ？」

　コイツらは本当に俺の相棒と部下なんだろうか。

　結構な怪我(けが)人の俺に対し、この仕打ちである。

「医療(いりょう)用ナノマシン使って、あれだけの傷を無理矢理一日で治したんだぞ！　お前らもうちょっと優しくしろよ！　まだ体のあちこちが痛むんだよ！」

　ベリアルをからかい過ぎた結果、昨日は大変な目に遭(あ)わされた。

　戦闘訓練中にあちこち触(さわ)りまくってやった事でベリアルがやる気になってしまった。

　もちろんエロい方のやる気ではなく、痛い方のやる気だ。

「ごめんな負け号、もうちょっと手加減するべきだったな。まさかあそこまで

貧弱だとは思わなくてさあ」
「もう一度俺の事を負け号って呼んだヤツは、悪行ポイント稼ぎの的にするからな」
人の傷口に塩を塗る連中をけん制しながら体の具合を確かめる。
まだあちこち痛むとはいえ、これならなんとかいけそうだ。
「よし、それじゃあ作戦内容を改めて説明するぞ。魔導石の回収に向かったアデリーを尾行して、魔導石を見付けて油断したところを襲って奪う。まあ、以前似たような事をやってるから失敗する可能性は低いだろう」
念のためアリスが作戦の再確認を行うと、ロゼが口元をむにむにさせて。
「アレ、凄く罪悪感が湧くんですよね。ゴールに辿り着いて喜んでる人を、どん底に突き落とす感じがして……」
腹を空かせると猟奇的になるキメラだが、普段のコイツは善良な部類だ

しな。
「あまり気が進まないなら、プランBも用意してあるぞ」
「本当ですか!?　どんな作戦なのか教えてください！」
　頭脳担当のアリスの言葉にロゼが目を輝かせる。
「砕け散った魔導石の色や形は記憶してるからな。このデータをキサラギに送って、同じ色と形の物をプラスチックか何かで作ってもらおう。後は、魔導石手に入れましたとレプリカを渡して、報酬貰ってトンズラするんだ」
「一番ダメなヤツじゃないですか！　魔導石が無いとグルネイドは立ち行かないそうですし、後で大変な事になりますよ！」
　食って掛かるロゼに向け、アリスは安心しろとばかりに片手を広げ。

「それについては大丈夫だ。魔導石をアーティファクトか何かに使われる前に、トラ男にレプリカを盗(ぬす)んで貰えば完璧だ。また魔導石の奪還(だっかん)依頼(いらい)が来たとしても、今度は突っぱねれば問題ない」

「すいません、まだ正々堂々と奪い取(と)った方がいい気がします……」

――グルネイド近くの森の奥。

リディアから事前に聞いていた場所に向かうと遺跡(いせき)らしき物が見えてきた。

トリスにあった遺跡より小さめの施設(しせつ)で、コンクリートっぽい材質で造られている。

遺跡を遠巻きに眺(なが)めながら、辺りを見回しアリスが言った。

「遺跡傍(そば)のあちこちに野営した跡(あと)があるし、既(すで)に探索(たんさく)を始めてるみたいだ

な。という事は、アデリーだけが開けられる隠し扉とやらも解錠済みじゃねえのか？　いっそ、ベリアル様に遺跡を蒸し焼きにして貰うのはどうだ」
「あたしの出番か、任せとけ」
「そんでアデリーには脱出された挙げ句、火力が高過ぎるせいで魔導石が溶けるんだろ。既にオチが見えるんでベリアル様は下がってください」
　出番が無い事にしょんぼりするベリアルを、ロゼがどう慰めようかとオロオロしてると。
「……おい。アデリーが出て来たが、マズいのを連れてるぞ」
　俺が遅くまで寝ていたせいか、アデリーは早くも探索を終えたらしく、遺跡から人を連れて出て来るが……。
「騎士に交じってカメラマンみたいなのが居るけど、この星にもテレビがあるのか？」

ベリアルが感心したような声を上げているが、アリスの言うマズいのとはまさしくコイツらの事だろう。

先行するアデリーの後ろで王子派と思われる騎士達に囲まれながら、テレビカメラのような物を抱（かか）えた男が歩いていた。

「そうっス、コイツらってトイレはボットン使ってるクセに、動力源不明の謎（なぞ）テレビがあるんですよ。何せこの星には魔法（まほう）ってヤツが存在しますからね」

「そういえば報告書に書いてあったな。……あれっ？　となると、魔導石（まどうせき）を強奪したら全部放送されるのか？」

昨日、リディアが王子に言っていた。

『もし彼らが魔導石を奪ったとしても、貴方はどうやってそれを証明するの？』と。

そして王子は『私にも考えがあるぞ』と返したのだ。
「魔導石を持っているのが厄介だな。それがなきゃ連中に撮られる前に、ベリアル様に焼いて貰うとこなんだが。……遠距離からカメラを狙い撃つか？　しかし、カメラのみを狙撃しても他に撮影媒体が無いとは言い切れねえ。それならいっそ、カメラマンの方を……」
「アリスさんダメですよ！　たとえ戦時中だったとしても、郵便屋さんと撮影屋さん、それとカブトムシ屋さんは攻撃しちゃいけないんです！」
郵便とカメラマンはともかく、カブトムシ業者を保護する理由は何だ。
――と、その時だった。
周囲を警戒していたベリアルが、ふと何かを見付けたようだ。
「……ん？　なー、アレってトラ男じゃないか？　あんな所で何やってるんだ」

ベリアルの視線の先を追ってみると、茂みに潜伏中のトラ男が居た。
「潜伏中のトラ男さんなんてよく見付けられましたね。多分アデリーが持つ魔導石を狙ってるんスよ。あの人、魔導石を集める趣味があるんで」
「魔導石を手に入れても王族じゃなきゃ王様になれないんだろ？　アイツ、そんな物手に入れてどうする気なんだ？」
　ジリジリと標的へにじり寄るトラ男を不思議そうに眺めるベリアルに、
「この星には時間を逆行させる能力者がいるんです。トラ男さんは、強力な魔導石があればいつか子供になれるはずだって、今も諦めずに頑張ってるんス」
「あたしの頭が良くないせいか、トラ男が何言ってるのか分かんない」
　そんなの俺だって分からない。
……と、様子を覗っていたトラ男が動きを見せた。

遺跡内の魔獣を駆除したせいで、アデリー達が疲労しているのを見て取ったのだろう。

「おっ、トラ男のヤツやる気だな。あんなに気合いが入ったところは見た事ないぞ」

ベリアルが言うように、普段飄々としているトラ男にしては目がガチだ。

「あっ、トラ男さんが行きました！　隊長、あたし達は見てるだけでいいんですか？」

トラ男に懐いていたせいか、ロゼが心配そうな声色で尋ねてくる。

「そうだな、ただ見てるだけなのもつまらないし……。ベリアル様、魔導石強奪が成功するか賭けませんか？　俺は成功する方にリリス様のやらかし情報を賭けるっス」

「あたしは失敗する方にアスタロトの恥ずかしい写真を賭けるよ」

「賭け事は良くないと思います！　というか、そういう意味で言ったんじゃなくて……！」

「おう、トラ男が先手を取ったぞ。でもアイツ、カメラでバッチリ撮られているな」

　アリスの指摘の言葉通り、奇襲を仕掛けたトラ男はその一部始終を捉えられていた。

　先日奇襲を受けた事への仕返しなのか、トラ男の跳び蹴りがアデリー目掛けて放たれる。

　それを辛うじてガードしたアデリーだが、勢いよく撥ね飛ばされた。

　そのまま遺跡の壁に激突するのを、周りの騎士が受け止めて勢いを殺し助けに入る。

——そんな一連のやり取りを、カメラマンは一つも撮り逃す事なくレンズに収めた。
「トラ男さんやアデリーよりも、カメラマンの方が良い動きをしているな」
「撮影屋さんは大森林の奥深くで色んな魔獣を撮るのが仕事ですからね。こないだ放送されたドラゴンの子育てドキュメンタリーなんて、どうやって巣穴に侵入したんだって騒がれていましたよ」
そのドキュメンタリーは俺も見たいし、この星のカメラマンをスカウトしたいな。
「アデリーが騎士と連係して反撃してるが、さすがにトラ男の方が優勢だな」
他人事のように見学しながらアリスが感想を口にする。
トラ男はアレで最強の怪人だ、取り巻きの騎士がいるとはいえ、俺と拮抗

するレベルのアデリーには荷が重いだろう。
盾を構えた騎士が次々とトラ男に殴り飛ばされ、ついにはアデリーが追い詰められる。
人型の魔獣がアデリーを壁際に追い込むというかなり犯罪臭がするその絵面を、カメラマンが様々な角度から撮り続けていた。
「ベリアル様、アスタロト様の恥ずかしい写真を頼みますよ」
「まだ勝負は終わってないぞ。いいか六号、よく見とけ。スマートっていう最近覚えた言葉の意味を今からお前に教えてやるよ」
ベリアルはそう言い残し、隠れていた木陰から飛び出した。
改造手術で強化された身体能力を発揮して、常人では視認するのも難しい速度で駆ける。
騎士達と対峙していたトラ男に高速で接近したベリアルは。

『久しぶりだなトラ男、元気そうで良かったよ！　今すぐ処刑してやるからな！』

『何でこんな所にベリアル様が⁉　処刑される心当たりはたくさんあるが、話も聞かずにそれはねえにゃん！』

笑みを浮かべて殴り掛かってきたベリアルに、トラ男が慌てて飛び退る。

「おいアリス、この状況どうするんだ。あの人、俺との賭けに勝つためだけに、何も考えず飛び出しちゃったぞ」

「これはさすがに想定外だよ。トラ男と日本語で叫び合ってるし、関係者だとバレるのも時間の問題だな。大丈夫だ、バックレる用意は出来てるぞ」

ベリアルの暴走にどうしたものかと思っていると、助けられた形になったアデリーが、頬を上気させてその背中を見上げる。

追い詰められていたアデリーからすれば、ベリアルの事がピンチに駆け付

けてくれたヒーローにでも見えているのだろう。
いきなり現れた謎の美女の乱入に、カメラマンも地面を転がりながら激撮中だ。
『それじゃあ十秒だけ話を聞いてやる。それであたしを説得してみろ』
『魔導石を盗みに侵入したら、ナディア姫が一人で寂しそうにしてたんです。気になって話し掛けてみたら俺を怖がる様子もなく、姉兄喧嘩を止めたいけど何も出来なくて悲しいんだと言われまして』
……ん？
『それで、俺が持っていた魔導石を見ても咎める事なく、むしろそれが喧嘩の原因になっているから、そのまま持って行っていいと。そして、自分が居なくなれば兄と姉が心配して、もしかしたら自分を捜して協力してくれるかもしれない。魔導石をあげる代わりに、どうか私も連れて行ってほしい……。

と……子供にそこまで言わせちまったら、力になってやらないわけにいかんでしょう？』

…………トラ男は語尾ににゃんを付けるのも忘れるぐらい真剣に語っていた。

トラ男が話す日本語をアリスがロゼに通訳する傍らで、俺はトラ男を誤解していた自分を恥じる。

「隊長、それにアリスさん！　トラ男さんが何するつもりかは知りませんが、あたし達も行きましょう！」

アリスの翻訳を聞いて感動したのかロゼが拳を握り締めた。

俺はトラ男の援護をするため腰の後ろから銃を引き抜く。

『そこで俺は決めました。幼い妹を悲しませて王位争いなんてしているバカはぶっ飛ばすと。そして改めて魔導石を手に入れ、それを土産にナディア姫に』

な』

『それ以上言うなトラ男！』

熱く語るトラ男をベリアルが遮った。

真面目な表情を湛えたベリアルは、それ以上口にする必要はないとでも言うように。

そして、分かっているとばかりに頷くと——

『あたしは十秒だけ聞いてやるって言ったんだ！　話が長くて分かんないし、説得出来なかったんだからお前は処刑だ！』

『あんた理不尽過ぎるにゃーー！』

俺達が止めに入る隙も無く、ベリアルが襲い掛かった——！

カメラマンや騎士達と共にアデリーが頭を下げた。
「ありがとうございます！　あのままでは魔導石を奪(うば)われていたところでした！」
　ベリアルに襲われたトラ男はにゃんにゃん鳴きながらも応戦し、隙を見てスタングレネードを使って逃走(とうそう)した。
　森に潜伏しての奇襲を得意とするトラ男はスタングレネードを愛用している。
　そのために、いつも閃光(せんこう)を防ぐ特殊(とくしゅ)なサングラスを掛けてるぐらいだ。
「それにしても……」
　と、アデリーは複雑そうな表情をこちらに向けると。
「まさか、こちらの方がロクゴーの上司だなんてね。ベリアル様と言いました

か？　改めてお礼を言わせてもらいます。助けてくれて、ありがとうございました」
　木陰から出てきた俺達にアデリーは最初身構えたものの、今では警戒を解いていた。
「本当はあたしの手でアイツにトドメを刺したかったんだけどな。まあ怪我は無かったみたいだし何よりだ」
　体を気遣われた事が嬉しいのかアデリーは少しだけ照れくさそうに頬を染め、
「ベリアル様はあの魔獣と何かの因縁があるのですね」
「ああ、アイツはあたしの元部下だからな」
…………。
『ベリアル様、いきなり何て事言い出すんスか！　まだトラ男さんと俺達の

関係にバレてないんですよ！』
　固まったまま動かないアデリーをよそに、小さく囁きかける俺に向け、ベリアルがニヤニヤと笑みを浮かべている。
『お前も悪の組織の人間なら常にギリギリのラインを渡っていけ。安全牌なんてクソ食らえだ。あたしもお前も悪党なんだ、長生きするより今を楽しめ！』
　キサラギという組織には、どうしてこうも難の有るヤツしかいないんだ、少しは俺を見習って常識とかを身に付けてはどうだろう。
　どうせこの人の事だ、万一バレたら力業で解決すればいいと思っているのだ。
『ベリアル様は周りを困らせて面白がってるだけでしょうが。つい最近、バレないかハラハラする今の状況と似たような事があったんですよ。戦闘員十号が、ベリアル様と同じような事して楽しんで……』

「今のはキサラギジョークというヤツです。あんな魔獣なんて知りません」
「そ、そうだったんですね！　うふふ、急に言われて驚いたわ。あの魔獣と似たような言語で会話しているようにも聞こえましたから……」
　戦闘員十号と並べられるのは嫌だったのか手の平を返したベリアルに、アデリーが目を輝かせながら片手を出すと。
「ベリアル様の正義の心は素晴らしいですね！　私は法制機関ヒイラギ使徒、鈍色のアーデルハイトです！」
「敵じゃねーか！」
　握手しようと手を差し出していたアデリーは、頭突きを食らって蹲った。
「おい六号、今、法制機関ヒイラギって名乗ったぞ！　じゃあコイツは敵じゃねーか！」
　頭を押さえて蹲るアデリーを指差しながら、ベリアルが今さらな事を言

ってくる。
「今まで誰だと思ってたんスか。昨日は俺の説明聞いて、完璧に理解したって言ったじゃないスか」
「八割ぐらいは聞き流してるに決まってるだろ。でもそういう事なら話は早いな」

ベリアルは不敵な笑みを浮かべると、未だ蹲るアデリーの首根っこを掴んで持ち上げた。
「商売敵のアーデル何とか。お前はウチと敵対関係にあるとはいえ、助けられた事は認めるな？　そしてあたしが助けなかったら、魔導石を奪われていた事も認めるな？」
「も、もちろん……。我がヒイラギは正義の機関よ、受けた恩はちゃんと返

すわ」
痛みで涙ぐんではいるものの、それでもベリアル相手に一歩も引かず、アデリーはぶら下げられたまま言葉を返した。
「分かっているならそれでいい。なら早速だけど礼をくれ。お礼はお前の魔導石な」
「いきなり何を言い出すの!?　幾ら何でもそれは無理よ！　だってこの魔導石は、正確には私の物ってわけではないし……！」
取り巻きの騎士達は武器を構えるものの、トラ男を撃退したベリアルを遠巻きにするのが精々だ。
片手で宙吊りにされたアデリーは、絶対に離さないとばかりに魔導石を腹に抱き込む。
「う、受けた恩は他の物で返すから！　コレは、必要としている人がいるし譲れないっ……

譲れないわ！」
「……仕方ないなあ。それじゃあ別の物でも構わないぞ」
その根性に感じ入るものでもあったのか、ベリアルが仕方なさそうに地面に下ろした。
アデリーがホッとしたようにベリアルを見上げると。
「お前の組織のヒイラギって名前、キサラギに似てて紛らわしいんだよ。これからはもっと分かりやすく、何とかレンジャーみたいな名前にしろ」
「理不尽な！」
地面に下ろされたアデリーが魔導石を抱いて後退る姿に、ベリアルが突然切れた。
「魔導石はダメ、改名も嫌だ！　ピンチを救って貰っといてお前ワガママ言い過ぎだろ！」
「私、そこまでワガママ言ってない！　この放送をご覧の皆さんはどう思いま

すか!?　私がワガママだと思いますか!?」
追(お)い詰(つ)められたアデリーがカメラに向かって訴(うった)えると、アリスがベリアルに何かを囁く。
「……しょうがないな。今回の件は貸しって事にしといてやるよ。早く、魔導石を必要としている人のところに持ってってやれ」
急に大人しくなったベリアルにアデリーは怯(おび)えながらも宣言する。
「この借りはちゃんと返すわ！　でも、今回は私の勝ちよ！　法制機関ヒイラギは……」
わざわざタメを作ったアデリーは、
「決して悪に屈(くっ)しはしない！」
カメラに向かってポーズを取った。
「……………………」

「まま、待って、カメラ映えを狙（ねら）ったのが気に食わなかったの⁉　それについては謝るから、今日はこれで失礼するわ！」
決めポーズにイラッとしたベリアルに無言で迫（せま）られ、アデリーは騎士達と共に逃（に）げて行った――

――宿に戻（もど）った俺達は、部屋に備え付けられている謎（なぞ）テレビを眺（なが）めていた。
《凱旋（がいせん）です！　マディア王子が法制機関ヒイラギから招いた使徒、アーデルハイト氏が魔導石を持ち帰りました！　国宝紛失（ふんしつ）により懸念（けねん）されていた危機も、これで万事解決です！》
目の前のテレビでは、アデリーがカメラに向かって手を振（ふ）る姿が映ってお

り、マディア王子の功績であると大々的に報じられている。
　俺はそんな面白くもない放送を眺めながら、ベッドに腰掛け足をブラブラさせているアリスに言った。
「なあ、本当にこれで良かったのか？　もう決着付いちゃったぞ？」
「あの時ベリアル様にも言ったんだが、まだプランCを残してある。それを成功させるには、カメラの前で暴れられるわけにはいかなかったんだよ」
　そんなアリスの説明を受け、何だか大人しかったロゼが俯き加減に呟いた。
「あのう……。今回は、どうにかトラ男さんを助けてあげられませんか？　何だか必死に頑張ってましたし、ナディアってお姫様の願いもどうにか叶えてあげたいですよ」
　ベリアルが話を途中で終わらせたのでうやむやになってしまったが、トラ

男としては、くだらない王位争いを終わらせるためブランデを王位に就けたいのだろう。
　まだ会った事がないのでどんな子なのかは分からないが、トラ男の話を聞く限り他の二人よりはマシな気もする。
「それについては自分は何とも言えねえな。元はトラ男が勝手に始めた事だ、責任はアイツに取らせるべきだ」
　そんな辛辣なアリスの言葉にロゼが一層俯きシュンとなる。
「でもトラ男はキサラギ最強の怪人だ。自分が手を貸さなくたって、魔導石の一つや二つ、案外どうにかしちまうかもな」
「アリスさん……。そうですね、最上位のドラゴンを倒せば赤の魔導石が手に入るそうですが、トラ男さんならドラゴンを狩ってくるかもしれませんし！」
　ロゼが何気に言ったその言葉が、何だかいやに引っ掛かる。

そう、魔導石に関して何かを忘れているような……。

何かを思い出そうとする俺の隣で、ベリアルがワクワクした顔でアリスに尋ねた。

「それで、これから一体どうするつもりだ？　プランCってのがあるんだろ？」

「作戦自体は単純だよ。そのためには、まず魔導石を手に入れねえと」

アリスはそう言って腰掛けていたベッドから立ち上がると。

「そろそろこの街に魔導石が来る頃だ。トラ男に気付かれないウチに迎えに行くぞ――！」

――グルネイドの首都を出て、ミドガルズ山脈に延びる街道を歩いて行く。

……一体どれぐらいの距離(きょり)を歩いただろうか。

徐々(じょじょ)に辺りが暗くなり、俺達がキャンプの準備を始めた、その時だった。

「なあ、誰かこっちに向かって来てるぞ」

誰よりも勘(かん)の良いベリアルが、街道の向こうから来る何者かに気が付いた。

その言葉に釣(つ)られて暗闇(くらやみ)に目を凝(こ)らせば——

「そこの者！　すまないが何か食べさせては貰えないだろうか！　私はグレイス王国近衛騎士隊長スノウと申す者！　大丈夫(だいじょうぶ)だ、敵意は無いし金もある！　だから……コイツに何か食わせてやってくれ！」

グッタリしたハイネに肩(かた)を貸し、剣(けん)を杖(つえ)代わりに歩いてくるスノウが居た。

4

「おい、そっちのパンをもう一つくれ！　後、水のお代わりも！」
「私もパンをお代わりだ！　くっ……。一切れのパンをこんなに美味しく感じたのは、スラム街で五日も何も食えなかった子供の頃、炊き出しで食べた黒パン以来だ……！」
　よほど飢えていたらしく、悪行ポイントで出した食べ物が次々と二人に食われていく。
　パンを齧りながら涙するスノウの横で、なぜかハイネまでもが涙を流す。
「あんたも苦労したんだねぇ……。ほら、あたいの分のパンも食べるといいよ」

「何を言うのだハイネ、それはお前がちゃんと食べろ。本当は涎を垂らすほど好きな魔獣のレバーを、生臭いから苦手だと嘘を吐いて私に押し付けた事は忘れてないぞ。腹がはち切れるまで食わせるからな」

そう言って泣きながらパンを貪る二人だが、やたら仲良くなっているのはなぜだろう。

サバイバル生活を送るうちに友情でも芽生えたのだろうか。

「ほら、こっちの肉が焼けてるよ。こういう時には炎使いなのが有り難いね。火を使った料理は調整がしやすいからさ」

「ふふっ……さすがはハイネだな。有り難く頂くが、こっちの一番いい感じに焼けた肉はハイネ自身が食べるべきだ」

　そう言って笑い合う二人は、美味そうに焼けたバーベキュー串（ぐし）を互（たが）いに差し出すと。

「お二人が要らないのなら、これはあたしが食べますね」

「「ああっ！」」

　ほのぼのとした空気を意に介（かい）さず、ロゼが二本の串焼（くしや）きをまとめて食べた。

「なんであんたが食べるのさ、それはスノウに食べさせようと……！」

「ハイネはさっきまで死にかけていたんだ！　それはハイネが食べるべきで……」

　ロゼに食（く）って掛（か）かったハイネとスノウは、顔を見合わせ恥（は）ずかしそうに——

「さっきからユリユリしいんだけど、お前らいつから付き合ってんの？」
「バカッ、我らの友情を穢すんじゃない！」
「あんたは発想が下品なんだよ！　苦難を乗り越えて結ばれた、種族を超えた友情だぞ！」
　なんかおかしな事になってるが、放っておけば三日ぐらいで戻るだろう。
「つーかお前らを転送した事を今まですっかり忘れてたよ。この数日間は何してたんだ？」
　俺が何気なく言った一言に、二人が目を見開いて戦慄いた。
「何してたもクソもあるか、見ての通り遭難したのだ！　ドラゴンに追われて食料を食われるわ、その他の荷物も奪われるわで……！」
「夜は火を焚かなきゃいけないし、使える魔力も限りがある。襲ってくる肉食獣はスノウが狩って、あたいがそれを焼いて調理して……二人で助け合

ってここまで来たのさ！」
　上位種のドラゴンは賢（かしこ）いから人を襲わないってのは何だったんだ。
　確かそんな事を言っていたアリスと目が合うと、ミステイクとばかりに肩を竦（すく）める。
　と、無言で串焼き肉を頬張（ほおば）っていたベリアルが、ふと気になったのか尋ねてきた。
「ところで、何でコイツらを転送したんだ？　何かの遊びか罰（ばつ）ゲームか？」
「何他人事（ひとごと）みたいに言ってるんスか。迷子になったベリアル様を捜（さが）すため、爆（ばく）発（はつ）反応があるたびに捜索隊（そうさくたい）を送ってたんですよ」
　まあ、後半は転送するのが楽しくなって、遊び感覚になっていたが……。
　ベリアルはちょっとだけ目を泳がせると、串焼きの残りを囓り。
「あたひは迷子になってないから」

「まだそんな事言ってるんスか。強がり言ってると置いてきますよ」
誰よりも串焼きを食べてようやく腹が満たされたのか、ロゼが二人に笑い掛け。
「でも、お二人が無事で良かったです。あたしとラッセルさんも縛られた上で、無理矢理グルネイドに連れて来られましたから」
「お前も大概な目に遭わされているな……。ところで、先ほどから気になっていたのだが、そちらにいる御仁は誰だ？」
スノウの指し示したのはそっぽを向いているベリアルだ。
「そういや紹介がまだだったな。秘密結社キサラギの最高幹部、ベリアル様だ」
「なるほど……。初めましてベリアル様。私はキサラギの戦闘員にして、グレ

イス王国近衛騎士隊長のスノウです。どうか今後ともお見知りおきを……」

さすがは騎士隊長と言えばいいのか、スノウが綺麗に一礼する。

礼を受けたベリアルは、何かを思い出したように手を打つと。

「お前の名前は覚えてるぞ、六号からの報告書で見たからな！　確か、金と魔剣に目がなくて、身動き取れない六号にキスした女だ！」

「おわっ、いきなり何すんだ！　コラ止めろ、暴れるな！」

ベリアルの言葉を受けて襲い掛かってきたスノウを取り押さえると、キャンプの後始末を終えたアリスが皆に告げた。

「それじゃあそろそろ街に帰るぞ。本当はここで一泊して、それからスノウとハイネを捜すつもりだったが見付かったからな。どうせ寝るなら、野宿するより宿のがいいだろ」

「ああ、わざわざあたい達を捜しに来てくれたのかい？　その優しさがある

「あれこれ新しい道を探しに来てくれたのだし、その優しさがあるんなら、そもそも転送するのを止めて欲しかったよ……」
「全くだ。……まあ、結果として無事だったのだ。ハイネの人となりも知ることができたし、こうして終わってみればサバイバルも悪くない」
　そんなスノウの言葉を聞いて、ハイネが照れ臭そうに笑っていると。
「迎えに来たのは合ってるが、正確にはお前らじゃない。ハイネの持ってる魔導石だな」
「「はっ？」」
　ここ数日で息が合ったのか、スノウとハイネが同じ仕草で首を傾げた。
「思い出しました！　そういえばハイネさんが持つ魔導石は、以前トラ男さんがドラゴン倒して、奪い取った物をあげたんでしたね！」
　納得したように手を打つロゼに、当のハイネが手の甲の魔導石に視線を
答えた。

落とし
「つまり、あたいの力が必要になったってわけかい？」
　真打ち登場みたいなドヤ顔になったハイネにアリスが告げた。
「必要なのは魔導石だ。しかもドラゴンが持っている赤い色のヤツしかダメらしいんだ」
……奪われまいと魔導石を腹に抱き、泣いて抵抗するハイネの前に。
「これはハイネが大切にしている物だ。それを力尽くで奪うと言うなら、たとえ誰が相手でも容赦はしない」
　声高に宣言すると、まるで弱者を守る騎士のように、剣を抜いたスノウが立ち塞がった。
　泣いて蹲っていたハイネが眩しそうにスノウを見上げ、涙を拭って立ち上がる。

剣を構えるスノウの後ろで、いつでも援護出来るよう腰を落とした。
「私ではこの面子に勝てない事は承知の上だが、それが……！」
「王女様に魔導石持ってくとかなりの報酬が貰えるんだよ。お前らにもボーナス弾むぞ」
　アリスの放った一言に、スノウの瞳が陰りを見せる。
「それが……騎士という……もの……」
「ちなみにベリアル様はキサラギで一番強いからな。死なないように気を付けろよ」
　続いての俺の一言に、スノウが無言で俯いた。
「……ス、スノウ？　あたい達はズッ友だよな。ここで見捨てたりしないよ

な？」
ハイネが恐る恐る声を掛けるとスノウが肩を震わせて。
「……確か、その魔導石はトラ男からの貰い物だったな。なら、それを渡してボーナスが貰えるのなら、ハイネは得した事になるんじゃないか？」
「あんたいきなり何言ってんのさ！　最後の干し肉を分け合ったあの日の夜、あたいの事を初めて出来た魔族の友人だって言ったじゃないか！」
……………。
「この状況では抵抗するだけ無駄だろう！　だったら魔導石を譲って分け前を貰った方が賢いではないか！　タダで貰った魔導石なんだからケチケチするな！」
「コイツ、最低な開き直りしやがった！　だから人間は信用出来ないんだよ！　よく考えてみればお前が強欲なせいで、トリスの王子にあれだけ媚びるハメになったんだ！　金に汚いところをどうにかしろよ！」

てるハメになったんだ！　金に汚いところをとうにだしてるよ！」
三日も経てば元に戻ると思ったが、どうやら一日も持たなかったようだ。
二人は睨み合いながら、互いに隙を覗い距離を詰める。
「おのれ、このクソ魔族め！　思えば最初に会った時から貴様が気に食わなかったんだ！」
「それはこっちのセリフだよ！　元魔王軍幹部を舐めるなよ！」
やがて取っ組み合いの喧嘩を始めた二人を、ベリアルが呆れたように眺めながら。
「なあ六号、部下はちゃんと選んだ方がいいと思うぞ」
「それと全く同じ事を以前リリス様にも言われました」

アッサリと友情が壊れた二人が喧嘩を続け、面倒になったベリアルが物理的に眠らせた、その翌日。
魔導石を巻き上げた俺とアリスは、通された応接室でリディアと対峙していた。
「今さら何しにやって来たの？　貴方達にはガッカリだわ。私が王座に就くのは絶望的よ」
王子が魔導石を手に入れたと大々的に放送された事で、リディアの派閥はまるでお通夜のような有様だ。
深いため息を吐くリディアの前に、アリスが魔導石を差し出した。
「……これは最高クラスの魔導石。しかも赤い色という事は、ドラゴンを倒

して来たの!?」
　魔導石を手に取って、マジマジと見詰めるリディア。
「入手経路は企業秘密だ。納品自体は遅くなったが、王座を諦めるにはまだ早い」
　自信有り気なアリスの言葉にリディアが首を横に振る。
「…………たとえ魔導石が手に入っても、今さら遅いわ。もうじき、王を決めるための選挙が行われるの。先に魔導石を手に入れた弟は、既に英雄みたいな扱いを受けてるわ。これを今から挽回するには、弟がよほどの失態を犯さない限り不可能ね。……私がなんとしてでも王にならなきゃいけないのに……」
　アリスに目配せをされた俺は一冊の本を差し出した。
　この国の言葉で『悪の組織の選挙マニュアル』と書かれたソレは、元は日本

語で書かれていた物だ。
　本のタイトルから目を離せなくなったリディアに、俺は更なる攻勢を仕掛ける。
「我が組織が考案した票集めのマニュアルです。権力者に人気のレア本で、効果が実感できなければクーリングオフも受け付けます」
「この本の帯をご覧ください。推薦者はあのグレイス王国のティリス姫です。今、この本をお買いになると、オマケとして魔導石まで付いてきます」
　俺とアリスの営業に、リディアは本を手に取り抱き締めた。
　期待に満ちた目でこちらを見るリディアに、俺達二人は最後のプレゼンを実施する。
「これだけの品々が、今ならお値段据え置きの当初お約束頂いた報酬で手に入る！」

「そして　リディア姫だけの限定サービス！　このマニュアルに精通した我々が、選挙のお手伝いを致(いた)します！」
「お願いですから買わせてください！」
　感極まったリディアは、迷う事なく即(そく)買いした――！

【グルネイドの国王選挙まであと十日】

　借りていた宿を勝手に事務所代わりにした俺達は、早速行動を開始した。
　宿の店主が迷惑(めいわく)そうな顔をしていたが、アリスが多めに金を払(はら)ったので選挙の間だけ見逃(みのが)して欲しい。
　リディアの部下も当然選挙活動は行うが、俺達とは事務所を別にしてある。
「各員、マニュアルの中身は頭に入れたか？　もし裁判になったとしても、自

分が弁護士に立って必ず無罪を勝ち取ってやる。保釈金も払ってやるし、活動中は高額報酬を約束しよう。なので選挙活動に勤しんでくれ」

「こういうのは大の得意だ、任せとけ！」

　事務所で行われたアリスの激励に、やる気に満ちたスノウが言葉を返す。

「あ、あたいだって元は魔王軍の幹部なんだ。たとえどんな手を使ったとしても、絶対に勝ちを掴みに行くよ！」

　そんなスノウに対抗心を燃やすハイネが強く拳を握り締めた。

「……隊長、もうあたしアジト街に帰っていいですか？」

「お前がアジト街に帰ったらツッコむヤツが居なくなるだろ。後でカロリーゼットやるから我慢しろ」

　やる気に満ちたりやる気が無かったり。

　そんな事務所の様子をベリアルが、どこか懐かしそうに眺めていた。

【国王選挙まであと八日】

《続いてのニュースです。先日、マディア王子が魔導石を手に入れた事がニュースになったのは記憶に新しいかと思いますが、朗報です。先ほどリディア姫から、マディア王子が手に入れた物より、更に良質な魔導石を入手したと発表がありました。この発表を受けたマディア王子は、先に魔導石を手に入れた自分こそが王になるべきだと主張しており、リディア姫の今後の見解が注目されます――》

事務所の壁に埋め込まれた謎テレビからそんなニュースが流れてきた。

今のところ、テレビ局に関してはアリスが一手に握っている。

選挙活動というものはマスメディアを味方に付けた方が勝ちなのだ。

かといって、地道な草の根活動も大切な事は間違いない。

俺はマスクを深く被ると、選挙活動を行うべく夜の街へと繰り出した——

【国王選挙まであと七日】

盛り場にも人が減り、そろそろ深夜になろうかという時間帯。

「おう兄ちゃん、飲んだ帰りかい？　ちっと聞きたい事があるんだけどよ。あんたマディア王子とリディア王女、どっちに投票する気なんだ？」

「ヒッ⁉　え、えええと……僕はマディア王子に入れるつもりですが……」

酒場帰りと思われる青年の答えを聞いて、俺はうんうんと頷(うなず)いた。

「そいつは良かった！　もしリディア王女に入れるなんて言ってたら、今頃(いまごろ)兄ちゃんは大変な事になっていたよ。そうだよなあ、リディア王女が王になったら、俺みたいなのは仕事がやり難くなって仕方がねえや！」

「は、はあ……」

《悪行ポイントが加算されます》

《悪行ポイントが加算されます》
　困惑（こんわく）する青年の胸元に、俺は拳を突（つ）き付けると。
「兄ちゃんの友達にも言っといてくれや。投票するのはマディア王子。リディア王女には死んでも入れるな、ってな」
「…………わ、分かり…………ました」
《悪行ポイントが加算されます》
　青年が頷くのを確認すると俺はその場を後にする。
　今頃は他のヤツらも選挙活動に勤しんでいるのだろう。
　俺は次の標的を探すべく、今夜も夜の街へと繰り出していた——

【国王選挙まであと六日】

《続いてのニュースです。先日行われた記者会見で、『姉弟（きょうだい）で王位争いをする事自体が間違っている。そのような事に使うお金があるのなら国民のた

めにこそ使うべきだ。弟が善政を敷いてくれると言うのなら、私は選挙を辞退しても構わない』とリディア姫が述べられました。自分こそが王になるべきだと主張するマディア王子とは真逆の反応を見せており――》

俺が活動するのは主に夜なので、それまでは事務所で待機だ。

テレビの前でニュースを聞いていると、忙しそうなアリスが言ってきた。

「今のところは順調だ。スノウが警察に捕まったが、アイツが欲を出さなければすぐにでも保釈されるはずだ」

…………。

「つまり、スノウはここでリタイアって事？」

「そういう事だ」

スノウは良い仕事をしてくれた。

俺もアイツを見習わなければ――

【国王選挙まであと五日】

「スノウが黙秘を貫いてるそうだ。これで向こうの陣営にかなりのダメージを与えられる。買収したテレビ局にもリークした。明日のニュースが楽しみだな」

「黙秘日数が一日経つごとに報酬がどんどん増えてくんだろ？　それって下手したら、選挙が終わっても黙秘を続けて出て来ないんじゃないのか？」

　俺が疑問に思っていると、突然事務所のドアが開かれる。

　事務所に慌てて駆け込んで来たのは息を切らしたロゼだった。

「隊長、大変です！　ハイネさんがお巡りさんに捕まりました！」

「やったぜ！」

「さすがハイネだ、よくやった！」

報告に喜び喝采を上げる俺達に、ロゼが胡乱な視線を向けてくる。
スノウに続いてハイネもか、俺も本気を出さないと。
《続いてのニュースです。マディア王子に入れなければ酷い目に遭わせるなど、有権者が脅される事件が多発しています。事態を重く見た当局はマディア王子の関係者に事情を聞こうとしていますが、『これはリディア陣営が仕組んだ罠だ、我が陣営は何もしていない』とマディア王子が当局の介入を拒否しており——》

【国王選挙まであと四日】

《続いてのニュースです。先日逮捕されたマディア王子の後援者と思われる白髪の女性についてですが、多数の住人が『マディア王子に投票してくれれば金をやると言われた』と証言しているにもかかわらず、女性は未だに黙秘

を続けております。マディア王子はこの件について、『ウチの陣営に白髪の女なんて所属していない、そんな女は知らないし、リディア陣営の関係者だ』と発言し、現在波紋を広げております。続きまして、同様の事件を起こした魔族の女性が逮捕された件についても──》

「ロクゴーッッッ！　居るんでしょうロクゴー！　こんな卑劣な罠を仕掛けて恥ずかしくないの!?　ドアを開けないと蹴破るわよ！」

事務所の外から罵声が響く。

ドアの前に待機した俺はカメラの位置を確認すると、裏口からロゼを使いに出した。

「警察が駆け付けるまで五分ほどだ。いい絵を頼むぞ、カメラマン」

アリスの言葉に親指を立てて頷くのは、以前アデリーに同行していたカメラマン。

フリーランスだというこの男は、アリスが大金を積んで雇(やと)い入れた。
「あくまでも出て来ないというのなら、私は正義を行使する！　必ッ殺ッッッッ！」
全身に力を込めて、衝撃(しょうげき)に備え構えを取る。
「鈍色(にびいろ)の雷鳴(らいめい)――ッッッッ！」
「ぐはあッ！」
入口のドアが蹴破られると同時、構えていた両腕(りょううで)に衝撃が走り吹(ふ)き飛(と)ばされた。
「おい六号、大丈夫(だいじょうぶ)か！　傷は深いぞ、しっかりしろ！」
「ぐっ……！　アリス、すまねえ……。俺はどうやらここまでだ……。卑劣なマディア陣営になんて、負けるんじゃねえぞ……」
「!???!?!???!?!?」

俺とアリスの小芝居に、ドアを蹴破ったままの体勢でアデリーがパニックに陥っている。

そして、器物損壊と傷害事件の犯行現場を──

「ままま、待って、止めて撮らないで!? これはわざとじゃなくて事故……」

躍動感溢れるカメラワークにアデリーが慌てて釈明するが、スクープ映像に興奮しているカメラマンの耳には届かない。

と、その時だった。

「お巡りさん、こっちです!」

「おい、そこで何をやっている! ……って、またマディア陣営の関係者か!」

「!?」
タイミング良く到着したお巡りさんに、アデリーが何かに気付き絶叫した。

「ロクゴ――――ッッッッッ!!」

【国王選挙まで、あと……】

《先日逮捕された、住所不定、職業使徒を自称するアーデルハイト容疑者ですが、マディア王子が関係者である事を認めたようです。当局が容疑者について調べたところ、過去にグレイス王国で問題行動を起こして、何度も拘留されていた事が判明し――》

事務所でニュースを聞きながら、俺は選挙結果が発表されるのを心待ちにしていた。

いしていた

「投票前日に行われたアンケートによる支持率調査では、リディア姫が72%、マディア王子が11%、その他が17%だったとさ」

読み上げられた支持率に事務所の空気が弛緩する。

「これならよっぽどの事が無い限り大丈夫そうだ。しかし今回は思いの外うまくいったな。本当ならこの後ベリアル様の出番が控えてたのに」

相手陣営への妨害工作が予想以上にうまくいき、俺やベリアルの出番が無くなった。

本来であれば、王子の関係者を装った俺が住人を脅し、そこに通り掛かったベリアルが俺を追い払うという計画だった。

王子に票を入れろと住人を脅していた犯罪者を、リディアの関係者が撃

ミミは票をくれそうな住人を脅していた狼藉者をヒーラーズの関係者が撃退したと宣伝するのだ。
「あたしの事なら気にしなくても大丈夫だ。それに、相手陣営への妨害や嫌がらせの数々は、見てて何だか懐かしかったからな。昔、ヒーローが国政に打って出るって聞いてキサラギ総出で妨害したのを覚えてるか？」
「そういやそんな事もありましたね。妨害が予想を超えてうまくいったせいで、調子に乗ったリリス様が本気で立候補して最下位になってましたっけ」
立候補するには供託金という金が要る。
ある程度の票数を得られればこの金は返ってくるのだが、票が足りなかったリリスは供託金を没収され泣き喚いていたのを思い出した。
「でもアレって確か、ベリアル様が改造手術を受ける前の話じゃありませんでしたっけ。改造手術後の記憶しか無いと思ってましたが、結構覚えてるものなんスね」

俺の何となくな問い掛けに、ベリアルは小さく笑い、肩をすくめた。
既に王子陣営は虫の息だ、誰が王になるかは見えている。
勝ちを確信した俺達は、心穏やかに待ち続けた、その結果——
——なぜか、ナディア姫が王に選ばれてた。

幕間④　―彼と仲間の大事な記憶―

「ごめんね、僕とした事が取り乱したよ。それじゃあ、もう少しだけ時間を進めて……いや、この治療（ちりょう）は続けてもいいのかなあ。何か、大変な事になる気がする……」

　そう言いながらリリスが悩（なや）み込む。でも、ここで治療を止められるのは少し困る。

　後少しで、何か大切な事を思い出せそうなのに―

「まあいいや。大変な事になるのはどうせいつもの事だからね。どうせやるならとことんまで行っとこう。薬剤（やくざい）をもうちょっと追加するね」

　―やっぱり治療はここまでにした方がいいのかな……。

「おっと、不安そうにしなくても大丈夫（だいじょうぶ）さ。僕の知能の高さはキミがよく知

ってるだろ?」
　リリスの知能をよく知ってるからこそ、不安になってきたのだけれど……。
「おや？　僕に対して遠慮が無くなってきた頃のゆかりの記憶が戻りつつあるね。それじゃあ次は、楽しかった事を思い出してみようか。キミにとって大事な時間と出来事だ。たとえばほら、僕に関してとか色々あるだろ？」
　何かを期待するかのようにリリスが答えを待っている。
　楽しかった事……。楽しかった事といえば、彼がキサラギに入社してからしばらく経つと段々遠慮が無くなってきて、アスタロトと顔を合わせる度に喧嘩していたっけ。
　間に入って止めようとするも、リリスが余計な事を言って更に喧嘩が過熱したり。
　キサラギはまだ小さな会社で苦労が絶えなかったけど、毎日が楽しかっ

た。
　ああ、リリスの事も思い出した。そう、確かアレは……。
「うん、確かアレは？」
　選挙……。私達が中規模の組織に育った頃、キサラギを脅威に感じたヒーロー達が国政に打って出た事があった。
　私達を法でがんじがらめにして、合法的に力を削ごうとしたのだけど……。
「ああ、そんな事もあったね。キミは僕が提案した選挙運動に抵抗を覚え、なかなか踏ん切りが付かなかったね。そういう甘いところは本当アイツにそっくりだよ」
　そうだった。根が小心者の彼は大きな悪事に手を染められず、よく二人で相談したっけ。

「記憶を失ったからと言って、過去の罪まで無かった事には出来ないよ。さあ、思い出すんだ。キミには一体何が見える？」

　期待に満ちたリリスに向けて、思い出した出来事をそのままに――

「供託金（きょうたくきん）を全部取られた時の、リリスの泣き顔が忘れられない」

「それは忘れていいんだよ！」

最終章

頼れる上司であるために

1

グルネイド近くの森の中。
テントを張り終えた俺は、焚き火に薪を放り込みながらアリスに言った。
「薄々気が付いてはいたけれど、トラ男さんはバカだと思う」
「キサラギにバカ以外の人間がいるとでも思ってんのか。ちなみに自分はアンドロイドだからノーカンだ」
なら俺だって改造人間だからノーカンだ。

それにバカ以外居ないというのは言い過ぎだ、最後の砦（とりで）としてアスタロトが……。

「悪の組織を作って世界征服（せいふく）しようなんて言い出したアスタロト様はバカの筆頭だからな。ちなみにリリス様は二番目にノミネートだ」

「止めろよ、言いたい事を先読みすんな。俺達のリリス様がぶっちぎりで一番だろ」

と、俺とアリスがそんな事を言い合っていると。

「二人ともそんな事言ってる場合ですか！　このメチャクチャな状況（じょうきょう）を、これからどうやって収拾するんですか⁉」

——ノーマークだった第二王女、ナディア姫（ひめ）が王位を得た。

なぜこんな事になったかというと、俺達の悪行が全て明るみに出たからだ。

魔導石強奪の犯人トラ男は、俺達の関係者である事。
グルネイドに手紙を送り、トラ男による魔導石強奪をヒイラギに擦り付けようとした事や、対抗陣営の評判を落とすための自演工作まで、全てをトラ男本人にバラされた。
　なぜそんな事をしてくれたのかというと――
「俺は正直トラ男さんの事を舐めてたよ。にゃんにゃん言いながらロリを愛でるだけの変態だってな。それがまさか、自らを顧みず命懸けでロリっ子を救うだなんてな」
「それに関しては自分のミスだな。トラ男があそこまでやるとは思わなかった。巨大化は追い込まれた怪人がヒーローを道連れにするための切り札だが、使えば寿命を削る大技だ。しかもそこまでやった後、お姫様を女王にす

るためにまさかの自首だ。正直自分もトラ男の事を舐めてたよ、アイツはロリコンの中のロリコンだ」

トラ男はナディアを王にするため、怪人の切り札である巨大化を使い、ミドガルズ山脈に住む最上位ドラゴンから魔導石を強奪。

その後、魔導石をナディアに渡した上で堂々と自首をして、俺達の仲間である事を明かし捕らわれた。

おかげで俺達を引き込んだリディアの支持率は最下位となり、あまりパッとしなかった王子も支持率の回復とまではいかず、そして……。

「まさかラッセルさんまでナディア姫を応援するとは思いませんでしたよ。アレでほとんど決まっちゃいましたもんね」

現在ナディアの身辺はラッセルが守りに就いている。

アイツはトラ男に感化されたのか、率先して選挙活動を手伝っていた。

美少女メイドが幼いナディアを助けている絵面は民衆に受けが良かった

[illegible]
らしい。
　そしてトドメを刺したのは、王子陣営のアデリーが、あの美少女メイドは男の子だと大々的に公表した事だろう。
　それにより、なぜか女性層からの支持率が急上昇しこんな結果になってしまった。
　一応ラッセルもキサラギ関係者のはずなのだが……。
「幼女と美少年メイドの欲張りセットだ、そりゃあ強いさ。民衆からすれば国のトップなんてお飾りなんだ。誰が王位に就いたって日々の暮らしに違いはないからな」
「グ、グレイス王国はまだマシだと思いたいです。ティリス様は色々言われてますけど、何だかんだで国民には人気ですし……」
[illegible]

達観したアリスの言葉にロゼが複雑そうな表情で口籠もっている。
「しかし、トラ男もラッセルも一体何考えてやがるんだ。それに、ナディア姫が庇ったところでトラ男が処刑されるのも時間の問題だろうな。自首したとはいえやらかした事がシャレにならねえ」
「トラ男さんは自業自得だから放置でいいけど、スノウやハイネが捕まってるから帰るわけにもいかないしなぁ……」
「トラ男さんもちゃんと連れて帰ってあげましょうよ……」
アリスが珍しく悩み込むぐらいに今の状況は詰んでいた。
それに、俺達がこんな所でキャンプの用意をしているのにも理由がある。
早速ロゼが何かに気付き、茂みの方に視線を向けた。
ガサガサと音が鳴り、茂みを掻き分け現れたのは……。
「野生の悪行ポイントをゲットしたぞ！　おい六号、早速ポイントに換えてくれ！　他にも沢山いたけれど、取りあえず持てるだけ持って来た！」

くれ　何も派手にしなければ取りあえず捕まえるかな捕まえて来な」
「捕虜を悪行ポイント呼ばわりするのは止めましょうよ。さすがの俺も引くっスよ」
どちらの派閥かは知らないが、ベリアルが四人の追っ手を捕獲してきた。
俺達は今、ブチ切れた両陣営に追っ手を放たれ、こうして森に潜伏している。
普通に考えれば国に追われるという危機的状況なのだが、この人にとっては両派閥の兵士達もボーナスポイントにしか見えていないのだろう。
というかポイントに換えてくれって、ワイヤーでグルグル巻きにされたコイツらを拷問でもしろってか。
——と、アリスがベリアルに向けて頭を下げた。
「ベリアル様、わざわざ地球から援軍に来てもらっておいて申し訳ねえ。今回

の諸々は自分のミスだ」
「ア、アリスさん？」
いつになく殊勝なアリスの姿にロゼが思わず動揺する。
「こんなメチャクチャな流れになるのはさすがに予想外だった。こうなったら責任取って、グルネイドの中心部で自爆してくる」
「おいやめろ、行くんじゃない。自爆は禁止って言っただろうが」
行かせまいとアリスの襟首を掴んで引き留めていると、ベリアルがクスッと小さく笑い。
「アリスは賢いから難しく考え過ぎなんだ。もっと簡単で良いんだよ」
そう言ってアリスの頭をかいぐりながら、気楽そうな笑みを浮かべた。
現状をちっとも理解してないベリアルを、アリスは頭を撫でられるがままに見上げると。

「……そうは言ってもベリアル様、今の状況はメチャクチャだ。トラ男やラッセルは何を考えているのか分からねえし、留置場に居たスノウとハイネも人質として捕らわれてるだろう。いがみ合っていた王子と王女も今だけは手を結ぶはずだ。つまりキサラギは、トラ男の裏切りに加えて人質も取られ、法制機関ヒイラギとグルネイドを相手取る事に」

そこまで言い掛けたアリスに向けて、ベリアルは片手を突き出し遮った。

そして、全て分かっているとばかりに頷くと、

「それがどうした。全部まとめてぶっ飛ばせばいい」

……………………。

「おい六号、ベリアル様の説得を手伝ってくれ。現在のこんがらがった知恵の輪みたいな状況は、説明するのに時間が掛かる」

俺は、自信に満ちたベリアルと困惑するアリスを見ながら気が付いた。
「そうだよ、ベリアル様の言う通りだ。俺達は何をチマチマ悩んでいたんだ」
「……六号？」
　俺が止めると思っていたのかアリスが不思議そうにこちらを見上げる。
「ベリアル様の言う通り、俺達は難しく考え過ぎなんだ。そもそもトラ男さんの悪事を隠そうとしていたのはどうしてだ？　この国と戦争するのはまだ早いからだ。法制機関ヒイラギと揉めるのを避けてたのもどうしてだ？　あいつらと事を構えるのは早いからだ」

　それを聞いたアリスは未だベリアルにかいぐられながら、ほんの一瞬だけ悩み込むと。
「……ベリアル様がいる今なら、二ヶ国を相手にしても互角に渡り合えるって事か。　そうだ、トラ男がキサラギの一員だと自供したから何なん

て事だ……そうだ、ト二身だ？キサラギの一員だと自供したからって何なんだ。全ては自分達の自作自演だとしても何なんだ。自分達は悪の組織だ、開き直ればいいだけだ。それでも向こうがやるって言うなら堂々と受けて立てばいい！」

「おう、俺達はベリアル様を後ろ盾に、強気で交渉に出ればいい。俺達が送り出した戦闘員共も、ベリアル様が暴れた都市を脅して従わせただろ？　ならここは圧迫外交一択だ。そういう事ですよね、ベリアル様！」

さすがは俺達の最高幹部、こんがらがった今の状況も……！

「残念、ハズレ！」

そう言ってケタケタと笑うベリアルに、なんでやねんという想いを抱いていると。

「お前らはまだややこしく考えてるな。キサラギは世界征服を狙う悪の組織だ。なら、敵に対してやる事と言ったら一つだろ？」

黙り込んだ俺達に、ベリアルは楽し気に笑みを浮かべて宣言した。
「侵略だ！」

2

人々が眠い目を擦りながら起き出す頃、グルネイドの街中に盛大な爆音が響いた。
家から飛び出して来た住民達が辺りを見回し騒ぎ出す。
「な、何だ!?　ドラゴンの襲撃か!?」
「この街はミドガルズ山脈に守られてるんだ、ドラゴンが襲ってくるはずがない！」

「でも、この間も宿屋の前で爆発騒ぎがあったらしいぞ？」
「その爆発って、確か赤い髪の女が魔法を使ったって話じゃあ……」
　憶測を立てる住民達が、続いて聞こえてきた声に固まった。
《グルネイド王国の皆さん、おはようございます！　我々は悪の組織、秘密結社キサラギだ！　グルネイド王家の連中に告ぐ！　今から五秒以内に時計塔に来い！　時間内に現れない場合、経過時間一秒毎にこの街の建物を焼いていく！》
「いきなり何て事言うんですか、五秒以内は無茶っスよ！」
　俺は無理難題を吹っかけるベリアルから拡声器を奪い取る。
　――ここは街のド真ん中に立つ時計塔の最上階。
　街に侵入を果たした俺達は、グルネイド王家に対し酷い要求を突き付けた。

てした

「まあ落ち着け、これはリリスに教えて貰った交渉術だ。最初に無茶な要求を突き付けて、その後難易度を落とした本命の要求を出すんだよ」

「なるほど、ちゃんと考えてたんスね。それはすんませんした」

確かに商売なんかでも、最初に高値を吹っ掛けて、その後値下げしてお得感を出すのはよく聞く手法だ。

俺が差し出した拡声器を受け取ると、ベリアルが声を張り上げた。

《とはいえ五秒以内というのは無茶が過ぎた、こちらも少しだけ譲歩してやる！　あと十秒以内に出て来なければ》

ベリアルから再び拡声器を奪い取ると、ふと時計塔の下が騒がしくなった。

アリスと共に下を覗けば——

「ベリアル様、なんかいきなり王族の一人が現れたっス。あと十秒に間に合い

ましたね」
「だろ？　あたしはリリスと違って無理な事は言わないからな」
理不尽さに関してはリリスを超えている時があると思うが黙っておく。
塔の下には、こんな朝早くから俺達の捜索に向かうつもりだったのか、多数の兵を連れたリディアがこちらを睨み上げていた。
「なあ六号、なんか目付きの悪い女があたしを睨んでるんだけど」
「あれはこの国の第一王女、リディア姫っス。睨まれるのはしゃーないっスよ、早朝から国民を叩き起こした挙げ句、国を脅迫してるんですから」
まあその代わり、俺達も悪評をバラ撒くぞと脅されたんだけど。
ふんふんと頷いていたベリアルは拡声器を受け取ると、塔下に向かって呼び掛けた。
《お前がリディアとかいうバカ女か！　今からぶん殴ってやるからこっちに

来い！　さもなくばこの街を焦土にする！》
「こ、この無礼者！　突然現れたかと思ったらいきなり何を言っているの!?　どこの馬の骨とも分からない平民風情が、この私を一体誰だと……」
　ベリアルと言い合いを始めたリディアを横目に、俺はロゼへと合図を送る。
「あのう……最後にもう一度確認しますが本気ですか？　これやっちゃうと、もう後に引けないと思うんですけど……」
「既に後に引けない状況なんだよ。それにベリアル様が言ってたろ？　そいつらは野生の悪行ポイントだって」
　ロゼが引っ張ってきたのは、森で俺達を追い掛けていた捕虜の四人だ。
《あたしの家は古くから代々続く名家だぞ！　こんなしみったれた国の田舎王女が生意気言うな、ぶっ飛ばすぞ！》

「我が国に対しての無礼な物言い、許せないわ！　時計塔の扉を破りなさい！」
ヒートアップしている二人をよそに、俺達は縛り上げた捕虜を窓際へと歩かせた。
ベリアルに対して大声で喚いていたリディアが、捕虜達の顔を見て固まった。
《この連中に見覚えはあるか？　あるなら、そっちの捕虜と交換だ。見覚えがないのであれば、使えないコイツらはここから落とす！》
《悪行ポイントが加算されます》
「さすがは本物の最高幹部だ、リリス様とは気合いが違うぜ」
「なあアリス。命令聞いてるだけの俺にまで悪行ポイント入ってるんだが、本当にベリアル様に任せて良かったのか？」
顔を青ざめさせて口をパクパクさせていたリディアが、両手を上げて訴え

顔を青ざめさせて口をパクパクしていたリディアだが、両手を上げて訴えた。
「こ、こんな街のド真ん中で、本気でそんな事しないわよね？　まずは話し合いましょう。確かにその内二人は私の部下よ。でも」
リディアが何かを言い終わる前に、ベリアルが捕虜の一人の襟首を片手で掴み、塔の窓からぶら下げた。
《聞いたのは見覚えがあるかどうかだけだ！　今から三十分だけ待ってやる。とっととウチの部下を連れて来い！》
《悪行ポイントが加算されます》
「わ、分かったわ！　交換に応じるから、落とそうとするのは止めて！」
多少腹黒くとも根は箱入り王族のリディアは、慌てた様子で自分の兵に指示を出す。

「あの姫さんはまだまだだな。民衆が見ている前だからってのもあるんだろうが、悪党の脅し交渉に応じやがった。これがティリスだったなら、無理矢理に涙の一つでも流しながら、王族として決して悪には屈しませんとか言って見捨てただろう」

「ティ、ティリス様はそんなに酷い人じゃありませんよ多分！」

「本気でそう思うのなら、せめて多分は付けないでやれよ」

と、一人の兵士が城に駆けて行くのを見送っていたリディアがこちらを睨み上げた。

「さあ、これでいいかしら？　満足したならその人を解放してあげなさい。……ちなみに一つ言っておくわ。その四人の内、私の部下は二人だけ。そして、貴方がぶら下げているその人は部下ではないわ。でも、私はこの国の王女として」

[illegible]

《ならコイツは要らないな》
《悪行ポイントが加算されます》
「きゃああああああああああああああああああああああ！」
リディアに最後まで言わせる事なくベリアルが捕虜から手を離す。
猿ぐつわを噛まされワイヤーで拘束されていた捕虜が、目に涙を浮かべて落下した。
リディアが悲鳴を上げる中、拡声器を放り出したベリアルが俺の腰からナイフを奪う。
落下する捕虜に向け、窓から思い切り身を乗り出したベリアルが振り被り――
「きゃああああああああ……ああ……ああああ……っ！」

投げ放たれたナイフは、落下中の捕虜を傷付ける事なく襟首だけを正確に貫通し、石で出来た塔の壁面に突き立った。

　地上スレスレで塔の壁に縫い付けられた捕虜が泡を吹いて気を失う中、悲鳴を上げていたリディアが腰を抜かしてへたり込む。

　それまで殺気立っていた兵達がその離れ技を見て呆然と佇む中、ベリアルは放り出した拡声器を拾い上げると。

《お前の部下はどいつなんだ？　無関係のもう一人も今から解放してやるよ》

「落とさないで普通に返して！　部下じゃなくてもウチの大切な国民だから！　それと、お願いだから最後まで聞いて！」

3

捕虜の引き渡しは街の外で行われる事になった。

ベリアルに散々引っ掻き回されたリディアはこれ以上街の中で交渉するのは避けたかったのだろう、向こうが指定してきたのは崖を背にした荒野だった。

見通しのいいこの場所なら、わざわざ崖に登らない限りは奇襲もされない。

「ベリアル様のおかげでトントン拍子に話が進みましたね。これならスノウさんとハイネさんを取り返す事が出来そうです」

捕虜を拘束しているワイヤーを握り先導しながら、ロゼが感心したようと言ってくる。

さっきのベリアルの行動は、キサラギにとって模範(もはん)的と言えるものではあるが……。

「お前最近、だんだん悪事に抵抗(ていこう)が無くなってきたな。昔出会った時みたいなピュアで良心的なロゼはどこ行ったんだ？　一応言っておくけれど、キサラギの幹部みたいにはなるんじゃないぞ？」

　ロゼに褒(ほ)められ上機嫌(じょうきげん)だったベリアルが、俺の言葉に口を尖(とが)らせ。

「お前らがまずは交渉してくれって頼(たの)むから、ああして対話したんだぞ。あたしとしてはいきなり殴り込みでも良かったんだ」

「アレを交渉って言い張るのはベリアル様かリリス様ぐらいのもんですよ」

「隊長の交渉も大概ですよ？　先日のトラ男さんとの交渉を覚えてます

か？」
――と、街の外で大人しく待っていた俺達の前に、無数の兵士を引き連れながら、怒り心頭な様子のリディアが先頭に立ってやって来た。
最後尾の兵士が握るロープの先には、どこかホッとした表情のハイネと、不機嫌さを隠そうともしないスノウが繋がれている。

捕虜の引き渡しを始めるため、リディアが何かを言おうと咳払いした、その時だった。
「アリス――――！」
縛られていたスノウが突然叫び、その場の皆が押し黙る。
ここ最近ハイネと友情を育んだりしたせいで、騎士の心を取り戻したスノ

ウが私に構うなとでも言うのだろうか。
「私は最後まで黙秘(もくひ)したぞ！　更(さら)には、今日も留置場から出される時、このまま居させろと抵抗したのだ！　黙秘した期間分、報酬(ほうしゅう)が貰える約束を忘れるなよ！」
「……おう、よく頑張(がんば)ってくれたな、ご苦労さん。報酬には色を付けるよ」
この状況ですら報酬の心配をしているスノウに一瞬(いっしゅん)止まったアリスが小さく笑う。
……コイツ、こんなんでも一応俺の部下なんですよ。
「なあ六号。こないだも言ったけど、本当に部下は選べよ？」
「キワモノしかいないキサラギの、最高幹部にだけは言われたくないっス」

と呆気に取られた顔で成り行きを見ていたリディアが、やがて小さく震え出す。
「ど、どこまで私をバカにすれば気が済むの……！　今の状況を理解してる？　キサラギの傭兵が強いという噂は聞いているわ。だからこそ、貴方達を雇ったのだから」
　リディアが怒りを滲ませ言い募る中、足の拘束を解いて捕虜の背中を軽く押すと、俺に背を向けたまま駆けて行った。
　それに合わせ、拘束を解かれたスノウとハイネも兵士達の間を通ってこちらへ向かう。
「でも、貴方達を雇った本当の理由は、我が国の兵士達が魔獣との戦闘経験に乏しいからよ。……グルネイド王国はミドガルズ山脈がもたらす加護により、ドラゴン以外の魔獣が寄り付かない聖なる国よ。つまり、魔獣との戦いに慣れていないだけで、人型の相手に後れは取らないわ！　人質を取

り返した以上……」

「おい」

不穏な事を言い出したリディアの言葉をベリアルは一言で遮ると。

「人質を取り返した以上、もう遠慮する気は無いから覚悟しろよ」

「それは私が言いたかったセリフで……いい加減、私に最後まで言わせなさい！」

――激昂し叫んだその瞬間、リディアの背後に立つ兵士達の足下が噴火したように盛り上がった。

轟音と共に辺り一面が掘り起こされ、高く打ち上げられた兵士達が悲鳴と共に、土砂に交じって降ってくる。

ただの人間が相手という事で、ベリアルも大分手加減したのだろう。

死に到る程の傷は負わせていないと思うのだが、捲れ上がった大地とい

い、死屍累々と横たわる兵士といい、そこに交じって倒れている逃げ遅れたスノウ達といい、一見すると地獄絵図のような有様だ。
兵士達の呻き声がそこかしこから漏れる中、耳を塞いで蹲っていたリディアが恐る恐る振り返ると――
「わ、わあああああああああ！　わた、私の部下が……兵士達が！」
《悪行ポイントが加算されます》
一切の予備動作も無しにベリアルから放たれた、手加減された小規模爆発。

それにより全ての兵士を無力化されたリディアが、理不尽な暴力の前に泣き叫ぶ。

というかベリアルにくっ付いているだけなのに、俺にまで悪行ポイントが加算されるのは主犯みたいに思えてくるので止めて欲しい。

算されるのは[illegible]」と[illegible]

……と、悲嘆（ひたん）にくれたリディアの顔を見たベリアルは、真面目（まじめ）な顔でコクリと頷（うなず）き。

「グルネイド王国のリディアと言ったな。今からお前を一発殴る」

「なぜ!?」

私兵をメチャクチャにされたリディアに、ベリアルが更なる追い討ちを掛（か）けた。

そういえばこの人に、脅し染みた交渉をされたと報告したんだった。

ベリアルはキサラギが舐められるのを嫌うから、思うところがあるのだろう。

アリスとロゼが爆発に巻き込まれた捕虜二人を回収する中、屈（かが）み込んだまま恐怖（きょうふ）で立ち上がれないでいるリディアにベリアルが拳（こぶし）を鳴らしながら

歩みを進める。
そんな狙(ねら)ったかのような絶体絶命のタイミングで、聞き慣れた声が響(ひび)いた。

「そこまでよ！」

まるでヒーローのようなタイミングで崖の上から現れたのは、
「死ねええええええええええええええ！」
「ああああああああああああああああ！」
名乗りを上げる前にベリアルの放った飛び蹴(げ)りで足場を砕(くだ)かれ、崖上から転がり落ちてきたアデリーだった。
岩盤(がんばん)の崖を丸ごと砕くベリアルもメチャクチャだが、あの高さの崖から落

ちて何事も無かったかのように立ち上がるアデリーも大概だ。
本人も、まさか何かを言う前に突然攻撃されるとは思わなかったのだろう。
というかリディアといいアデリーといい、せめて最後までは言わせてあげて欲しい。
受けたダメージは軽いもののまだショックから立ち直れていないのか、アデリーは目を泳がせながら俺に対して指を向けた。
「そ、その……今回被害者である私が、どうしてこんな目に遭わされているのか分からないけれど、そこまでよ！」
白目を剥いているウチの捕虜二人をズルズル引き摺るアリスを横目に、アデリーがこちらのリアクションを待っている。
「いきなり何て事するんですかベリアル様、アイツ大分テンパってますよ。ヒ

ーローが登場した際の見せ場、あと、変身中や感動の場面では攻撃禁止って言われてたでしょう」

「ヒーロー相手じゃないからキサラギの戦闘ルールには違反してないはずだ。でもアイツ、登場するタイミングがヒーローみたいで、なんか攻撃したくなるんだよ」

「ねえお願い、話を聞いて！」

　何とか動揺を振り払ったアデリーがキッとこちらを睨み付け。

「ロクゴー、よくもこれだけの事をやらかしてくれたわね！　貴方には言いたい事が山ほどあるわ！　でも、まずは私にごめんなさいって謝ってよ！　トラ獣人の罪をヒイラギに擦り付けた事を！　あと、相手の足を引っ張るのも選挙の内とは言え、アレは幾ら何でもやり過ぎだと思う！」

　俺はそんなアデリーの罵声を受け、思わずベリアルと顔を見合わせた。

この状況でこちらを糾弾する根性は大したものだが、コイツはこれから

この状況でこちらを糾弾する根性は大したものだが、コイツはこれから自分がどうなるのかちゃんと理解しているのだろうか。
「私に向けてくるその失礼な視線は、バカを見る目ってヤツね。私だって、貴方達を相手に一人で戦いを挑む程無謀じゃないわ」
勝ち誇った顔でそんな事を言ってくるアデリーだが、崖の上でポーズを決めようとして落っこちてきたヤツのセリフとは思えない。
「既にさっきの放送を聞いた王子が兵を率いて向かって来てるわ。私は貴方達の足留めをするため先行してやって来たのよ！」
そんなアデリーの言葉を受けて、俺達は再び顔を見合わせた——
——程なくしてアデリーが言った通り、兵を率いたマディア王子がやって来た。
王子は俺達を見付けるなり、コメカミに青筋を立てながら罵声を浴びせ

る。
「貴様らが散々我が国を引っ掻き回してくれたせいで、最悪の事態になったではないか！　さあ、まずは我が部下を返して貰おう！　その上で、キサラギとかいう傭兵団をヒイラギと共に潰してくれるわ！」
　リディアが率いていた数程ではないが、王子もそれなりの兵を連れていた。
　だが……。
「……ん？　な、何だこの有様は……」
　今頃になって辺りの惨状に気が付いたのか、土砂に埋もれて呻いているのが兵士と分かり、王子が戸惑いを見せ――
「マ、マディア……」
　弱々しく呼び掛けてきたのが誰だか分からず、王子が一瞬眉根を寄せ

る。
「あ、姉上!?　この惨状はどうしたのですか！　姉上の私兵は我が国の正規軍にも劣らない精鋭のはずでは……」
　地面にへたり込み涙目で憔悴していたリディアに、王子がますます困惑を深める中。
「王子様、すいません。ちょっとこっち見てもらってもいいですか？」
　俺が声を掛けてやると、ワイヤーで縛られ、足下に転がされたアデリーが声を上げた。
「わ、私は悪には屈しない！　マディア王子、どうか貴方の正義を貫いてください！」
「き、貴様は……貴様というヤツは……！　姉上をここまで追い込んだだけでは飽き足らず、アーデルハイト殿をこんな姿に……！」

姉とアデリーの姿を見て、これらの全てを俺がやったとでも勘違いしたのだろう、王子が怒りで声を震わせ顔を真っ赤に染め上げた。
というかこの人、リディアとは仲が悪いんじゃなかったか？
「……良いだろう、今回のところは国に帰るのを見逃してやる。その代わり、アーデルハイト殿には指一本触れるんじゃない」
王子はアデリーを人質に取られていると受け取ったのだろうが、そうじゃない。
スノウ達を回収した以上、俺達はもう人質なんて必要としていないのだ。
「いや、コイツが足留めだって言って突っ掛かってきたから縛り上げただけなんですが」
「おう、さっきからうるせえからとっとと持って帰ってくれ」
俺とアリスの言葉を聞いて王子が戸惑いの表情を浮かべながら、

「お前達は一体何がしたいのだ。姉上に味方したかと思えば完膚（かんぷ）なきまでに心をへし折り、我が部下を人質に取ったかと思えばアーデルハイト殿は返すと言う。正直言ってお前達の目的が見えて来ない」

「俺達だって好きでこんな事やってるわけじゃないんだよ。今回の騒（さわ）ぎの原因はウチの怪人（かいじん）、トラ男さんの暴走だからさ」

「おう。お互（たが）いに色々あったが、意識の違（ちが）いってヤツだ。全部水に流せとは言わねえが、魔王国（まおうこく）が滅（ほろ）んだ事でウチとグルネイドは隣国（りんごく）になったんだ。長い時間が掛かるだろうが、何とか妥協（だきょう）点を見付け出すってのはどうだ」

　そんなアリスの提案に、何かを地面に叩（たた）き付けるような音が鳴る。

　音のした方に視線を向けると、どうにか正気を取（と）り戻（もど）したらしいリディアが、手にした扇（おうぎ）を投げ付けていた。

「このまま終わらせるわけにはいかないわ！　なぜなら、私が王になるのだ

から！　妹のナディアは絶対にダメ！　それに、マディアにも任せられない
わ！」
「あ、姉上……？」
突然の豹変ぶりに誰もが唖然と見守る中、注目を集めたリディアは。
「この国の成り立ちは知ってるかしら？　……いえ、誰も知るはずがないでしょうね。魔導石を一体何に使うのかも、その結果何が起こるのかも！」
焦燥に駆られ早口で捲し立てるその姿は、どこか鬼気迫るものを感じさせた。
その迫力に静まり返る中、リディアが悲愴感に満ちた顔で語り始める
――

「かつて、この大地には大量の魔獣達がひしめいていた。なぜなら、この地には他所に比べて水が豊富に溢れていたの。……かつての世界の人々は選択を余儀なくされた。魔獣が集まってくる代わりに水が豊富な水源の近くか、もしくは、比較的魔獣は少なくとも過酷な荒野で生活するかを。本来ならどちらもあり得ない選択よ。でも、太古に残されたアーティファクトがそれを可能に」

《悪行ポイントが加算されます》

　リディア姫がそこまで言い掛け、皆が聞き入っていたその時だった。

　悪行ポイント加算のアナウンスと共に何の前触れもなく大地が捲れ、キサラギ関係者以外の皆が吹き飛ばされる。

　再び降り注ぐ土砂と悲鳴に、ベリアルが悪びれもせずに言い放つ。

「もう難しい話はうんざりなんだ、もっと簡潔に言ってくれ」

「前から思っていたんですか　ベリアル様は堪え性が無さ過ぎっス」

4

スノウとハイネをロゼに任せ、俺達は城へと乗り込んだ。
俺達の後ろには、なぜかアデリーも付いてきている。
コイツ以外の連中は、王族も兵士も全員が当分起きそうにない。
スノウ達を街へと運ぶついでにロゼが役人を呼んでいたので、転がされた兵士達はそっちに丸投げしておいた。
ベリアルにメチャクチャにされた後だ、アデリーもおかしな事はしないと思うが……。
「ねえロクゴー、貴方達は城に乗り込んで一体何をするつもりなの？　目的が悪しきものなら、私としては見逃すわけにいかないのだけれど……」

「今回の騒ぎの黒幕に落とし前を付けさせるんだよ。お前も知ってるトラ獣人だ。結局、あの人が全ての原因だからな」

俺達の先頭を堂々と行くベリアルは、こちらに気付いて武器を構える兵士達を躊躇（ちゅうちょ）無く制圧していく。

次々と斬（き）り掛かっては返り討ちに遭う兵士を見ながら、アデリーが怖々（こわごわ）と。

「……ね、ねえロクゴー。私、今大変な悪事の現場に居る気がするわ」

「お前らだって他人事（ひとごと）じゃないんだ。ここまで来たら逃（に）がさねーぞ」

「というか呼んでもいねえのに付いて来たんだ。トラ男が抵抗（ていこう）したら手伝って貰うからな」

トラ男の強さを知っているアデリーが嫌（いや）そうな顔をするが、持ち前の正義感が勝ったらしく文句も言わず付いてくる。

ナディア姫が居るのは多分恐らく最上階だ。
王様と正義の味方ってものは高い所が好きだと決まっているからだ。
——と、最上階へと差し掛かり、先頭を進んでいたベリアルが歩みを止めた。
見れば、おそらくはこの先に謁見の間があると思わせる豪勢な扉の前に、一人の男が立ちはだかっている。
「おい、邪魔だ。道を開けろ」
ベリアルの警告にも男は全く動じない。
重装鎧を軽々と着こなすその姿と醸し出す雰囲気に、道を塞いだその男は只者ではないと感じられた。

ベリアルには勝てないだろうが、恐らくこの星では上位に位置する存在だ。

「スノウ並みの剣の腕はありそうだ。それにあんな鎧を身に着け動ける程度に体力もある」

「ほう、お前さんがそこまで評価するとは中々だな。面白いものが見られそうだ」

俺とアリスのやり取りに、アデリーがコクリと頷いた。

「あの人はこの国一の騎士にして、私ですら一目置く本物よ。多分貴方達も名前ぐらいは知っているはず。あの方の名は」

立ちはだかっていた男はベリアルに無言で殴られ吹き飛ばされた。

壁に激突したまま動かなくなった男をアリスが見下ろし。

「お前さんが一目置く、本物の名前を教えてくれよ」

「貴方の相棒だって高く評価していたじゃない！　あの人、私と試合をした時は互角の勝負だったのよ⁉　ほ、ほら、ベリアルさんに置いてかれるわよ！」

　アデリーが慌てて言い募る中、ベリアルが扉を開けた――！

「トラさん、あーん」

「おっと、俺の口はプリン箱じゃないからそんなに何個も入らないにゃー。代わりにラッセルにゃんに分けてあげるにゃん」

　煌びやかな王座が鎮座する部屋の中で豪華な絨毯に寝転がり、ラッセルに膝枕されたトラ男が、幼女にプリンが載ったスプーンを差し出されていた。

「……まあプリンは嫌いじゃないけどさ。言っとくけど、ボクは自分で食べられるからね」

そう言って幼女に手を差し出すラッセルは、ふと俺達の方に視線を向けて固まった。

突然フリーズしたラッセルに、トラ男も視線の先を追って固まった。

扉の前で呆然と佇む俺達とトラ男を交互に見ながら、幼女がおずおずとこちらを見上げ。

「こんにちは……」

「やあお嬢ちゃん、こんにちは。お兄さん達はトラさんに用があるから、お嬢ちゃんはこのお姉さんと遊んでいようね」

「えっ、わ、私!?　ああ、ええと、分かったわ。正義の味方は子供の味方よ。私

の多彩な決めポーズを教えてあげるね」
　幼女を押し付けられたアデリーが一瞬焦るも、空気を読んだらしく快諾する。
　トラ男への懐き具合から見てこの幼女がナディアなのだろう。
　アデリーに手を引かれ、何度もトラ男を振り返りながらナディアが部屋を出て行った。
　扉が閉められたのを確認すると、ベリアルがふうと息を吐き。
「さて」
「死ぬ前に一つだけ、心残りがあるんですがダメですか？」

語尾へにゃんも付ける事なくトラ男が正座し頭を下げる。

どうやら覚悟を決めたらしいトラ男に、ベリアルが恩情だとばかりに頷いた。

「いいだろう、言ってみろ」

「俺が死ぬとナディアの身が危険に晒されます。あの子を保護して貰えませんか？」

こんな時ですらロリっ子の身を案じるトラ男に、ラッセルが慌てて声を上げた。

「ちょ、ちょっと、いきなり何だよ！　おいトラ男、死ぬって一体どういう事だよ！」

ラッセルとは初対面のベリアルが、不思議そうに首を傾げた。
「ベリアル様は初対面でしたね。コイツは女装が趣味のラッセルです」
「ああ、リリスにちんこ見られたヤツか。趣味にとやかく言わないが、あたしにまでちんこ見せ付けるなよ？」
「いきなり何て事言ってくれるんだ！　女装はボクの趣味じゃないし、好きで見られたわけでもないよ！　……あ、あれ？　何だか震えが止まらない……」
　本能的にベリアルを危険視しているのかラッセルが小さく震え出す。
　それでもトラ男の前に留まって必死に訴えるラッセルに、ベリアルが突然激昂した。
「言い訳はみっともないぞ、趣味でもないのにそんな格好するわけないだ

ろ！　あたしはどんな性癖でも差別しないから、もっと自分に胸を張れ！」
「ち、違……！　本当にボクの趣味じゃ……」
　なおも反論しようとしたラッセルのスカートを、ベリアルが勢いよく捲り上げた。
「お前、こんなショーツ穿いといて趣味じゃないは通らないぞ。これ以上無理して強がるな。大丈夫だ、ちゃんと似合ってるし可愛いから自信を持て」
「全く話を聞いてくれない……」
　ベリアルによしよしと頭を撫でられながら、スカートの端を握り締めたラッセルが涙目で俯いている。
「今、ベリアル様はどんな性癖でも差別しないって言ったにゃあ」
　と、正座し俯いていたトラ男が顔を上げた。
「……言ってない」

女装させた子供に膝枕をさせ幼女にプリン食わせて貰っていた変態は、どうやら起死回生の光を見出したらしい。
その変態は素早く立ち上がるとベリアルに指を突き付け逆ギレした。
「キサラギの最高幹部が前言引っ繰り返すのは卑怯だにゃー！　ロリコンだって生きてるんだぞ、ちょっと幼女にプリン食わせて貰ったからって、処刑される程の罪なのかよ！」
「バカッ、お前は幼女を攫っただろうが！　最強の怪人のお前だから戦闘員の切り札として送ったのに、何で一番問題を起こしてやがる！」
喧嘩を始めた二人に怯え、ラッセルが震えながらこちらを見てくる。
多分止めて欲しいのだろうが、最強の女幹部と最強の怪人なんて、平の戦闘員にどうにか出来るわけがない。
と、逆ギレ気味の[illegible]男がラッセルの肩を抱き寄せて、ベリアルを煽るよ

と、迎えし気味のトニ男たラッセルの肩を抱き寄せてベリアルを煽るよ
うに舌を出す。
「それにベリアル様も、さっきラッセルにゃんのスカート捲ったにゃん。キサラギに送る報告書に、ベリアル様が男の娘のスカート捲ってパンツ覗いたって書いてやるにゃー」
…………。
「お前、証拠隠滅って言葉を知ってるか？　いつからあたしに勝てると錯覚したんだ？」
「勝てるだなんて思ってないにゃあ。でも俺なら、ベリアル様に殺される前にキサラギに色々送り付けるぐらいは出来るにゃー」
対峙したまま互いに隙を覗い始めた二人をよそに、この部屋に大勢の人が近付いてくる音に気が付いた。

「この部屋に誰か向かって来てますよ。二人とも一旦休戦にしませんか？」
「近付いてくる音には気が付いてるにゃん。聞こえてくる音からして人数は十人から十五人ってところで、多分全員武装してるにゃー」
「人数は十四人、一人だけ武器を持ってない。リディアって女が兵を連れて帰って来たな」
「そんな事も分かんねーのか、バーカバーカ！」
…………………。
「最高幹部なんてやってるクセに、相変わらず大人げないにゃー！」
この二人の武闘派は互いに最強の名を冠しているからか、たまにこうして面倒臭い。
「大体お前、何でこんなバカな事やったんだよ！　子供に対する性犯罪は死刑だって知ってただろうが！」

「それについては説明しようとしたのに、あんた俺の話を聞こうともしなかっただろ！　あと、誓(ちか)って言うが俺は絶対に手は出してねえ！　にゃん！」
「そろそろ部屋に押し入ってくるぞ！　あんたらこんな時ぐらい仲良くしろよ！」
俺が二人を怒鳴(どな)ると同時に部屋の扉が開け放たれる。
ベリアルが予想していたように、押し入ってきたのは兵を連れたリディアだった。
室内をザッと見回したリディアは、何かに気付いて声を上げる。
「ナディアはどこ!?　絶対に傷付けたりしないから、あの子の居場所を教えなさい！」
「教えたとしてどうするつもりにゃ。王座を寄越(よこ)せって迫(せま)るんだろうにゃー」

突っ込んでくるトラ男をリディアはキッと睨み付け

「そうよ、決まっているじゃない！　ナディアでもマディアでもない、この私が王にならないといけないの！　私が王になってもすぐに弟に代わるから、部外者はもう黙ってて！」

切羽詰まったリディアの叫びに、アリスが違和感を覚えたようだ。

「すぐに弟に代わるってのはどういうこった。お前さんは何のために王になるんだ？」

アリスの冷静な問い掛けにグッと息を呑むと、感情的だったリディアは後ろにいた兵士を振り返った。

「……貴方達は部屋から出て行きなさい。この方達に説明するわ」

一人には出来ないと反対する兵士達を、半ば強引に外へと押しやると、キサラギ関係者のみとなった部屋の中、リディアは焦燥しきった表情で。

「貴方達には、今度こそグルネイド王国の成り立ちを聞いて貰うわよ」
掠(かす)れた声で呟(つぶや)くと、儚(はかな)げに笑い掛けてきた。

5

リディアから説明を受けた、アリスが言った。
「この国は代々アーティファクトで魔獣(まじゅう)を寄せ付けなくしていたんだが、その燃料に魔導石(まどうせき)を使うんだと。石一つでアーティファクトを動かせる期間は約百年。で、そろそろ魔導石交換(こうかん)の時期になったんだが、石を交換するのは王様しか許されていない。だが、どうしても自分で石を交換したかったリディア姫は、王になりたいと駄々(だだ)を捏(こ)ねていたんだよ」

「要約すればその通りだけど、それだと私がバカっぽいからもうちょっとこう……」

十分近く続いたリディアの話を、アリスが二十秒で翻訳した。

「そんなに石の交換がしたいならそれを素直に言えばいいじゃん。そうすりゃあんたの弟だって話ぐらいは聞いただろうに」

疑問に思って尋ねるも、リディアは寂しそうに笑うのみ。

「石を交換したヤツは高確率で死ぬという、ビックリアーティファクトなんだそうだ。それで本来は、年老いた国王が最後の務めとして石の交換を行っていたらしいぞ」

「電池交換したら死ぬって一体どんな欠陥品だよ。漏電でもしてんのか？」

「い、いいえ、それについてはさっき散々説明したけど……」

…………ん？

「それってつまり、弟や妹を死なせたくないから自分が王になって、石の交換を終えて死ぬって言ってんの？」
「ずっとそういう説明をしてきたつもりなのだけど……」
　それを聞いたキサラギ関係者達が揃いも揃ってニヤニヤし出した。
「ははーん、お前ツンデレか。もうツンデレはあんまり流行んないぞ」
「言ってる意味が分からないけど、バカにされている事だけは理解出来たわ！」
　しかし、そうなってくると話が変わるな。
「トラ男さんどうします？　ナディアにゃんをこのまま王様に就けとくんですか？」
「そんなわけにいくかにゃん。石を交換したいなら、リディアにゃんに任せるにゃん」
　ロリ以外には本当に厳しいトラ男。

――と、ベリアルが謁見の間の奥に並ぶ王座を見付けた。
子供のように目を輝かせたベリアルは、上機嫌で王座へ向かう。
この人はリディアの説明が始まった時点で早々に理解を諦め、一応あとで聞く気はあるのか、自分の代わりにICレコーダーをその場に置いていた。
本来であればこの国の王しか座る事の出来ない椅子に、ベリアルが躊躇無く腰掛けた。
「ちょ、ちょっと！　貴方どこに座っているのよ！」
王様がいれば無礼討ちされてもおかしくない行為に、リディアが驚き戸惑っている。
いや本当、この人たまにビックリする事やらかすな。
「ベリアル様、ダメですよ。そこは偉い人が座る場所っス」

「あたしはキサラギの偉い人だぞ。文句があるなら力尽くで下ろしてみろ」
いや、確かに王様になりたいみたいな事は言ってたが、自由過ぎるにも程があるだろ。
「トラ男さん、協力をお願いします。俺が右から押さえるんで、トラ男さんは左の方から」
「分かったにゃあ。この非常時に、ベリアル様は奔放(ほんぽう)すぎだにゃん」
王座から引き摺(ず)り下ろそうと近寄る俺達に、ベリアルがふんぞり返って命令した。
「そこの生意気な顔した平戦闘員よ。三秒で肉まんを献上(けんじょう)しなければ死刑とする」
「この人なんて事言い出すんだ。ほら、こんな所をお堅(かた)い兵士に見られたら大変ですよ」

「やっぱデカい女は最低にゃん。やっぱりロリが最高だにゃん」
王様ごっこを始めたベリアルは、トラ男に指を向けると、
「今、危ない発言したそこの獣よ。何か気持ち悪いから死刑とする」
「上等だにゃあ、六号と二人掛かりなら俺達だってやり合えるにゃあ！」
やりたい放題を始めたベリアルに、アリスが呆れたような表情で。
「おい、正気かベリアル様。それはさすがに見過ごせねえぞ」
「おっ、アリスもベリアル様に言ってやれ。本音を言わせて貰うなら、俺だって王様椅子に座りたいんだ。一人だけワガママ言うのは赦されねえぞ」
「アリスにゃんの正論で、ベリアル様が泣くまで論破を頼むにゃん！」
と、なぜかアリスは、囃し立てる俺達にも呆れたような視線を向けながら。
「ベリアル様は遊んでるわけじゃねえ。自分が王様になって石を交換するっ

て言ってるんだ。キサラギから借り受けた大事な幹部に、そんな危険な事は許可出来ねえよ」
「「「えっ」」」
　アリスが放った意外な言葉にその場の皆(みんな)が声を上げる。
「……今、ベリアル様もビックリしてませんでした？」
「してない。……い、いや、うん、本当はビックリした。ほ、ほら、アリスがあたしのやりたい事を理解していたからさ」
　ああ、コレは予想外の展開に転がって本気で困った時の顔だ。
　仕方ない、俺がフォローを……。
「ベリアル様、本気ですかい？　あんたは何かとデカくて理不尽(りふじん)で、デカい上に面倒(めんどう)な上司ですが、さすがにコイツはいけませんぜ」
「そ、そうだよ、ベリアル様の事はよく知らないけど、キサラギのトップに立つ

人なんでしょ？　こんな危険な事は、この国の人間にやらせればいいじゃん」

　フォローしようとした俺より先にトラ男やラッセルがベリアルの身を案じるが、責任感の強いこの人にはそれらの言葉がとても効く。

——と、それまで黙っていたリディアが小さく苦笑を浮かべると、

「これは王家の者が担う責務です。ですからその気持ちだけで、もう十分。ああ、代わりにお願い事が一つだけ。……どうかこの事は、弟妹達には内密に」

　そんな、ベリアルに一番効きそうな言葉を伝えた。

――ミドガルズ山脈。
　グルネイド王国の傍（そば）に広がる全長数キロに及（およ）ぶその山脈に、問題のアーティファクトが隠（かく）されていた。
「無理だにゃん無理だにゃん無理だにゃん！　そんなの絶対無理だにゃん!!」
「にゃんにゃんうるさいぞトラ男！　キサラギの怪人（かいじん）が無理って言葉を口にするな！」
　ミドガルズ山脈の前にやって来た俺達は、命が賭（か）かっているのにさすがにふざけていられないと、今度こそ詳（くわ）しい説明を受けたのだが――
「全く、何が石を交換したら死ぬ、だ！　こういう事は早く言え！」
「い、いえ、私は何度も説明しようと……も、もういいです……」
　説明を終えたリディアがグッタリしているが、ベリアルの方は生き生きし

ていた。
　と、さっきまでにゃんにゃん騒いでいたトラ男が真顔になって申し出る。
「もうこの国の事は諦めて、上の姉兄のどっちかを王にするにゃん」
「この獣は妹にしか心を許さないの？　私、結構妹と似てると思うのだけど」
　トラ男の申し出にリディアがむくれるが、
「確かに似てるとは思うにゃあ。でも俺はババアに興味が無いにゃん」
「だ、誰がババアよ無礼者！　私はまだ十九歳よ!?　さあ、もう一度言ってみなさい！」
「確かに似てるとは思うにゃあ。でも俺はババアに興味が無いにゃん」
　律儀に同じ事を言ったトラ男の腹をリディアが何度も殴り付ける中、測定器を使って何かを調べていたらしいアリスが宣言した。

「間違いない。姫さんの言う通りこの山脈は生きている。巨大な生体反応の塊だ」

グルネイド王国でドラゴン信仰が盛んな事には理由があった。
グルネイド王国が魔獣達を寄せ付けない事にも理由があった。
始原龍ミドガルズの傍には魔獣が寄って来ない事を利用して、この巨大龍を眠らせるアーティファクトを使用したのだ。

その結果、ドラゴン以外の魔獣を退ける聖地が生まれ、そこに小さな村が作られて、やがて街へと育ち、国が起こった。
石を交換すると死ぬというのも、交換の際に一瞬だけ目覚めたミドガルズに殺されるというのが理由だった。
アーティファクトの石を交換するのは、王にしか所持する事が許されない魔導具があれば、血が繋がっていなくても可能らしい。

ガバガバなアーティファクトの使用条件に、アリスが救いようのない犯罪者を一時的に王にしようと言い出したのだが——
「おいリディア、あとは王様のあたしに任せとけ。デカいだけのトカゲを狩るのは得意なんだ。なにせこの星に来てからは、トカゲを沢山狩ったからな」
「トカゲと言うと、バクレットトカゲの事ですか？　あれと始原龍を比べては……」
　レッサードラゴンをトカゲと言い張るベリアルに、リディアは不安を隠せない。
　悪いようにはしないからとリディアを説得し、一時的な王になったベリアルは先ほどから上機嫌だ。
　そんなリディアとベリアルを見て、騒いでいたトラ男が肩を落とすと、
「分かったにゃあ……。もう覚悟を決めるにゃん。俺が貯めた悪行ポイント、

全部大放出する気で援護するにゃあ」

…………。

「お前は怪人で幹部だろ。あたしと一緒に最前線だぞ」

「嫌だにゃん嫌だにゃん嫌だにゃん嫌だにゃん！」

　再びにゃんにゃん鳴き出したトラ男を見てリディアが困惑する。

「あの、最前線とはどういう事？　ベリアル様は私の代わりに、石を交換してくれるのかと思っていたのだけど……」

　ちゃんと説明を聞いたベリアルは、リディアに、全部任せろと男前な宣言をした。

　リディアはそれを、ベリアルが石の交換作業を行うと受け取っていたらしい。

　だが、それだけであればトラ男がこんなに騒ぐわけがなく……。

——と、その時だった。
「隊長、言われた通り呼んで来ましたよ！」
手を振りながらミドガルズ山脈へやって来たのは、ナディアを背負ったロゼとラッセル。
「一体どうしたナディアにゃん。ここは危ないから帰るにゃん」
「トカゲのお姉ちゃんが、トラさんのカッコイイところが見れるって教えてくれたの」
それを聞いたトラさんが、トカゲのお姉ちゃんに命令を出した俺を睨んできた。
「ほらトラさん、ナディアにゃんが見てますよ。ここはカッコイイところをお願いします」
「全てが終わったら覚えてろよ。アスタロト様への報告書に色々書いてやるからにゃ」

らにゃー」
　トラさんはそう言っていきり立つが、その分野では俺が有利だ。
「今回のトラ男さんの所業を報告したら制裁部隊が送られてきますよ」
「マブダチの六号に、俺が本気でそんな事をするわけがねえにゃー。アジト街に戻ったら良い店に連れてってやるにゃん」
　俺のマブダチはにゃんにゃん言いながら誤魔化すように肩を組む。
「いつまで遊んでんだトラ男！　いい加減覚悟を決めろ！」
　ベリアルの叱咤とナディアの期待を受けて、トラ男が顔を上げた。
「しょうがないにゃあ。怪人の誇りに賭けて、始原龍だろうがやってやるにゃん！」
　やる気を見せるトラ男に、だがアリスが首を振る。

「ベリアル様、こりゃ無理だ。コイツの質量を調べてみたが、核でも使わないとどうにもならねえ。山脈一つを消し飛ばすなんて、大量の兵器群を用意しないと不可能だ。しかも今のベリアル様は転送端末も持ってない。武器の取り寄せも出来ないだろ?」

アリスが言うように、本当に目の前の山脈規模の相手だとするならそりゃ無理だ。

だがここには、キサラギで一番強く、諦めない上司がいる。

「いいかアリス、キサラギの人間が無理って言葉を口にするな」

ベリアルはそう言って腕を組み、ミドガルズ山脈を仁王立ちで見上げると、アーティファクトと思われる野ざらしにされた箱形の機械の前に出る。

ミドガルズ山脈をよく注意して観察すると、確かに龍の面影が見受けられた。

つまり全長数キロにも及ぶ巨大生物が今から本当に動くのだ。

「怪人トラ男に命令だ！　始原龍ミドガルズが目覚めたら、三分だけ時間を稼げ！」

「無理だにゃー」

　あっさり否定したトラ男がベリアルに睨まれた。

「もう一度無理って言ったらぶっ飛ばすからな」

「巨大化しないと無理だにゃん」

　有言実行とばかりにトラ男がぶん殴られた。

「コイツ、本当に殴りやがった！　〝巨大化しないと〟って言ってるだろ、あんた理不尽が過ぎるにゃん！」

「いや、だってお前ら怪人は、瀕死にならないと巨大化を使えないだろ？」

　どうやら今のはベリアル的に、巨大化を手伝おうとしたらしい。

思わず無言になったトラ男は、せめてもの抵抗とばかりに呟いた。
「激しく寿命（じゅみょう）を削（けず）る巨大化は、生涯（しょうがい）において使っていいのは一度きりって言われているのに、既（すで）に二回も巨大化してるにゃん……」
「そうか。いいからやれ」
「理不尽！」
　トラ男を無理矢理黙（だま）らせたベリアルは、後方に佇（たたず）む俺に向け、
「戦闘（せんとう）員六号！　キサラギ本部に、ありったけのニトロを寄越（よこ）せってメモを送れ！」
「マジッスか。そんなに大量にニトロを打ったら、後でどうなっても知らんッスよ」
　部下のトラ男に無茶をやらせた分、自分も体を張るのがベリアルらしい。
　両手を頭の上に組んだベリアルが、思い切り背筋を伸（の）ばし柔軟（じゅうなん）を始めた。

た
キサラギにメモ書きを送りながら、昔、体の硬い俺に付き合って、朝までストレッチを手伝ってくれたのを思い出す。
あの頃のベリアルも今のベリアルも、やはり根っこのところは変わっていない。
改造手術を受ける前は、あれだけ大人しくオドオドしていたこの人は、
「アリス！　あたしに万が一の事があったなら、キサラギ本社に事情を説明しろ！　今まで貯めたあたしの悪行ポイントが五十万ほどあったはずだ。あたしの最後の命令だと言って、特例措置でポイントの移行を許可してもらえ。始原龍が本格的に活動するまでに、それを全部使ってどうにかしろ！」
手術を受けてから、誰よりも仲間を守ろうとするこの人は、
「五十万ポイントって正気かよ、ベリアル様は何やったんだ。いや、ポイントがそれだけあって手段を選ばなければあの龍も　どうにか　なるか？

これならば、手段を選ばなければあの龍も……ど、どうにか……な、な
なるかなあ……？」
知り合って間もない、それも暫定的に敵国だった国のお姫様のために、しかも勝ったところで得にもならない、挑む事自体が無謀としか思えない化け物を、今から本気で倒す気なのだ。
「あ、あの……まさかとは思うけど、ミドガルズを倒す気なの？　あちこちで神格化されている化け物で、一旦目覚めれば世界を滅ぼすと言われている、ミドガルズを？」
未だ信じられない思いで見上げるリディアの頭に、ベリアルがぽんと手を乗せる。
「そうすればお前はもちろんその子孫だって、今後は命懸けで石の交換なんてしなくて済むんだろ？」
そう言って柔らかな笑みを浮かべると、リディアが顔を赤くして棒立ちに

なった。
やっぱり記憶を失っても、根っこのところは変わっていない。

どうしようもなくお人好しで、世が平和だったならきっと穏やかに暮らしていたはずのお嬢様は、リディアに背を向け声を張り上げた。
「アーティファクトから魔導石を外したら、怪人ロリ男は前に出ろ！　だがその前に、今回お前がやらかした罪状を、全部この場で並べ上げてみろ！」
「本来の任務であるアジト防衛を放り出し、未成年の王女誘拐に国宝強奪！　森へ侵入してくる騎士団を襲って怪我を負わせ、数々の命令違反を行いアリス達の侵略任務の妨害をし、敵性国家を増やしましたにゃん！」
こうして罪状を並べられると、この人本当にとんでもないな。
今回の騒ぎの原因は全部この人のせいと言っても過言じゃない。

「本来なら処刑が妥当なところだが、無事に生き残ったなら今回のやらかしは不問にしてやる！　お前の後ろには大好きなロリがいるぞ。たとえ死んでも下がるなよ！」

「理不尽な暴力上司のくせに、戦う時だけはやる気にさせるのが上手いにゃあ」

　アーティファクトに嵌められていた魔導石が、ベリアルの手によって抜き取られた。

　その場の皆が見守る中、山脈下方に巨大な何かが開かれる。

　ギョロリと動いたところから、それはミドガルズの眼が開けられたのだろう。

　アーティファクトの前に立つベリアルが、その眼に見詰められただけでフラ

ついた。
それを遠巻きに見ていたロゼが必死に叫ぶ。
「ベリアル様、その眼は恐らく邪眼です！　弱い人なら一睨みされただけで死んじゃうので、気を付けてください！」
そんな中二病感染者の言葉を聞いて、ベリアルを庇うようにトラ男が前に出た。
ミドガルズが覚醒を始めたのか大地が微かに震え出す。
山脈そのものが生物という規格外の化け物に、地球出身の怪物二人が立ちはだかった。
そんな二人の背中に向けて、ラッセルが憧れのヒーローを見る目で呼び掛ける。
「負けるんじゃないぞトラ男！　お前は最強の怪人なんだろ！」

「トラ男さん！　ベリアル様！　いざって時は呼んでください！　多分どうにか頑張って、二秒ぐらいなら持ち堪えますから！」

　絶対に持ち堪えられないと思うが、二人に魅せられたロゼが拳を握って声援を飛ばした。

　立っていられない程に大地が震え、妹の手を握ったリディアが祈るように膝を突く。

「超巨大敵性生物、始原龍ミドガルズ。コイツを倒してサンプルを地球に送れば、莫大な利益になるぞ！」

　アンドロイドのアリスでさえもが熱に中てられたのかやる気を煽る。

「ベリアル様、ニトロが来ますよ！　後の事は任せます！」

　トラ男の後ろで腕を組んでいたベリアルは、転送されたニトロを躊躇無く首に打ち込む。

「トラさん、負けるなー！」

皆の熱気で何かを察したのか、ナディアが声を張り上げた。

トラ男の広い背中がピクリと震え、ミドガルズ山脈がゆっくりと動き出す。

始原龍がブルリと身を震わせると、体に張り付いていた岩盤（がんばん）が雪崩（なだれ）のように辺りに飛び散り、それらは全てベリアルが放った大爆発（ばくはつ）で粉々に打（う）ち砕（くだ）かれて――！

「秘密結社キサラギ幹部、密林の王者トラ男！　ロリっ子達の声援があれば、ドラゴンなんて怖（こわ）くねえにゃー！」

「秘密結社キサラギ最高幹部、業火のベリアルが遠い星から来てやったぞ！　敵性生物を狩（か）り尽（つ）くし、この星を侵略だ！」

火山が噴火するような轟音と共に、巨大な山脈が体に降り積もった土砂を撥ね除け、その身を起こし咆哮を上げた――!

――時間にして、戦ったと言えるのはたった三分ほど。

だが……。

「何もかもが吹っ飛んじゃいましたねぇ……」

呆然とロゼが呟くが、誰もそれに答えない。

いや、誰も答えられないとでも言うべきか。

「自分の想像以上だったな。まさかここまでとは思わなかったよ」

そう言ってようやく同意を見せたのは、俺の後ろに隠れていたおかげで、泥汚れ一つ無いアリスのみ。

想像以上とは、ミドガルズという伝説の化け物の事を意味しているのか、それすらも倒してしまったベリアルの戦闘力の事なのか、どっちなのだろう。

「それよりお前、何かあるたびに俺を盾にするのは止めろよな」

「つれない事言うなよ相棒。自分がダメージ受けたなら辺り一面大惨事だぞ？」

アリスがそう言って泥塗れになった俺をかいがいしくタオルで拭いてくれるが、こんな事ぐらいじゃ誤魔化されないぞ。

改めて辺りを見回すも、始原龍ミドガルズが暴れたおかげで何も無い。まばらに生えていた木々も小さめの山も何もかも、全てが吹き飛ばされていた。

そして、広大な更地となった空間にミドガルズがその巨体を横たえており、動かなくなった事を確認したリディアが、呆然とそれを見上げている。

と、未だ信じられない思いでいる俺に向け、骨でも折れたのか右腕をダラリと下げたまま、ドロドロになったベリアルが言ってきた。

「六号、風呂を用意しろ！」

こんな大自然のど真ん中で無茶を言ってくる理不尽上司に、俺は用意しておいた濡れタオルを渡してやる。

「それはアジトに帰ってからでお願いします。こんな所で風呂に入ったらもれなく俺が覗きますよ。何なら一緒に入るまであるかもしれません」

「また一つ報告書に書く事が増えたな。アスタロトに怒られろ」

ベリアルの折れた腕にアリスが取り付き治療用ナノマシンを打ち込む中、そんな軽口を叩き合う俺達の傍では、瀕死になったトラ男が二人のロリっ子達に介抱され、死にそうな顔でニヤけていた。

そして――

「まさか、本当に始原龍を倒すだなんて……」
　横たわるミドガルズを見上げながら、未だ信じられないリディアが呆然と呟いた。
　ミドガルズの死体には、目を輝(かがや)かせたロゼが取り付き、活き活きした顔で囓っていた。
「レンチンが効いて何とかなったな！　もしアレが効かなかったら、核(かく)の出前を頼(たの)むしかなかったかもしれないな！」
「その出前だけは絶対に取らせませんよ。まあなんにしてもお疲(つか)れっス」
　ベリアルの言うレンチンとは、発火能力の派生となる技にリリスが命名したものだ。
　炎(ほのお)で攻撃(こうげき)するのではなく、生物の細胞(さいぼう)に働きかけて直接熱するとか言っていたが、ようは電子レンジの亜種(あしゅ)みたいな必殺技らしい。

コレを生物に使うと凄惨な絵面になるため、ベリアルもあまり使いたがらない大技だ。
目を覚ましたミドガルズは、まずトラ男に狙いを付けた。
腕を振るわれただけで重傷を負ったトラ男は迷う事なく切り札を切り、命を燃やして巨大化しミドガルズの頭を押さえた。
暴れ回るミドガルズの頭によじ登ったベリアルが、ありったけのニトロを使い全力で脳内をチンし、現在に至る。
——と、濡れタオルで顔を拭き終えたベリアルが、未だ呆然としているリディアの下へ歩いて行く。
あれだけの力を見せ付けられたリディアは、小さく震えたまま動けずにいた。

そんなベリアルの行動に皆がそれぞれの作業を止めて注視する。

これほどの偉業を成し遂げたベリアルが、どんな理不尽な事を言い出すのかと見守っていると。

「おいリディア。お前を悩ませた始原龍とやらは見ての通りぶっ殺してやったぞ」

大した事でもなさそうに言うベリアルに、リディアは一瞬呆気に取られ。

「は、はい！　その、これほどの恩を受け、あのような力を見せ付けられた以上、我が国はどんな額の報酬を請求されても、甘んじて……」

……と、そこまで言い掛けたリディアに向けて、ベリアルが無邪気に笑い掛け。

「トラ男がやらかした国宝強奪や誘拐その他。これで、全部相殺って事でいいな？」

予想外のその言葉に、リディアは信じられない者を見るように。

そして、既に諦めていたところに颯爽と現れたヒーローを見る目を向けて。

「……は、はい。はいっ！」

今までどこか張り詰めたような顔をしていたリディアが、年相応の笑顔を見せた——！

7

「はっあああああああああああああ!?　ミミミミ、ミドガルズを倒したですって!?」

城に凱旋した俺達を待っていたのは挙動のおかしいアデリーだった。

「おう、アイツのせいで代々この国の王様が命を落としていたんだってな。これにて一件落着ってヤツだ」
　アデリーの目が泳いでいる事から、ベリアルの行いはそれほど衝撃だったようだ。
「ていうかお前は何してたんだよ。石を交換する度に人が死んでたって知ってたか？　一応正義の味方を名乗ってるなら、お前らがアレを倒さなきゃいけないだろ」
「何言ってるのよ、貴方がナディア姫を見ているように言ったんでしょう!?　城でずっと構っていたら、キメラの子達が迎えに来たから……！　大体ミドガルズは人が倒せるような存在じゃないでしょう！」
　ああ、律儀にナディアの面倒を見てたのか。
「私達ですらアレには触れないように管理していたのに……。ど、どうしよ

う、始原龍の死が世界に与える影響は計り知れないはずで……。こ、こうしてはいられないわ……」
気になる事を呟きながらアデリーがフラフラと出て行くが、今は優先される事がある。
現在俺達が居る謁見の間では――
「姉上、いい加減どういう事なのか説明してくれ！　なぜミドガルズが倒されたんだ！　魔導石の交換に行ったんじゃなかったのか！」
問題が解決してスッキリした顔をしたリディアが、王子に問い詰められていた。
「目的は果たしたから、貴方に王座を譲ると言っているのよ。貴方は甘いところがあるから、そこをどうにか直しなさい。……そうね、性格が捻くれている部下がいたら、側近にするのをオススメするわ」

どうやら王子は魔導石交換の際、交換者が死亡する事を知らないようだ。
そしてこのツンデレな姉は、もう済んだ事を説明する気はないらしい。
「姉上！　この国をこれだけ引っかき回しておいて、そんな言い分が通るとでも思っているのか！　それに、私の部下に捻くれたヤツなどいない！　この国で一番捻くれている人物といえばそれは間違いなく姉上だろう！」
散々な言われようにリディアが肩を竦めながら。
「じゃあ王座を譲ってあげる代わりに、私を参謀にでも雇ってくれる？」
「はあ……！？」
からかうような笑みを浮かべ、でも楽しげなリディアの言葉に。
「……姉上、本気で王を降りる気なのか？」
冗談で言っているのではないと察したのだろう。
王子は困惑気味の表情を浮かべると、俺達へと向き直った。

王子は困惑気味の表情を浮かべると、俺達へと向き直った。

「貴方達に事情を聞いたところで、きっと教えてはくれないのだろうな」

いや、俺は別にペラペラ喋ってもいいんだけど。

とはいえ、王子の隣に立つツンデレ姫が人差し指を唇に当てて笑っているし、ここは言わないでおくのが優しさというものだろう。

何も言わない俺達に、リディアが苦笑を浮かべながら。

「キサラギの方々には随分助けられてしまったわね。我が国はこれから大変な苦労をする事になります。ミドガルズの恩恵を受けられなくなりましたから、これからは他の大地のように魔獣が集まって来るでしょう」

「本当に、何て事をしてくれたんだ姉上は。これから我が国はどうすれば……」

困り顔で頭を抱える王子の様子に、リディアがクスクス笑う。

「まあでもそれは些細な事です。建国した頃であればともかく、今の私達であればどうにでもなるでしょう。ご先祖様が、安全な土地を求めて彷徨っていた頃とは違います。長い年月が経った今、我が国には外壁もあれば精強な兵士もいますので……」

どこか憑き物が落ちたような表情で、リディアは笑みを浮かべると。

「魔獣の心配はいらないぞ。だってあたしが居るからな」

ベリアルが横から放った一言に、アリスがほうと感嘆の声を漏らす。

どういう意味なのか説明してくれと思っていると。

「リディア姫はウチの仕事を知ってるな？　つまりベリアル様は、こう言っているんだよ」

言いながら脇腹を肘で突いてくるアリスの言葉にさすがの俺も理解す

る。
　いつだったかグレイス王国の皆に言った、キサラギの営業文句を口にした。
「ベリアル様はこう言いたいんですよね。――戦闘員、いかがですか？　って」
　それを聞いたリディアが嬉しそうに笑み崩れると、王子もやれやれと肩を竦め――
「違うよ、何格好付けてんだ。あたしがこの国に残るって言ってるんだよ」
　空気を読まないベリアルがまたバカな事を言い出した。
　せっかく決めゼリフっぽく言ったのに否定され、俺はベリアルに反論する。
「じゃあどういう意味っスか！　この国で客将になるとか言わんでくださいよ!?」
　恥ずかしさでちょっと赤くなった顔を誤魔化すように、強い口調で言う俺に。
「なんで今さら客将なんだよ。あたしはここの王様だろ？」

当然といった面持ちで、ベリアルがどうしようもなくバカな事を言い出した。
このワガママな上司をどうやって説得しようかと悩(なや)んでいると。
「…………そういえばベリアル様は、魔導石を交換した後も王座を返還(へんかん)してないな」
アリスがポツリと漏らしたその言葉に、リディアと王子が固まった。
「……あ、あの、ベリアル様？　その冗談はさすがに笑えませんわ。ベリアル様は私達姉弟(きょうだい)を救うため、ミドガルズを倒してくれた英雄(えいゆう)ですよね？」
「オラァ！」
「痛アッ!?」
「姉上!?」
ベリアルにお伺(うかが)いを立てたリディアが突然(とつぜん)頬(ほお)を引っ叩かれた。

「いきなり何て事するんスかベリアル様、リディア姫が涙目（なみだめ）ですよ」

　だがベリアルは分かってないなとばかりに胸を張り、

「バカだな六号、お前は飴（あめ）と鞭（むち）って言葉を知らないのかよ。今のは脅（おど）しに近いやり方でお前達に依頼（いらい）を請（う）けさせた事への鞭だ。悪の組織で言う落とし前ってヤツだな」

「リディア姫の場合今までトラ男さんに苦労させられた分、飴だけで良かったと思うんですけど。あと、叩いた本音はヒーロー呼ばわりされたからでしょう」

　舐（な）められたら終わりの悪の組織にとって、落とし前は確かに大切だが空気ぐらいは読んで欲しい。

「あ、姉上、大丈夫（だいじょうぶ）ですか!?　なぜこのような輩（やから）を雇ったのですか……」

　と、頬を張られたリディアは目に涙を湛（たた）えながらも、敵対していた王子に

心配されるのがおかしいのか、やがてクスクスと笑い出す。
「ほら、コイツを見てみろよ。ちゃんと鞭の効果があっただろ？」
「違いますよ、単にこの人がドMなだけっス」
「そんな性癖はありません！　今の状況がおかしくて、つい笑ってしまっただけよ！」
　リディアは、咳払いをして居住まいを正すと。
「確かに私はキサラギの方々に対して、まだ謝罪もしていませんでしたね。幾ら追い詰められていたからと言っても、あのような仕事の頼み方をしてごめんなさい。でもそのおかげで、弟がこんなに素直になったわ。……本当に、ありがとう」
「姉上！　……まったく、あれだけ固執していた王座を突然譲る事といい、この者達の事といい、後で説明して貰いますからね」

難しい顔をしていた王子はそう言って、リディアと顔を見合わせ苦笑を浮かべた。
「オラァ！」
「ハブッ!?」
「マディア!?」
本当に空気を読まないベリアルが、今度は王子の頬を張る。
「やりたい放題にもほどがありますよベリアル様。今度は何が気に食わないんスか」
「良い話で収めようとしてるからだよ、あたしが王様だって言ってんだろ。……しょうがないなあ。じゃあ王座は返してやるから、その代わりキサラギに従属しろ。ちゃんと上納金を収めるんだぞ」
「ま、待て、そんな要求が通るわけがないだろう！　お前達は本当に何なん

だ、突然やって来て好き勝手やらかしたかと思えば従属しろだと？　我がグルネイド王国は歴史ある大国だ、理不尽にもほどがある！」
　王子がもっともな事を言ってくるが、この人に良識的な話は通じないんですよ。
「何が歴史ある大国だ。誰かを犠牲にしながら成り立つ国なんてとっとと滅んじまえばいい。何ならあたしが滅ぼしてやるよ。だってあたしは悪の組織の人間だからな」
「なっ……！」
　悪い顔をしたベリアルが口元に笑みを浮かべて言い放つと、思わず王子が絶句する。
　その物騒な物言いに、リディアがクスクスと笑い出した。

「従属ですか。王座を奪われている以上、それも仕方がないですね。それに、ベリアル様が本気になれば本当に滅ぼされてしまいますから」
「でもまあ、ウチに従属するのも悪い事ばかりじゃないぞ。この国がピンチになったらいつでも言ってくるといい。遠く離れた星の彼方からでも、必ずお前を助けに来てやる」
急にイケメンなセリフを吐くベリアルに、リディアの顔が赤くなる。
本当にこの人は、こういうタラシなところが油断出来ない。
「そうだ、鞭の次は飴をやらないとな」
ベリアルはそう言って、遠慮するリディアに小さな何かを握らせた。
「コレはICレコーダーって道具でな。あたし達が帰ったら、この再生ってボタンを押すといい。それと、必ず姉弟妹三人でいる時に押すんだぞ」

ベリアルとリディアのやり取りに、王子が不思議そうに首を傾げる中。
「これを仲良く聞き終わったらお前らの妹に聞いてみろ。国宝を奪いに来たトラ男に、どうして攫ってくれなんて言ったんだ、ってな」
そう言って悪い笑みを浮かべるベリアルを見ている内に、俺はＩＣレコーダーに何が録音されているのかに思い至った――

8

「――とまあそんなで、始原龍ミドガルズを華麗に倒した俺達は一人で苦しんでいたお姫様の悩みも解消し、グルネイドを従属させたってわけさ」
グルネイド王国から帰還してから一週間が経過した。

この間に旅の疲れを癒やした俺は、毎日理不尽な命令を下す上司から逃れるべく、バイパーの執務室でゴロゴロしていた。
書類にペンを走らせていたバイパーがその手を止めて微笑むと。
「それは大活躍でしたね。六号さん達がミドガルズを屠ったという話は、既にあちこちの街で噂になっているそうですよ」
同じく書類仕事をしていたアリスが、それを聞いてニヤリと笑い。
「おかげで、既に従属を申し出ていた国や自治都市が裏切る事は無さそうだ。ミドガルズってのはよほど有名な化け物だったらしく、戦勝祝いの使者が後を絶たねえ。これまで日和見だった都市や集落までウチに庇護を求めてきたな」
ベリアルが暴れた事で一気にウチの勢力圏が拡大し、俺達の名前も売れた。
結果的に全てが丸く収まってしまったが、もしやベリアルは全て計算ずく

でやっていたのだろうか？
「あの……ところで六号さん、ハイネがどこに行ったのか知りませんか？　ここのところずっと姿が見えないのですが……」
「ハイネならスノウと一緒にグルネイドに置いてきたよ。多分その内二人で協力しながら帰って来るよ」
「ど、どうしてグルネイドに!?　い、いえ、無事帰ってくるのであればいいのですが……」
あの二人はあれからずっとギスギスしていたので、もう自力で帰らせる事にした。
一緒に戦地を乗り越えればまた友情が芽生えるものだ。
面倒事が一つ減るので、アイツらにはもう一度仲良くなってもらいたい。
――と、その時だった。

「おい六号、今すぐ来い！　アリスでもいい、あたしを助けろ！」
穏やかに過ごしていたのに、訓練場がある方からベリアルの大声が聞こえてくる。
アリスと顔を見合わせ二人で向かうと、腰にグリムをまとわり付かせたベリアルが、顔を押しのけ引き剥がそうとしていた。
「コイツはお前の部下なんだろ！　鬱陶しいからどうにかしろ！」
ニトロの副作用で死にかけていたベリアルは、ここ数日でミドガルズとの戦いで折れた腕も綺麗にくっ付き、現地の部下ともすっかり打ち解けていたのだが――
「皆してあんまりよおおおお！　どうして？　どうして私は影が薄いの？　目が覚めたら全てが終わってたのは、これが初めてじゃないのよ!?

いい加減ちゃんと私も連れていきなさいよおおおおおおおおおお！」

「そんな苦情は六号に言え！　仕方ないだろ、お前はずっと死んでたんだし」

ベリアルに靴下を穿かされたせいで、今まで死んでいたグリムが暴れていた。

「それよ！　私を殺しておきながら、どうしてこんなに塩対応なの⁉　ベリアル様が最高幹部という事は、言ってみれば私のお義母さんみたいなものでしょう⁉」

「違うぞ」

素っ気なく否定されるグリムだが、アンデッド特有のしつこさでベリアルを放さない。

「そもそも一度死んだはずなのに、どうして復活してるんだよ。お前はこれ

から怪人ゾンビ女を名乗っていいぞ」
「い、嫌よ、そんな可愛くない称号は！　そうね……どうせあだ名を付けてもらえるのなら、もっとこう聖女的なキラキラしたのを……」
　夢見るように目を閉じて妙な事を口走るグリムを引き剥がし、ベリアルが俺に向けてクイクイと指を動かし呼び付ける。
「六号、ワイヤーを呼び寄せてくれ。面倒くさいから縛り上げて転がしておく」
「や、止めて！　私はそういう物理的な制圧には弱いのよ！　分かったわ、もうワガママ言わない！　だから……」
　俺が呼び寄せたワイヤーで何か言い掛けたグリムを縛り、ついでに猿ぐつわを噛ませたベリアルが付いて来いと手招きした。

れを噛ませたペーテルが付いてこいと手招きした
グリムを放置しベリアルの後を付いて行くと、着いたのは転送室だった。
まさかとは思うがこの人は、怪我が治ったばかりでもう地球に帰る気なのか。
「ひょっとしてもう帰るんスか？　怪人のトラ男さんですらまだ入院中なんですから、ベリアル様もゆっくり休んだって罰は当たんないでしょう。こないだ来たリリス様みたいに、もっとダラダラと遊んでていいんスよ？　俺達と楽しく暮らしましょうよ」
「アイツと一緒にするんじゃない、もう体も治ってるのに遊んでなんかいられるか。ていうか、地球から呼び出しが掛かったんだよ。単独でも厄介なバッタ型ヒーローが戦隊を組もうとする動きがあるんだと。そんなのあたしですらヤバいだろ」
それは確かに凄くヤバい。

どのぐらいヤバいかと言うと、ミドガルズが可愛く見えるぐらいにヤバい。
しかし……。
「つれないっスよベリアル様。久しぶりに会ったのにバタバタしてて、ロクに話す事すら出来なかったじゃないですか。いっそここに残りませんか？　もっと一緒に遊びたいっス」
俺がついつい本音を漏らすと、ベリアルが複雑そうな表情で。
「……お前はなんて言うか、無自覚なたらしだよな。どうせリリスにもそんな事言ったんだろ。アイツ、地球に帰って来た時は大分浮かれていたからな」
「たらしはベリアル様の方でしょう。っていうかリリス様にはこんな事言ってませんよ、帰る際には特に引き留めもしませんでしたし」
というかリリスが残っていてもあまり役に立つ気がしない。
むしろ、ワガママばかりを言い出して、邪魔にしかならないまである。

そんな俺の思考が漏れたのか、ベリアルが小さく笑みを浮かべ

「そっか。まあ、お前とリリスは兄妹みたいな関係だったしな。でもさっきみたいなセリフはあたしじゃなくて、アスタロトに言ってやれ」

「アスタロト様にそんな事言ったら、バカ言ってないで働けって怒られますよ。ただでさえ最近、通信画面で顔見る度に機嫌悪そうなんですから」

ベリアルは再び複雑そうな表情を浮かべると。

「……アスタロトも不器用だけど、お前も大概だよなあ」

そう言って胸元をキュッと軽く握り息を吐く。

と、急に真面目な顔になったベリアルが、姿勢を正して声を張る。

「命令！」

ベリアルの一言に、俺とアリスは背筋を伸ばして気を付けの姿勢を取っ

た。
「今回の事でキサラギの領土は大きく拡大された。だが、まだまだ足りてない。アスタロトからの伝言だ。地球に残された時間は少ないそうだ。侵略を急げとさ」
地球に残された時間って何だよ、どうしてそう気になる事を言ってくるんだ。
しかし、深く知ってしまうともう逃げられなそうで聞きたくない。
俺の顔からそんな心情を読み取ったのか、ベリアルが小さく笑った。
「向こうの事は気にするな。お前達は死なない程度に頑張ればいい。犠牲になったトラ男の分、お前達だけでも生き残れよ」
「トラ男さんは医療室で入院中なだけですよ。どうしてあの人を殺したがるんスか」

るんだ」
　トラ男は三度に及(およ)ぶ巨大(きょだい)化でも命を繋(つな)ぎ、ロゼとラッセルに看病されながらずっと眠(ねむ)り続けている。
　アリスによるとそろそろ目を覚ましてもおかしくないそうだが、ナディア姫と別れの挨拶(あいさつ)もさせずに持ち帰ってきたので、起きたら面倒臭(めんどうくさ)い事になるのは間違(まちが)いない。
　ベリアルは俺とアリスの頭に手を乗せて、グリグリと乱暴に撫(な)で付(つ)けながら。
「じゃあな。短い間だったけど、まあそこそこ楽しかったよ。バッタ型ヒーローが相手だから準備も要るし、もう行くよ」
「あれだけやりたい放題やっといてそこそこって何ですか。というか、ベリアル様はもう少し落ち着きましょうよ。どうしてそう生き急ぐんスか、心配させないでくださいよ」

俺に問われたベリアルは、一瞬(いっしゅん)何かを言おうとして、困ったように苦笑すると——

「……あっさり行っちまったな。もうちょっとこう、昔みたいに遊びに行ったり、イチャついたりしたかったのに、ベリアル様はつれないな」

結局何も言わずに転送装置に入り込んだベリアルは、アリスの手により地球に帰った。

「……お前さんにはそう見えたのか。まあ、ベリアル様もこれ以上ここに居ると色々ヤバいと思ったんだろうな」

「ああ、そういえば言ってたな、バッタ型ヒーローが戦隊を組もうとしてるって。そりゃあヤバいなんてもんじゃねーわ」

地球の皆を心配する俺に向け、アリスが何か言いたそうな表情を浮かべている。

「そういう意味でヤバいって言ったんじゃないんだが、まあいいか　。ところ

で六号、気付いていたか？」

「……？　気付いたって、一体何を？」

アリスは空になった転送装置を眺めながら。

「何だかんだで最後には大きく領土を広げた事といい、グルネイド王族の姉弟間のしがらみも解決した事といい……。ベリアル様は記憶の一部が戻ってるだろ」

幕間⑤　――そして私は異星に向かう――

「ど、どうしたんだベリアル、いきなり泣かれるとビックリするよ！　何か大事な事でも思い出した!?」
涙でぼやける視界の中に、リリスが慌てる姿が映った。
ゆっくりと身を起こし辺りの様子を確認すると、ここがリリスの研究室だと分かる。
「いや、思い出したと言うか……」
随分と長い夢を見ていた。
アスタロトが秘密結社キサラギを作り、リリスと彼が加わった。
最初はうまくいかない事ばかりだったけど、徐々に結社が大きくなった。
その分敵対勢力も増えたけど、それ以上に仲間が増えた。

このままずっとうまくいくと思っていた。

最初の頃は、あれだけ喧嘩していたアスタロトと彼が、仲良くなっていく姿を見るのは嬉しかったし、苦しかった。

アスタロトは大事な親友だから、彼と仲良くなってくれて嬉しかった。

彼も大事な親友だから、アスタロトと彼が仲良くなっていくのが苦しかった。

どうして胸が苦しいと感じるのか、その理由が分かっているのに、今の関係を壊したくなくて気持ちに嘘を吐く、弱い自分が嫌いだった。

それでも、皆と一緒に居るのは楽しくて、このままずっと続けばいいと願っていて——

ヒーローとの戦いで彼が大怪我を負わなかったら、きっとあのまま続いていた。

改造手術を受けて眠る彼を見て、私も手術を受ける事を決めた。
「ねぇベリアル、辛(つら)いならもう止めよう。無理に思い出す事はないよ」
皆を守る力が欲しい。弱い自分とは真逆の性格の、誰(だれ)もが頼(たよ)る、強い人に——
脳の容量を多く使うほど強い力を得られると説明を受けた。
そして私は、リリスがギリギリを狙(ねら)ったと自慢(じまん)する、脳の容量設定のダイヤルを——
「あっ」
「……？　急に変な声を出してどうしたの？　ねえ、記憶の方は大丈夫(だいじょうぶ)？」
…………………今の私は強くなったと言えるだろうか？

戦う事に関してはキサラギで最も強い力を得られたけれど、まだ心まで強くなれたとは思っていない。
　もう一度彼に会おう。そして、本当に強くなれたと実感出来たら、その時は――
「ねえ、さっきの『あっ』て何!?　おいベリアル、こっち見ろ！」

エピローグ

転送装置の前に立つアスタロトとリリスに向けて、ベリアルが笑みを浮かべ。

「ただいま」

「ただいまじゃないよ、こっちは大変だったんだぞ。ベリアルが留守にしている事がどっからか漏れて、ヒーロー達が反撃に出てきたんだからね」

能天気な挨拶を交わすベリアルに、リリスが口を尖らせた。

「キミに連絡を取ろうとしてもなぜか転送機は機能しないし、アジト街に連絡を取れば迷子になったと言われるし。挙げ句の果てには、怪我を負ったからしばらくの間向こうに残るって、一体何を相手にしてきたんだ」

「始原龍とかいうバカデカいドラゴンを六号と一緒に狩ってきたんだ。お土産としてサンプルを持ってきたから、好きなように使ってくれよ」
　ベリアルの言葉を受けて、なぜかリリスが固まった。
「へ、へえ？　モンパンみたいに、アイツと一狩りしてきたんだ。しかもドラゴンを」
「ああ、他にも色んな魔獣を相手に暴れてきた。蛮族も蹴散らしたし、周辺国を幾つか従属させたりもした。詳しくは報告書を読んでくれよ」
　色んな魔獣を相手に大暴れ……と、どこか羨ましそうな顔でブツブツ言い出したリリスの横で、アスタロトが優しく微笑む。
「本当にお疲れ様。リリスと違って、迷子になってもちゃんと結果を出してく

その[illegible]らしいわね」
「あっ！　ちょ、ちょっと待って、その言い方だと僕が無能みたく聞こえるんだけど！」
　心外だと言わんばかりのリリスだが。
「六号が言ってたけど、お前向こうで大分遊び呆(ほう)けてたみたいだな。アイツ、リリスが帰る際には特に引き留めもしませんでしたって言ってたぞ」
「あの野郎(やろう)！　ちょっとベリアル、そこどいて！　今から現地に行ってくる！」
　そう言って転送装置に入ろうとするリリスの首根っこをアスタロトが捕(つか)まえた。
「バッタ型ヒーローが集結しているこの状況(じょうきょう)で行かせないわよ」

「すぐ帰ってくるから行かせてくれ、アイツを折檻してやらないと」
アスタロトに掴まれた白衣を器用に脱ぎ捨て、転送装置に駆け込もうとしたリリスが、今度はベリアルに捕獲される。
「お前を向こうに行かせたら絶対帰って来ないだろ。あたし達がヒーローを撃退するまで、そのまま遊び呆けるつもりだろ」
「そんなわけないだろ、それじゃ僕がヒーローにビビってるみたいじゃないか。ゲーマーでもないベリアルがドラゴン狩ったのが悔しいのさ。僕も一狩り行ってくる」
「ドラゴンの前にヒーローを狩りに行きなさい。本音を言えば私だって、現地に行きたいのを我慢してるんだから……」
そう言ってため息を吐くアスタロトに、リリスがニヤニヤと笑みを浮かべ。
「だから最近キミの機嫌が斜めなんだね。そんなに六号に会いたいのなら、

ちょっとぐらい遊びに行けばいいのに」
「部下が戦ってるのに六号に会いに行くだなんて、そんなわけにはいかな……。……ちょっと何を言っているのか分からないわ。早く戦闘準備に入りなさい」
　そっぽを向いてリリスを促すアスタロトに、ベリアルが思い出したように言ってくる。
「そういえば六号が、アスタロトが最近機嫌が悪いって気にしてたぞ。画面越しでも、たまに顔合わせる時ぐらい優しくしてやれよ。でないと現地人に盗られちまうぞ」
「えっ!?　アイツ、そんな事言ってたの？　そ、そう。まあ戦闘員にやる気を出させるのは幹部の仕事だし、そのぐらいは……」

画面越しでもちゃんと見て貰えていた事が嬉しいのか、口元が緩むアスタロト。
それを複雑そうな顔で見ていたベリアルが、思い出したように呟いた。
「……ああ、頼むよ。でないと、また六号が『いっそここに残りませんか？もっと一緒に遊びたいっス』だの、『俺達と楽しく暮らしましょうよ』だの、あたしを口説こうとしてくるからな」
「「!?」」
突然の爆弾発言にアスタロトとリリスが動きを止める。
「そういえばさっき、僕が帰る際には引き留めもしなかったって言ったよね」
リリスの小さな呟きに、アスタロトがビクリと震えた、その時だった。
『ヒーロー警報！　ヒーロー警報！　集結を終えたバッタ型ヒーローが襲撃の動きを見せています！　怪人、幹部の方達は、至急迎撃態勢に移って

ください！』

キサラギ本部内に警報が鳴り響き、ヒーローによる敵襲が知らされる。

それを聞いたベリアルが、背負っていた土産をその場に下ろし、体を解すように肩を回した。

そんなベリアルの背中に向けて。

「ねえベリアル、僕最近思うんだけどさ。キミってちょっと変わったよね？なんかバカっぽさが抜けたっていうか、どこが変わったかって言われると、上手く説明出来ないんだけど。現地に行って何かあった？　帰って来た時、ちょっとスッキリした顔していたし」

リリスの言葉を背に受けて、柔軟を終えたベリアルが振り返り。

「向こうで大怪我負ったからな。そのショックで記憶が戻ったのかもしれないぞ」

からかうような笑みを浮かべ、迎撃のために駆け出した。

「そんなのは後にして、私達も行くわよリリス！」

「ええ!?　だって気にならないの!?　アイツ、記憶が戻ったのかもって言ったよ！　現地で何かあったんだって！　六号絡みの何かがさ！」

ベリアルの背中を追い掛けながら、アスタロトがリリスに言い返す。

「気にならないわけがないでしょう！　まずはヒーローを何とかするわよ、それからジックリ問い詰めるの！」

「ちょっと怖いよアスタロト！　そんなんだから六号に不機嫌呼ばわりされるんだ！」

二人の言い合いを背に受けながら。

溢れてくる笑みをそのままに、ベリアルがヒーローの下へと突っ込んだ

――！

あとがき

このたびは、『戦闘員、派遣します！』7巻を手に取っていただきありがとうございます、作者の暁なつめです。
久しぶりの新刊です。
どのぐらい久しぶりかと言うと、前巻発売から一年半ほど経ってます。
作者が遊び呆けていたとかそういうわけではないのですが、戦闘員の円盤特典を書いたり、監修したりと、書籍以外の仕事を頑張ってました。
そう、円盤です。
この本が発売されるまでの間に、戦闘員のアニメが放送されました！
結構アニメに携わっている作者ですが、毎度こればかりは慣れません。
コロナ禍においてアフレコ作業も大変な中、スタッフの皆様が素晴らしい

アニメを作ってくれました、興味のある方はぜひご覧になってくださいませ。

そして今巻ですが、カバーイラストの通りベリアル巻です。

元は名家のご令嬢でしたが、改造手術により性格が真逆になってしまった幹部です。

まだ完全に記憶と人格を取り戻したわけではない彼女ですが、今後に期待です。

ベリアルに関してはまだ謎にしている設定が多く、ワーカホリック気味な事にも理由があるのですが、それはまた今後明かされるのではないかと思います。

リリスに関しては大した設定はありません、今後もずっとあんな感じです。

多分毎日ポテチ食いながら、漫画読んだりゲームする合間に仕事してま

す。

今巻では始原龍なんてものも現れましたが、ラスボスを倒（たお）した後の周回プレイに出てくるような、ゲームの裏ボス的な存在だったりします。

そんなのが先に倒されてしまった世界がどうなるか、ぜひ続巻を期待して、応援（おうえん）して頂けるとありがたいです。

——というわけで、今巻も何度も締め切り（しめきり）をぶっちぎり、色んな方々に多大なご迷惑（めいわく）をお掛けしました。

なんか毎回謝っている気がしますが、カカオ・ランタン先生をはじめ担当さんやデザインさん、校正さんに営業の方々、そして関係者の皆様のおかげでどうにか刊行する事が出来ました。

出版に携わってくれた皆様に、お詫（わ）びとお礼の言葉を言いつつ。

この本を手に取ってくれた全ての読者の皆様に、あらためて、深く感謝

を！

暁　なつめ

著者 暁 なつめ

福井県、越前市出身のかいわれ農家。
自粛生活で人に会えない寂しさから、台所でかいわれ大根を飼い始める。
名前を付けて育てるうちに食べるのが惜しくなるかなと予想するも、特にそんな事もなく美味しくいただく。
かいわれで孤独を癒やす事は出来ないと分かり、現在犬型ロボット購入を検討中。
副業で作家をやってます。

イラスト カカオ・ランタン

家にお迎えするペット、
クモ=デストロイヤーに蛇=バイパー（怪人ヘビ女）と戦闘員にゆかりがある生き物が多い気がしてる今日この頃です。
しかも蛇が赤目白蛇と黒蛇って完全バイパーちゃんカラーという事に気が付きました…！

７巻も本文と一緒にイラストもお楽しみ頂けると嬉しいです！

カバーイラスト／カカオ・ランタン

正義の使者を名乗るパチもん集団ヒイラギに、悪の鉄槌を食らわせた六号。資源回収にも成功し、一件落着かと思いきや、二足歩行でにゃーと鳴く、ネコ科の恐ろしく強い魔獣がとある国宝を強奪した知らせが届いてしまう。さらに、アジトにやってきたカチワリちゃんからの救援依頼——VSドラゴン!?
てんてこ舞いのこの状況にアリスは——キサラギ最強戦力、ナチュラルにエロを振りまくエロ上司【業火のベリアル】を召喚！　彼女の手にかかればドラゴンも瞬殺、どんな問題もサクッと解決——かと思いきや、あのアリスも青ざめるほどの事態に!?
国交？平和？キサラギの原点は「侵略」だ！　怒涛の第７巻！